

豊橋市埋蔵文化財調査報告書第84集

西側遺跡(II)

牛川西部土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書



2006年3月

豊橋市教育委員会

豊橋市埋蔵文化財調査報告書第84集

にし がわ
西側遺跡(II)

牛川西部土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書

2006年3月

豊橋市教育委員会

例 言

1. 本書は、豊橋市牛川町字西側73番地他において牛川西部土地区画整理事業に伴い事前に実施した西側遺跡の発掘調査報告書である。調査期間は平成15年5月9日～12月26日で、調査面積は6,500㎡である。
2. 発掘調査については、豊橋牛川西部土地区画整理組合から委託を受けた豊橋市教育委員会が行い、小林久彦（教育部美術博物館）が担当した。
3. 発掘調査に際して、多くの土地所有者をはじめ、地元の方々のご理解・ご協力を頂いた。また、資料調査及び本書の執筆に際して、出土遺物については前田清彦（豊川市教育委員会）・鈴木とよ江（西尾市教育委員会）・塚本和弘（菊川市教育委員会）・藤澤良祐（愛知学院大学）の各氏にご教示を頂いた。石材の同定については、家田健吾氏（豊橋市地下資源館）をお願いした。墨書土器の赤外線撮影には、(財)愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センターのご協力を得た。また、地下式坑については野澤則幸氏（名古屋市見晴台考古資料館）・江崎武氏にご教示を頂いた。記して感謝の意を表す次第である。
4. 報告書の作成については、岩本佳子（豊橋市教育委員会嘱託員）・井上佳子・平賀静子・河合厚子・補永亨代・大谷孝世・安田明己・原田祥子の援助を受けた。写真撮影については、発掘調査・出土遺物は小林が行ったが、航空写真は株式会社パスコに委託して行った。
5. 本書の執筆及び編集は小林が行った。
6. 調査区に使用した座標は、国土交通省告示に定められた平面直角座標第Ⅶ系に準拠し、これを示した。本書に使用した方位はこの座標系に沿うものである。遺構・遺物のスケールについてはそれぞれに明示した。写真の縮尺は任意である。
7. 調査にあたって作成した写真・カラーズライド・実測図等の記録や出土遺物は、豊橋市教育委員会において保管・管理している。

目 次

第1章 遺跡の立地と歴史的環境

- 1. 遺跡の立地 1
- 2. 歴史的環境 3

第2章 調査の目的と経過

- 1. 調査の目的と方法 6
- 2. 調査の経過 7

第3章 竪穴住居・掘立柱建物

- 1. 概観 10
- 2. 竪穴住居・掘立柱建物 10
- 3. 竪穴住居・掘立柱建物出土の遺物 40

第4章 井戸

- 1. 概観 67
- 2. 井戸 67
- 3. 井戸出土の遺物 69

第5章 溝

- 1. 概観 73
- 2. 溝 73
- 3. 溝出土の遺物 87

第6章 土壌

- 1. 概観 124
- 2. 土壌他 124
- 3. 土壌他出土の遺物 155
- 4. 表土他出土の遺物 188

第7章 総括

- 1. 西側遺跡の遺構変遷 200
- 2. まとめにかえて 205

- 報告書抄録 206

挿 図 目 次

第1図	西側遺跡位置図（1／20,000）	1
第2図	西側遺跡周辺地形図（1／15,000）	2
第3図	西側遺跡周辺の遺跡分布図（1／25,000）	4
第4図	調査区位置図（1／2,500）	6
第5図	調査区全体図（1／500）	8
第6図	遺構位置図－1（1／250）	12
第7図	遺構位置図－2（1／250）	13
第8図	遺構位置図－3（1／250）	14
第9図	遺構位置図－4（1／250）	15
第10図	遺構位置図－5（1／100）	16
第11図	遺構実測図－1（1／60・1／30）	17
第12図	遺構実測図－2（1／60・1／30）	19
第13図	遺構実測図－3（1／60・1／30）	21
第14図	遺構実測図－4（1／60・1／30）	23
第15図	遺構実測図－5（1／60・1／30）	25
第16図	遺構実測図－6（1／60・1／30）	27
第17図	遺構実測図－7（1／60・1／30）	29
第18図	遺構実測図－8（1／60・1／30）	31
第19図	遺構実測図－9（1／60・1／30）	33
第20図	遺構実測図－10（1／80）	35
第21図	遺構実測図－11（1／80）	37
第22図	遺構実測図－12（1／100）	39
第23図	出土遺物実測図－1（1／3）	41
第24図	出土遺物実測図－2（1／3）	43
第25図	出土遺物実測図－3（1／3）	45
第26図	出土遺物実測図－4（1／3）	47
第27図	出土遺物実測図－5（1／3）	49
第28図	出土遺物実測図－6（1／3）	51
第29図	出土遺物実測図－7（1／3）	53
第30図	出土遺物実測図－8（1／3）	55
第31図	出土遺物実測図－9（1／3）	57
第32図	出土遺物実測図－10（1／3）	59
第33図	出土遺物実測図－11（1／3・1／6）	61
第34図	遺構実測図－13（1／80）	68
第35図	出土遺物実測図－12（1／3）	70

第36図	遺構実測図-14 (1/100)	75
第37図	出土遺物実測図-13 (1/3)	89
第38図	出土遺物実測図-14 (1/3)	91
第39図	出土遺物実測図-15 (1/3)	93
第40図	出土遺物実測図-16 (1/3・1/6)	95
第41図	出土遺物実測図-17 (1/3)	97
第42図	出土遺物実測図-18 (1/3)	98
第43図	出土遺物実測図-19 (1/3・1/6)	100
第44図	出土遺物実測図-20 (1/3・1/6)	102
第45図	出土遺物実測図-21 (1/3)	103
第46図	出土遺物実測図-22 (1/3)	105
第47図	出土遺物実測図-23 (1/3)	107
第48図	出土遺物実測図-24 (1/3)	109
第49図	出土遺物実測図-25 (1/3)	111
第50図	出土遺物実測図-26 (1/3)	113
第51図	出土遺物実測図-27 (1/3)	115
第52図	出土遺物実測図-28 (1/3・1/6)	117
第53図	W~AB-11・12区平面・断面・見通し図-1 (1/100)	125
第54図	W~AB-11・12区平面・断面・見通し図-2 (1/100)	126
第55図	遺構実測図-15 (1/80)	129
第56図	遺構実測図-16 (1/80)	131
第57図	遺構実測図-17 (1/80)	133
第58図	遺構実測図-18 (1/80・1/30)	136
第59図	遺構実測図-19 (1/80)	138
第60図	遺構実測図-20 (1/80・1/30)	144
第61図	遺構実測図-21 (1/80・1/30)	148
第62図	遺構実測図-22 (1/80)	152
第63図	出土遺物実測図-29 (1/3・1/6)	157
第64図	出土遺物実測図-30 (1/3)	159
第65図	出土遺物実測図-31 (1/3)	161
第66図	出土遺物実測図-32 (1/3・1/6)	163
第67図	出土遺物実測図-33 (1/3)	167
第68図	出土遺物実測図-34 (1/3)	169
第69図	出土遺物実測図-35 (1/3)	173
第70図	出土遺物実測図-36 (1/3)	175
第71図	出土遺物実測図-37 (1/3・1/6)	177

第72図	出土遺物実測図-38 (1/3)	181
第73図	出土遺物実測図-39 (1/3)	183
第74図	出土遺物実測図-40 (1/3)	187
第75図	出土遺物実測図-41 (1/3)	189
第76図	出土遺物実測図-42 (1/3)	191
第77図	調査区遺構変遷図-1 (1/800)	202
第78図	調査区遺構変遷図-2 (1/800)	203

別 図 調査区全体図 (1/250)

表 目 次

第1表	出土遺物 (S B) 観察表	63
第2表	出土遺物 (S E) 観察表	72
第3表	出土遺物 (S D) 観察表	118
第4表	出土遺物 (S K) 観察表	193
第5表	出土遺物 (表土他) 観察表	199
第6表	竪穴住居規模等一覧表	200

写真図版目次

1-1 調査区 (A区) 全景 (垂直)	2 調査区 (A区) 全景 (北東から)
2-1 調査区 (B区) 全景 (垂直)	2 調査区 (B区) 全景 (南西から)
3-1 T~V-13・14区 S B-12~15 (南から)	2 Z・AA-12~14区 S B-16~19・21・22 (西から)
4-1 調査前風景 (南西から)	2 調査前風景 (北から)
3 発掘作業風景 (南西から)	
5-1 V~W-7~10区付近全景 (南から)	2 V・W-7・8区付近全景 (南から)
3 U・V-9~11区付近全景 (南から)	
6-1 T~V-11~13区付近全景 (北東から)	2 Y・Z-8・9区付近全景 (南から)
3 Z・AA-12~14区付近全景 (南から)	
7-1 Z~AC-11~15区付近全景	2 X~AA-13~15区付近全景 (南から)
8-1 S B-01 全景 (南から)	2 S B-01 土層断面 (南から)
3 S B-01 遺物出土状況-1 (南から)	4 S B-01 遺物出土状況-2 (東から)
9-1 S B-02 全景 (南から)	2 S B-02 全景 (東から)
3 S B-02 遺物出土状況-1 (南から)	4 S B-02 遺物出土状況-2 (南から)

- | | |
|------------------------------------|-------------------------------------|
| 10-1 S B - 0 3 全景 (南から) | 2 S B - 0 3 全景 (北から) |
| 3 S B - 0 3 遺物出土状況-1 (北東から) | 4 S B - 0 3 遺物出土状況-2 (南から) |
| 5 S B - 0 4 掘り下げ状況 (北から) | |
| 11-1 S B - 0 4 全景 (南から) | 2 S B - 0 4 土層断面 (北から) |
| 3 S B - 0 4 遺物出土状況-1 (南から) | 4 S B - 0 4 遺物出土状況-2 (西から) |
| 12-1 S B - 0 5 全景 (南から) | 2 S B - 0 5 遺物出土状況 (東から) |
| 3 S B - 0 6 全景 (東から) | 4 S B - 0 6 全景 (北東から) |
| 5 S B - 0 7 全景 (南から) | 6 S B - 0 7 竈付近状況 (西から) |
| 13-1 S B - 0 8 全景 (南から) | 2 S B - 0 8 遺物出土状況 (東から) |
| 3 S B - 1 0 全景 (南から) | 4 S B - 1 0 竈付近状況 (西から) |
| 5 S B - 1 1 全景 (南から) | 6 S B - 1 1 全景 (東から) |
| 14-1 S B - 1 2・1 3 全景 (南西から) | 2 S B - 1 2 全景 (南東から) |
| 3 S B - 1 2 土層断面-1 (北西から) | 4 S B - 1 2 土層断面-2 (北西から) |
| 5 S B - 1 2 竈付近状況 (南から) | 6 S B - 1 2 遺物出土状況-1 (東から) |
| 7 S B - 1 2 遺物出土状況-2 (東から) | |
| 15-1 S B - 1 3 遺物出土状況-1 (西から) | 2 S B - 1 3 遺物出土状況-2 (南から) |
| 3 S B - 1 4 全景 (南東から) | 4 S B - 1 4 全景 (北東から) |
| 16-1 S B - 1 5 全景 (東から) | 2 S B - 1 5 遺物出土状況 (南から) |
| 3 S B - 1 5 竈・遺物出土状況 (南から) | 4 S B - 1 6 遺物出土状況-1 (南から) |
| 5 S B - 1 6 遺物出土状況-2 (東から) | |
| 17-1 S B - 1 8・1 9 全景 (南から) | 2 S B - 1 8・1 9 全景 (東から) |
| 3 S B - 1 8 竈検出状況 (南から) | 4 S B - 1 9 竈検出状況 (南から) |
| 18-1 S B - 1 9 遺物出土状況-1 (南から) | 2 S B - 1 9 遺物出土状況-2 (東から) |
| 3 S B - 2 0 遺物出土状況 (南から) | 4 S B - 2 2 S K - 106 粘土検出 (北から) |
| 5 S B - 2 2 遺物出土状況-1 (東から) | 6 S B - 2 2 遺物出土状況-2 (東から) |
| 19-1 S B - 2 1・2 2 全景 (東から) | 2 S B - 2 1・2 2 全景 (北から) |
| 3 S B - 2 3 全景 (南から) | 4 S B - 2 3 全景 (西から) |
| 20-1 S B - 2 5 全景 (東から) | 2 S B - 2 5 遺物出土状況-1 (南から) |
| 3 S B - 2 5 遺物出土状況-2 (南から) | 4 S B - 3 0 全景 (東から) |
| 21-1 S B - 3 5 全景 (南から) | 2 S B - 3 6・3 7 全景 (南から) |
| 3 S B - 3 8・3 9 全景 (南から) | |
| 22-1 柱穴AA-8区 S K - 50 (南から) | 2 S B - 3 7 柱穴Z-8区 S K - 119 (南から) |
| 3 S B - 2 9 柱穴U-10区 S K - 54 (南から) | 4 S B - 2 9 柱穴V-10区 S K - 114 (西から) |
| 5 S D - 2 8・2 8-2 部分 (T-12区北から) | 6 S D - 2 8・2 8-2 部分 (T-12・13区南から) |
| 7 S D - 3 0 部分 (V・W-12区南から) | |
| 23-1 S D - 6 3 全景-1 (垂直) | 2 S D - 6 3 全景-2 (南から) |

- 3 SD-63 全景-3 (北から)
- 5 SD-63 土層断面-2 (北から)
- 7 SD-45・49 全景 (南から)
- 24-1 SE-02 全景 (南から)
- 3 SE-03 土層断面 (南から)
- 5 SE-04 土層断面 (北から)
- 25-1 V-9区SK-67 堅坑 (北西から)
- 3 V-9区SK-67 断割り (南西から)
- 5 U-12区SK-8 断割り (西から)
- 7 V-12区SK-7 断割り (南から)
- 26-1 円形土壌群全景 (垂直)
- 3 円形土壌群全景-2 (南から)
- 5 円形土壌群全景-4 (南から)
- 7 X-11区SK-56 断割り (南東から)
- 27-1 Y-11区SK-13 主室落ち込み (南から)
- 3 Y-11区SK-66 作業風景 (南から)
- 5 Z-10区SK-20 全景 (北から)
- 7 X-12区SK-4 断割り (南西から)
- 28-1 Z-9区SK-46 遺物出土状況 (東から)
- 3 T-14区SK-73 遺物出土状況 (南から)
- 5 U-16区SK-57 全景 (南から)
- 7 W-16区SK-57 遺物出土状況 (南から)
- 29-1 Y-12区SK-40 遺物出土状況 (南から)
- 3 W-14区SK-100 検出状況 (東から)
- 5 W-13区SK-72 遺物出土状況 (南から)
- 7 SZ-01 (AB-11区SK-25) 全景 (南東から)
- 30 出土遺物 (SB) - 1
- 31 出土遺物 (SB) - 2
- 32 出土遺物 (SB) - 3
- 33 出土遺物 (SB) - 4
- 34 出土遺物 (SB) - 5
- 35 出土遺物 (SB) - 6
- 36 出土遺物 (SB・SE) - 7
- 37 出土遺物 (SD) - 8
- 38 出土遺物 (SD) - 9
- 39 出土遺物 (SD) - 10
- 4 SD-63 土層断面-1 (南から)
- 6 SD-45 全景 (北西から)
- 2 SE-02 土層断面 (南から)
- 4 SE-04 全景 (南から)
- 6 SE-05 土層断面 (北から)
- 2 V-9区SK-67 主室断割り (西から)
- 4 U-12区SK-8 堅坑 (南から)
- 6 V-12区SK-7 堅坑 (南から)
- 8 W-12区SK-1 全景 (南西から)
- 2 円形土壌群全景-1 (南から)
- 4 円形土壌群全景-3 (南から)
- 6 X-12区SK-20・X-11区SK-56 (南から)
- 2 Y-11区SK-13 断割り (東から)
- 4 Y-11区SK-66 断割り (南東から)
- 6 Z-11区SK-29 断割り (南西から)
- 8 X-12区SK-10 断割り (南東から)
- 2 V-7区SK-9 遺物出土状況 (北から)
- 4 U-14区SK-197 遺物出土状況 (北西から)
- 6 W-16区SK-27 遺物出土状況 (西から)
- 8 SZ-02 (V-18区SK-23) 遺物出土状況 (南から)
- 2 X-13区SK-20 遺物出土状況 (南から)
- 4 W-14区SK-100 遺物出土状況 (南西から)
- 6 AA-11区SK-23 遺物出土状況 (南から)

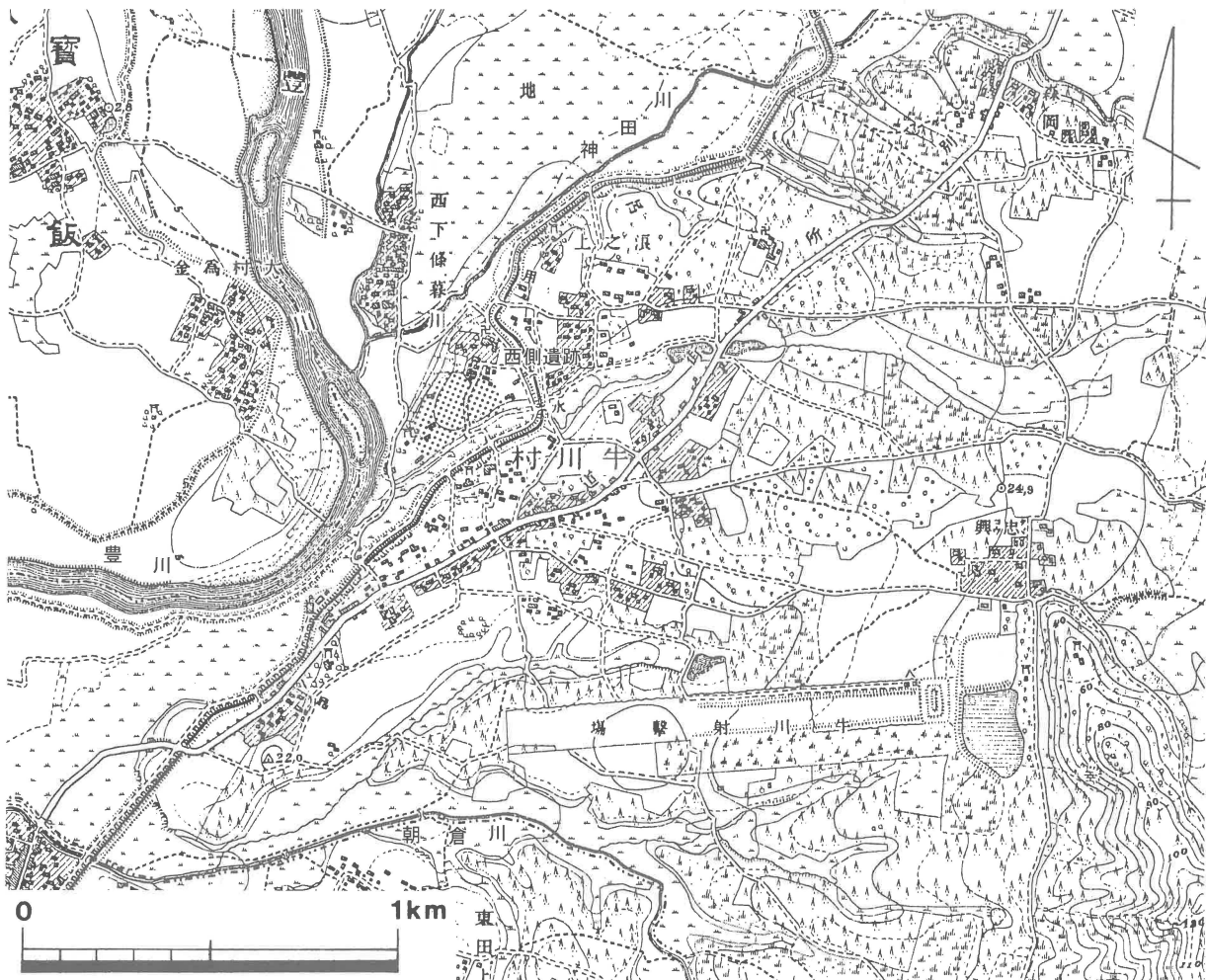
- 40 出土遺物 (S D) - 11
- 41 出土遺物 (S D) - 12
- 42 出土遺物 (S D) - 13
- 43 出土遺物 (S D) - 14
- 44 出土遺物 (S K) - 15
- 45 出土遺物 (S K) - 16
- 46 出土遺物 (S K) - 17
- 47 出土遺物 (S K) - 18
- 48 出土遺物 (表土他) - 19

第1章 遺跡の立地と歴史的環境

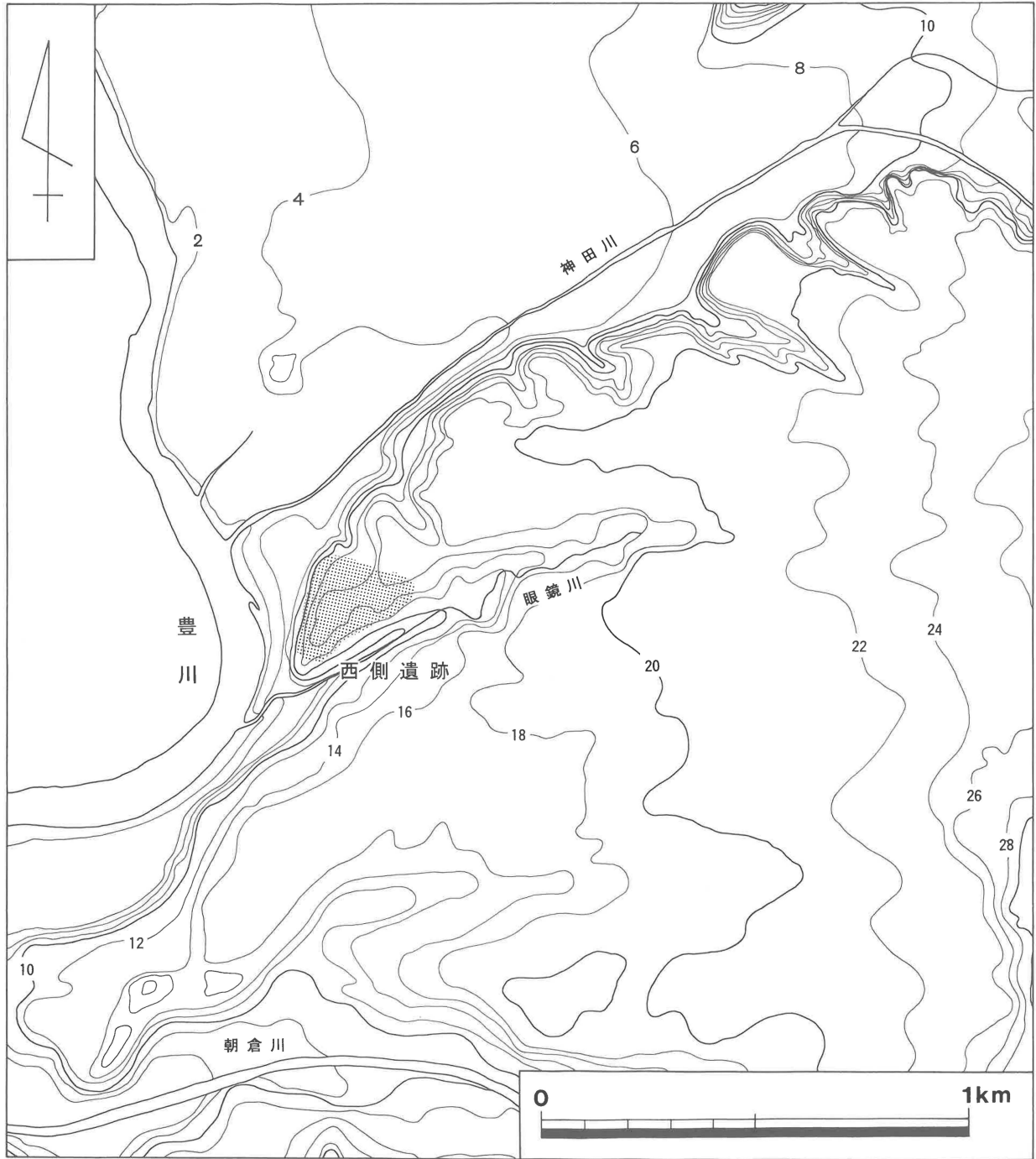
1. 遺跡の立地 (第1・2図)

西側遺跡は、豊橋市中心部から北東に4 km程のところであり、豊川及びその支流である神田川、眼鏡川に挟まれた標高12~18mの台地上に位置する遺跡で、現地番では豊橋市牛川町字西側73番地ほかに所在する。

遺跡が立地する台地は、朝倉川と神田川とに挟まれた牛川面と呼ばれる河岸段丘で、豊橋南部の高師原面や中央部の豊橋上位面などと同じ豊川下流域に見られる河岸段丘の中位面である。この牛川面は、台地の南端と北端が朝倉川・神田川の開析谷によって、また西端は豊川の沖積面と高低差10~15 mの明瞭な段丘崖によって限られている。一方東部は弓張山地と接しており、そこから南西に向かって緩やかに傾斜する地形となっている。この牛川面の特徴は、豊川の河岸段丘上に支流の朝倉川・神田川によって形成された扇状地性の堆積物が覆っていることで、比較的大きな礫を含んだ粒の揃わない砂礫層となっている。



第1図 西側遺跡位置図 (1/20,000 明治23年 大日本帝国陸地測量部より)



第2図 西側遺跡周辺地形図（1/15,000）

牛川面の西端や朝倉川に面した南端では、眼鏡川のように台地の端から数百mのところ湧水の池がありそこで谷が終わり、その上流では水流がない状況が見られる。現状では土地造成などでわかりにくいですが、明治23年作製の地形図ではその状況がはっきり認められる。これは、東部の弓張山地からの川の流れが伏流水となっているため、一般的な扇状地とよく似た状況にある。このような扇状地の扇頂や扇端では湧水地に集落が形成されており、明治期までは扇頂に当たる東部山麓部に忠興などの、扇端に当たる西部の段丘端に浪之上・森岡などの、それぞれ集落が見られた。こうした土地利用は、遺跡の分布状況とも一致しており、縄文時代以降の集落の多くが牛川面の縁辺に立地している。

なお沖積面については、氾濫・蛇行が著しい豊川のため集落の多くは近世以降に進出したと考えられ、それ以前については水稻耕作など生産の場としての利用が主であったと推測される。

参考文献

- 水野季彦 1991「遺跡の立地」『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第12集 牛川西部地区遺跡範囲確認調査報告書』
豊橋市教育委員会
- 水野季彦 1995「遺跡の立地」『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第23集 熊野遺跡』豊橋市教育委員会他

2. 歴史的環境 (第3図)

西側遺跡は、豊川と眼鏡川に挟まれた段丘上に位置する弥生時代から近世にかけての複合遺跡である。ここでは、西側遺跡を取り巻く歴史的な環境について、豊川左岸の段丘に広がる遺跡を中心に提起しながら各時代ごとに述べていくことにする。

旧石器時代

西側遺跡から東へ2 km程のところ牛川洞穴遺跡(2)が知られている。化石人骨「牛川人」や獣骨等が発見されているが、石灰岩採掘によって現在では滅失している。これ以外はほとんど確認されていないが、旧石器と推測される剥片が高井遺跡や今回の調査区からも出土している。

縄文時代

今回の調査では、中期後葉の土器も僅かに出土しているが、明確に遺構に伴うものではない。早期の遺跡では、押型文土器が出土した眼鏡下池北遺跡(28)やおいほて遺跡(22)・浪ノ上遺跡などが知られている。中期では、白石遺跡や洗島遺跡(15)などがあり、洗島遺跡では中期中葉を中心とした集落が確認され住居址・土壇などが見つかっている。晩期になると西側遺跡や西側北遺跡・熊野遺跡(18)などでも条痕文土器が確認されるようになるが、遺跡の実体ははっきりしないものが多い。また城ノ内遺跡(7)は、縄文時代から古墳時代にかけて継続する遺跡と推測されている。

弥生時代

前期では白石遺跡が確認されており、環濠を伴う集落が台地の縁辺部に形成されている。中期になると遺跡数は急増し、西側遺跡以外にも熊野遺跡・高井遺跡・浪ノ上遺跡・狭間(森岡)遺跡(20)などで、竪穴住居や方形周溝墓などが検出されている。後期になると、西側遺跡や浪ノ上遺跡では集落が拡大し、高井遺跡では大規模な環濠が巡るようになる。これ以外に、庄司ヶ下遺跡(9)や西砂原遺跡・西浦遺跡(21)・西先原遺跡(23)・東田遺跡(25)・中野遺跡・仁連木遺跡(24)などが知られているが、庄司ヶ下遺跡と西砂原遺跡を除くといずれも台地縁辺部に立地している。

古墳時代

古墳時代の集落については、白石遺跡や高井遺跡・熊野遺跡・東田遺跡などで、竪穴住居などが確認されているが、今回調査した西側遺跡を含めて全体的に規模は小さいようである。また、豊川沖積地に立地する東郷廻遺跡(4)や広間遺跡(5)・下河原遺跡(13)・為河原郷遺跡(14)などではこの時期



- | | | | | |
|----------|-----------|------------|--------------|-------------|
| 1 西側遺跡 | 2 牛川洞穴遺跡 | 3 下条堀内古屋敷址 | 4 東郷廻遺跡 | 5 広間遺跡 |
| 6 高井古墳群 | 7 城ノ内遺跡 | 8 萱野遺跡 | 9 庄司ヶ下遺跡 | 10 神ヶ谷遺跡 |
| 11 桑原遺跡 | 12 上ノ畑遺跡 | 13 下河原遺跡 | 14 為河原郷遺跡 | 15 洗島遺跡 |
| 16 中郷遺跡 | 17 西側古墓群 | 18 熊野遺跡 | 19 浪之上古屋敷址 | 20 狭間(森岡)遺跡 |
| 21 西浦遺跡 | 22 おいほて遺跡 | 23 西先原遺跡 | 24 仁連木遺跡 | 25 東田遺跡 |
| 26 相生塚古墳 | 27 牛川焼窯址 | 28 眼鏡下池北遺跡 | 29 乗小路A~D古墳群 | 30 キジ山古墳群 |

第3図 西側遺跡周辺の遺跡分布図 (1/25,000)

以降の遺物が採集されており、当期からの進出と考えられるが詳細は不明である。

古墳については、前期古墳が西側遺跡から最も近いもので北に4km程離れており、前方後円墳の権現山1・2号墳や前方後方墳の勝山1号墳などが確認されている。中期古墳では、前方後円墳で全長40mの東田古墳が朝倉川左岸に築かれているが、これ以外は台地の縁辺部に築かれる規模の小さな方墳や円墳である。高井古墳群には方墳を主体とした古墳群(6-1)があり、このうち31号墳・32号墳は一辺20mを越える大きな古墳も含まれている。また、同古墳群には円墳を主体とした古墳群(6-2・6-3)もあり、径十数mの小規模なものが主体である。いずれも中期から後期にかけて形成されており、稲荷山1号墳や同2号墳なども同様な方墳と考えられる。中野遺跡では、石枕が出土したとされる中野古墳が知られるが既に滅失している。また、森岡古墳群は後期の円墳が主体と考えられるが、立地などからこれら中期から続く古墳群と同様な群構成にあると推測される。

後期では、相生塚古墳(26)が径14m程の横穴式石室を主体部とする単独墳と考えられるが、その他の多くは群集墳である。古墳群の多くは東部の丘陵部に多く、乗小路古墳群(29)・キジ山古墳群(30)・中野古墳群・坪尻古墳群などが確認されている。これらの多くは主体部に横穴式石室を採用しているが、台地縁辺部に築かれた中期から継続する古墳群が木棺直葬を主とするのと大きな違いを見せている。

奈良時代以降

奈良～平安時代について、西側遺跡で竪穴住居や土壙などが確認され、西先原遺跡(23)では道路状遺構や柵列が検出されているが、これ以外の遺跡での状況ははっきりしない。

中世では、西側遺跡で多くの遺構・遺物を確認しているが、これ以外に熊野遺跡(18)や西側古墓群(17)などがある。熊野遺跡では15世紀後半と推測される地下式坑(地下式土壙墓)が検出され、西側古墓群では12世紀末～15世紀の蔵骨器や五輪塔などが出土している。この他、西側遺跡周辺には中世城館址が多く見られる。高井城址は、高井氏の居城で土塁や堀の一部が残る。下条館址は、白井氏の居城で堀や土塁が最近まで残っていた。下条堀内古屋敷址(3)は、菅沼氏の居城とされるが詳細ははっきりしない。二連木城址は戸田氏の居城で、曲輪や堀などが残る。浪之上古屋敷址(19)は戸田氏の居城とされるが、滅失している。

近世では、中世から続く神ヶ谷遺跡(10)や熊野遺跡などがある。また牛川焼窯址(27)は、いわゆる吉田藩のお庭焼きで、陶器や窯道具が出土している。

参考文献

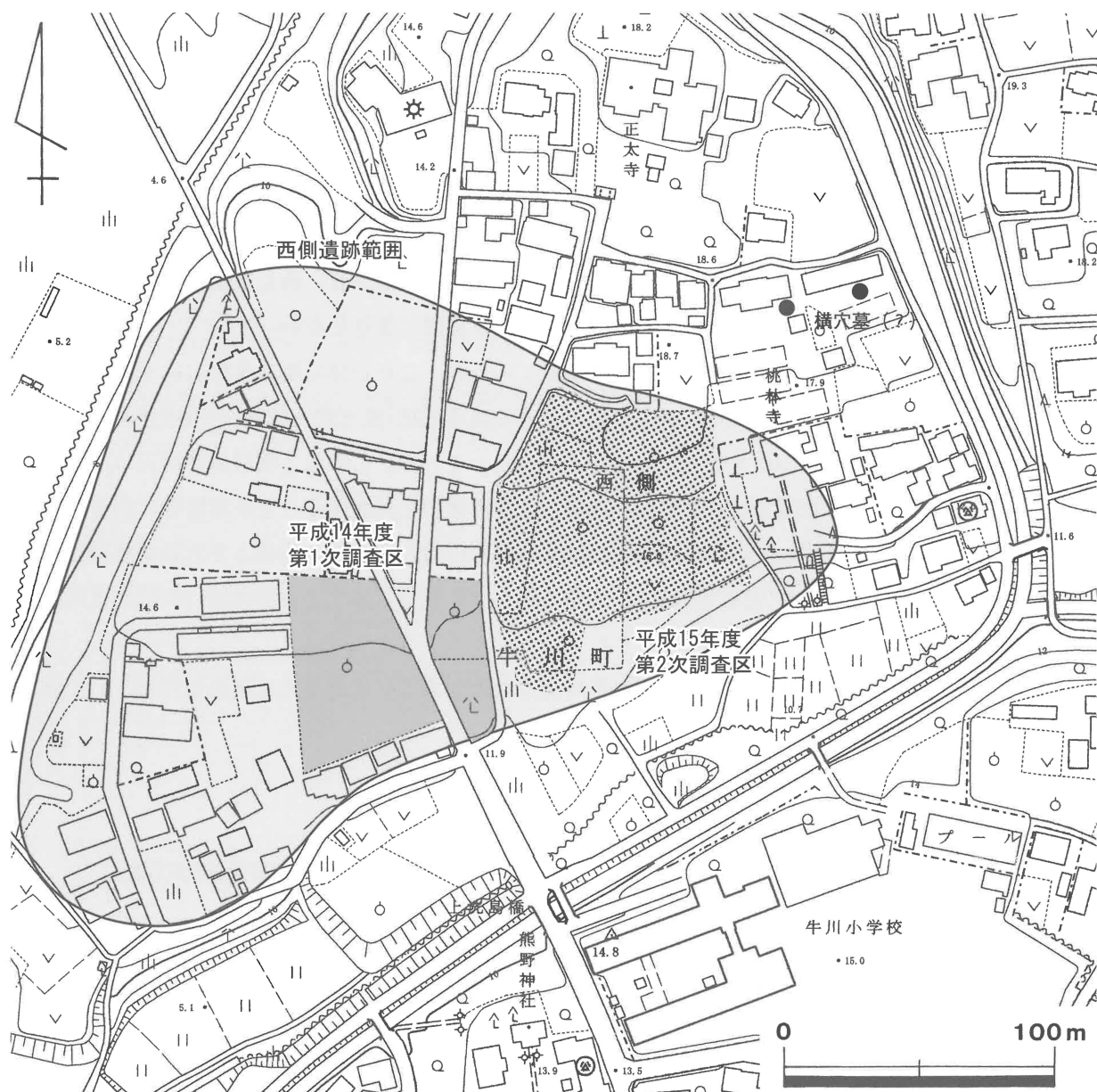
- 豊橋市教育委員会 1991『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第12集 牛川西部地区遺跡範囲確認調査報告書』
 豊橋市教育委員会他 1995『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第23集 熊野遺跡』
 豊橋市教育委員会 2002『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第70集 日南坂1号墳・神ヶ谷遺跡』
 豊橋市教育委員会 2004『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第78集 市内遺跡詳細分布調査報告書』

第2章 調査の目的と経過

1. 調査の目的と方法 (第4・5図)

青陵街道と豊川・神田川に挟まれた場所に位置する牛川町の大部分では、平成7年度から豊橋牛川西部土地区画整理組合によって約43haに及ぶ土地区画整理事業が計画・実施されている。これに先立って昭和61年度と平成元年度に分布調査を行って遺跡範囲を推定し、さらに平成2年度と平成9年度には範囲確認のための試掘調査を実施している(注1)。このような調査によって事業の対象地には、西側遺跡・洗島遺跡・眼鏡下池北遺跡など8遺跡と小規模な古墳や横穴墓を確認することができた。

今回の西側遺跡の発掘調査は、こうした土地区画整理事業に伴うもので、平成14年度の第1次調査



第4図 調査区位置図 (1/2,500)

に続いて行われた第2次調査となる。第1次調査区のすぐ東側に広がる調査対象地は、現状で畑地や雑木林で、北から南に向かって全体的に傾斜し高低差は約4mを測るが、所々で人為的な掘削と考えられる崖面も見られる。なおこの対象地は、区画整理事業によって道路造成や切土工事が行われる場所である。

調査区の設定については、第1次調査時の測量成果を継続して使用している。第1次調査時に基準点測量を行い、西側遺跡の北西隅を起点にして10mグリッドとした。この起点より西から東にA～Z、AA、AB、AC、AD……、北から南に1～17、18……としてその交点を地区名としたもので、第2次調査ではT～AC-7～18区がその対象範囲となる。

発掘調査面積は6,500㎡と広く、区画整理事業の進捗状況や排土置き場の確保などから、調査区を前半と後半の2回に分けて作業を進めた。前半調査区（A区）はT～AB-7～10区とT～W-11～18区を「Γ」状に約3,500㎡、後半調査区（B区）はW～AC-9～15区の範囲ではほぼ方形に3,000㎡である。調査はいずれも、重機による表土剥ぎ後に人力による遺構検出・遺構掘り下げで、出土状況図の作製や遺構写真の撮影などは随時行う。遺構全体図の作製については、前半と後半の各調査終了後に航空写真測量を行い、最終的に合成することとした。

注1 牛川西部・大岩南地区遺跡分布調査団 1989『牛川西部・大岩南地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財分布調査報告書』

豊橋市教育委員会 1991『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第12集 牛川西部地区遺跡範囲確認調査報告書』

2. 調査の経過

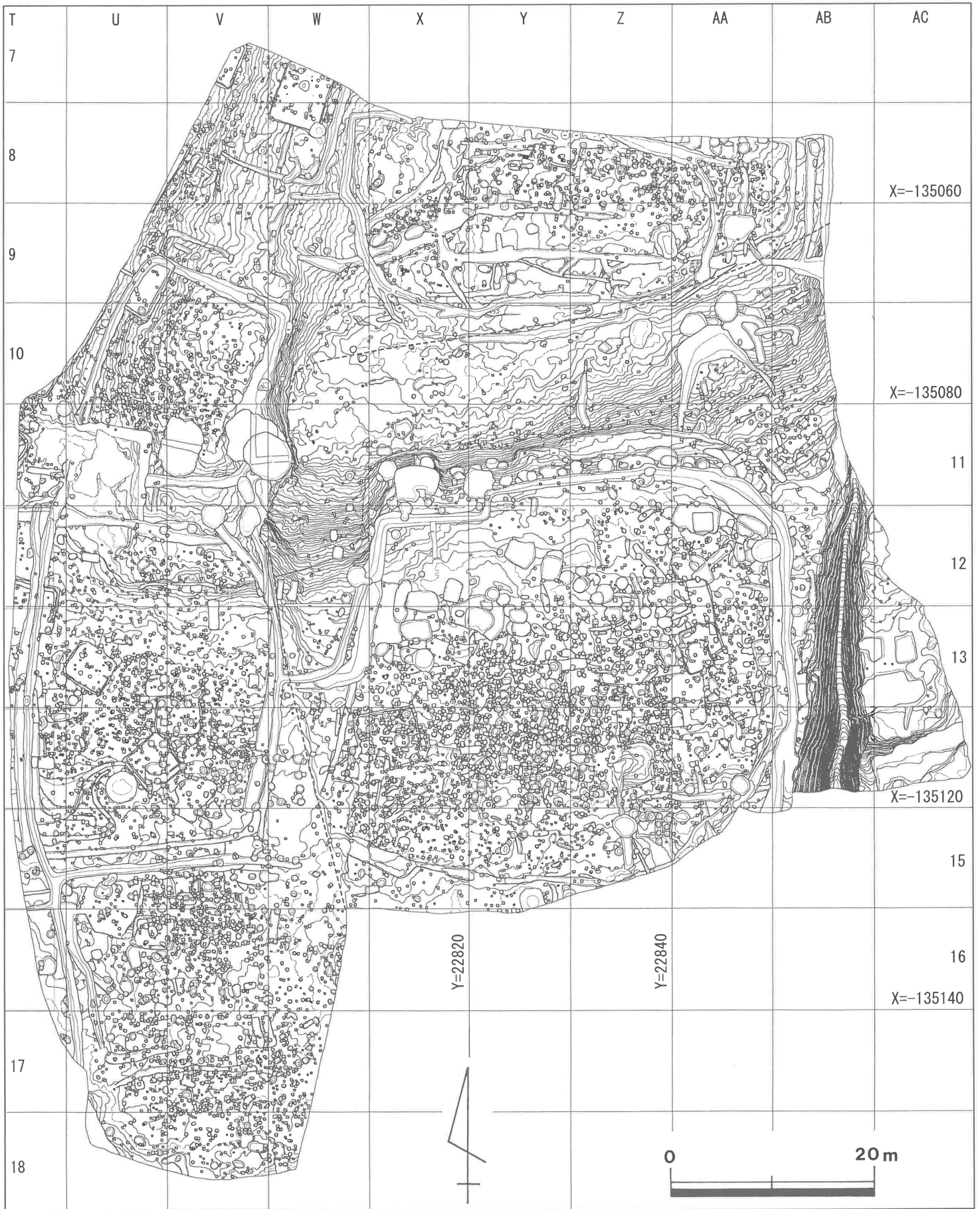
発掘調査は、平成15年5月9日から同年12月26日までほぼ継続して作業を行っている。以下、簡単に調査の経過を記すことにする。

前半調査区（A区）

5月9日～5月21日、重機により耕作土など表土層を剥いでいく。続いて人力による遺構検出・遺構掘り下げを行う。また、表土剥ぎの状況に応じてグリッド設定のための地区杭を打つ。調査区東側のAA・AB-8・9区あたりから西に向かって調査を開始するが、この付近では中世～近世の柱穴などが多く検出されている。

6月以降にはV・W-7～9区あたりへと調査が進む。この付近は、西に向かって緩やかに低くなるにしたがって表土層の堆積が厚くなっており、その東側（Y～AA-8・9区あたり）から土砂が運ばれたと推測される。このため、東側に比べて遺構の遺存状況は比較的良好で、古墳時代前期～後期の竪穴住居などが多く検出されている。

続いて、調査区の南側から北に向かって進めていく。T～W-14～18区付近では竪穴住居や多数の柱穴などが検出されるものの、全体的に表土層が薄いこともあり遺構の遺存状況はよくない。またこの付近では、第1次調査で検出された弥生時代の環濠の続きも予想されたが、今回の調査区には続いていることが確認できた。



第5図 調査区全体図 (1/500)

T～W-13区あたりは排土搬出用に表土を残していたため、7月15日～17日に表土剥ぎを行う。この付近は、表土下に黒色土が堆積しており、遺物が多く出土し、竪穴住居などの遺構も良好に残っていた。8月下旬にはほとんどの遺構を掘り終わり、9月4日にはラジコンヘリによる全景写真及び航空写真測量を行う。その後、井戸や地下式坑（注1）など大型の遺構を重機で断ち割って内部や下層の状況を確認する。

後半調査区（B区）

8月25日～9月1日、前半と同様に重機により表土層を剥いでいく。当初X～AA-11区にある崖は比較的新しい時期の掘削によるものと考えていたが、崖の下から南側にかけては予想外に多数の遺構が遺存しており、この掘削が比較的古い時期であることが明らかとなった。また、X～Z-11・12区あたりの崖面で比較的大きな穴が検出され、このうちのいくつかは地下式坑の天井部が崩落したものである。調査区南側のX～AA-13・14区あたりでは、古墳時代や奈良・平安時代の竪穴住居が重複して検出されている。

11月26日～12月2日には、最後まで残っていた東側部分（AB・AC-10～14区）の表土を重機で剥いでいく。この調査区の東端では、自然の谷と想定し埋まっていた土砂を重機で掘り下げていたが、多くの中世陶器が出土したため人力によって掘り下げることにした。この谷は、最も規模の大きな部分で幅5m以上、深さ約3mで底面は狭いものの平坦となることから、人為的な掘削による堀と確認された。

12月22日には、ラジコンヘリによる全景写真及び航空測量を行う。その後、井戸や土壙・地下式坑などを重機で断ち割って内部や下層の状況を確認する。地下式坑については、規模が大きく天井部の崩落などの危険もあったため十分な調査はできていない。12月26日には、現地での総ての作業が終了した。なお、今回の調査で、西側遺跡の4分の1近くが調査されたことになる。

注1 地下式坑については、「地下式土壙(墓)」や「土倉」・「地下倉」などとも呼ばれているが、その性格がはっきりしないため、ここでは「地下式坑」と呼称する。

笹生 衛 2003「地下式坑の掘られた風景」『戦国時代の考古学』

第3章 竪穴住居・掘立柱建物

1. 概観 (第6～10図)

今回の調査区からは、竪穴住居はそれと推測されるものを含めて28軒、掘立柱建物は同様に11棟が、それぞれ確認されている。また、土壌とした中には竪穴住居の可能性のあるものが含まれている。

竪穴住居は、その分布状況を見ると、標高15～16m程の比較的平坦な部分に弧状に広がり、特に調査区北西のU～W-7～9区付近、調査区西側のU・V-13・14区付近、調査区東側のY～AA-13・14区付近の3ヶ所に比較的まとまって検出されている。反対に調査区中央の標高17m以上の部分では全く見つかっていないが、この部分については近世以降に削平された可能性もある。時期的には、古墳時代中期、古墳時代後期末葉、奈良～平安時代(8～9世紀代)の大きく3時期のものが見られるが、時代毎にその配置の規制や規則性を見出すことは出来ない。

掘立柱建物については、X～Z-13～15区あたりに、柱穴が多数検出されており、今回確認した以上の建物が建っていた可能性が高い。時期は、一部に古墳時代後期末葉と考えられるものもあるが、多くは中世～近世である。

2. 竪穴住居・掘立柱建物 (第11～22図)

SB-01 (第11図)

調査区北西隅のV-7区で検出された竪穴住居であるが、大半が調査区外となる。壁及び壁溝は直線的に伸び、コーナーは直角に折れることから、平面形は「方形」あるいは「長方形」を呈すると推測される。規模は南北4.8m以上、東西1.5m以上を測る。壁及び壁溝から推測される主軸方位はN-26°-Eである。

壁は、高さ30cm程で、壁溝は幅8～12cm、深さ4cm前後であるが、南東のコーナー付近では不明瞭となる。床面は、地山を掘り込み平坦となる。埋土は、黒灰色砂質土で、壁に近い部分には淡黒灰色砂質土が見られる。炉あるいは竈は、現状では確認できていない。床面に掘られた穴はほとんどが後世のもので、柱穴と推測されるものは見つかっていない。住居の北東隅には貯蔵穴と考えられる土壙SK-17があり、径60cm、深さ28cm程で、土師器大型台付甕・長胴甕など(第23図1～3)が出土している。建物の時期は、出土遺物から7世紀前半と考えられる。

SB-02 (第11図)

調査区北西のW-7・8区で検出された竪穴住居であり、北辺の一部が調査区外となる。壁及び壁溝は直線的で、コーナーは直角に折れ平面形は「長方形」を呈する。規模は南北6.1m以上、東西5.3mを測る。主軸方位はN-18°-Eである。

壁は、最も良好に残っている部分で高さ24cm程で、壁溝は幅12～20cm、深さ4cm前後となり、全周する可能性がある。床面は、地山を掘り込み平坦となる。埋土は、黒灰色砂質土で一部に暗黄灰色砂

質土が見られる。炉あるいは竈は、現状では確認できていない。柱穴は4主柱穴と推測され、柱穴の掘方は径30~40cm、深さは床面から30~40cmを測る。柱間は、南北間で3.1m、東西間で2.2mをそれぞれ測る。住居の北西隅には貯蔵穴と考えられる土壙SK-7があり、径50cm、深さ22cm程で、土師器高坏（第24図18）が出土している。また住居の東側中央部では、5点以上の土師器小型壺など（第23・24図4~17）が比較的床面に接して検出されている。建物の時期は、出土遺物から古墳時代中期後葉と考えられる。

SB-03（第12図）

調査区北西のU・V-8・9区で検出された竪穴住居であるが、ほとんどが調査区外となる。壁及び壁溝は直線的で、コーナーは直角に折れることから平面形は「方形」あるいは「長方形」を呈すると考えられる。規模は南北7.4m以上、東西0.8m以上を測る。壁及び壁溝から推測される主軸方位はN-32°-Eである。

壁は、高さ35cm程で、壁溝は幅6~12cm、深さ6cm前後であるが、北壁付近では不明瞭となる。床面は、地山を掘り込み平坦となる。埋土は、黒灰色砂質土である。炉あるいは竈は、現状では確認できていない。また、床面に掘られた穴は後世のもので、柱穴と推測されるものは見つかっていない。なお、住居の東壁に沿うようにして、土師器高坏・小型壺・台付甕など（第24図19~27）が比較的床面に接して出土している。建物の時期は、出土遺物から古墳時代中期中葉と考えられる。

SB-04（第12図）

調査区北西のU-9区を中心に検出された竪穴住居であるが、西側半分は南北に通る溝や削平のためか不明瞭となっている。残存する壁及び壁溝は直線的で、コーナーは直角に折れ平面形は「長方形」を呈する。規模は南北6.4mで、東西は僅かに残る壁溝の位置から幅4.0mと考えたが、若干不安が残る。主軸方位はN-29°-Eである。

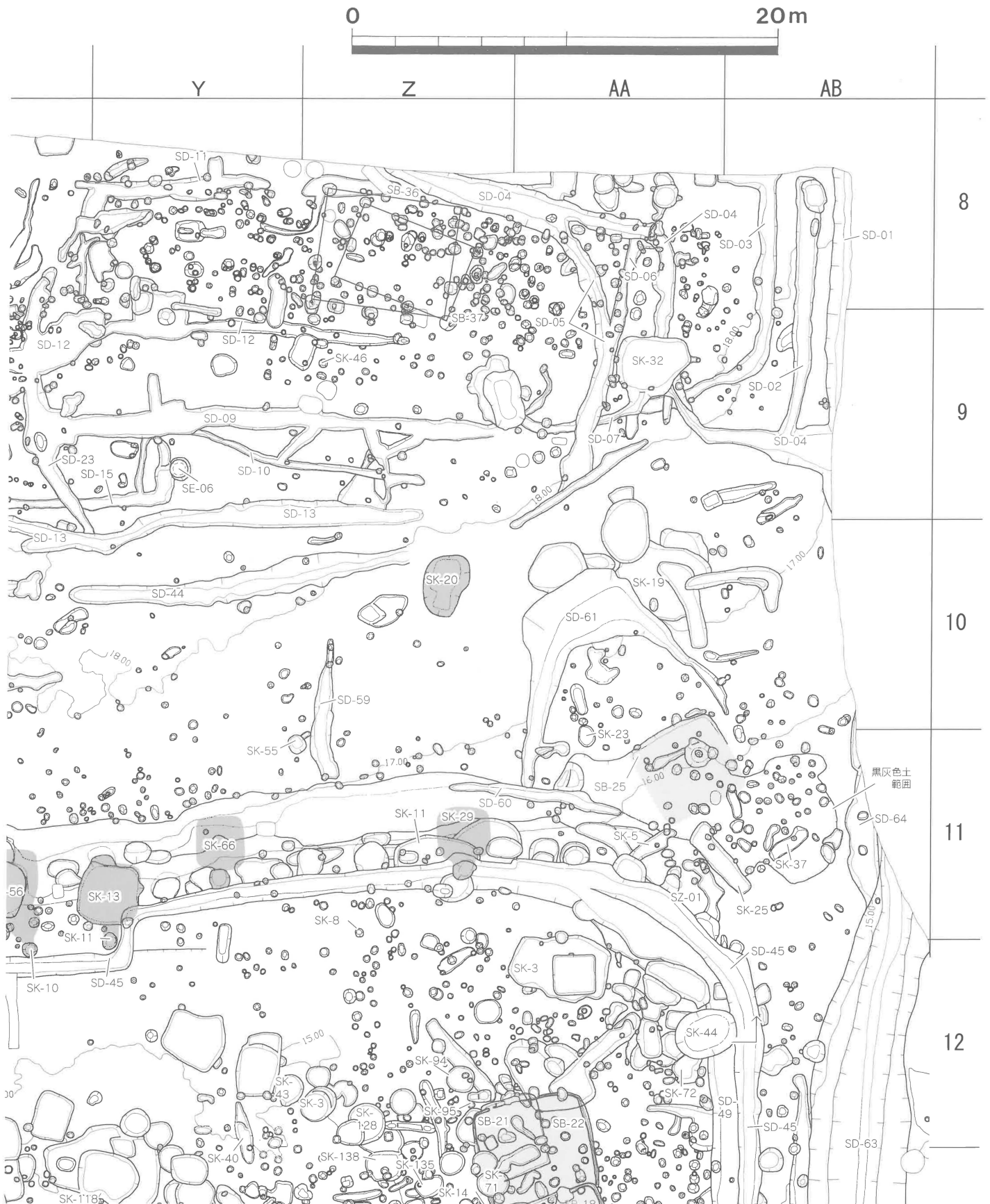
壁は、高さ35cm程で、壁溝は幅20~30cm、深さ5cm前後となり北西のコーナー付近以外ははっきりと掘り込まれている。床面は、地山を掘り込み平坦となる。埋土は、黒色砂質土である。炉あるいは竈は、現状では確認できていない。柱穴は4主柱穴と推測されるが、西側の2柱穴は不明である。柱穴は径30~40cmで、深さは16cm・46cmで一定しない。柱間は3.3mを測る。住居の南東隅には貯蔵穴と考えられる土壙があり、径70cm、深さ27cm程の大きさで、土師器台付甕・高坏・壺など（第25・26図28~52）が出土している。また、北辺の壁溝からは碧玉製管玉（第26図53）も見つかっている。建物の時期は、出土遺物から古墳時代中期後葉と考えられる。

SB-05（第11図）

調査区西側のT-10区で検出された竪穴住居であるが、大半が調査区外となる。壁及び壁溝は東辺は直線的で、南辺はやや外側に張り出し、コーナーは丸味を帯びており、平面形は「隅丸方形」あるいは「隅丸長方形」を呈すると考えられる。規模は南北3.2m以上、東西1.3m以上を測る。壁及び壁溝から推測される主軸方位はN-33°-Eである。



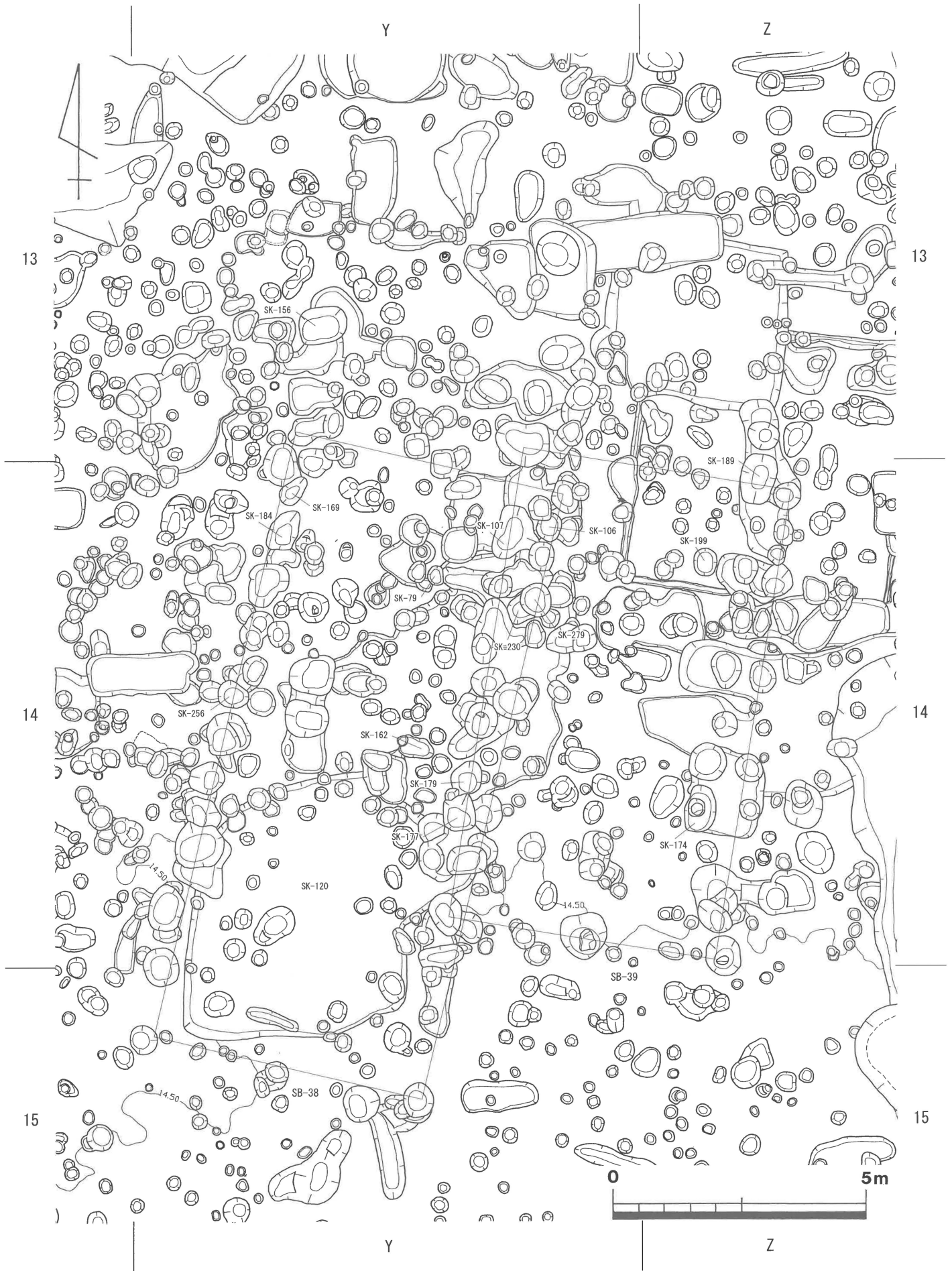
第6図 遺構位置図一1 (1/250)



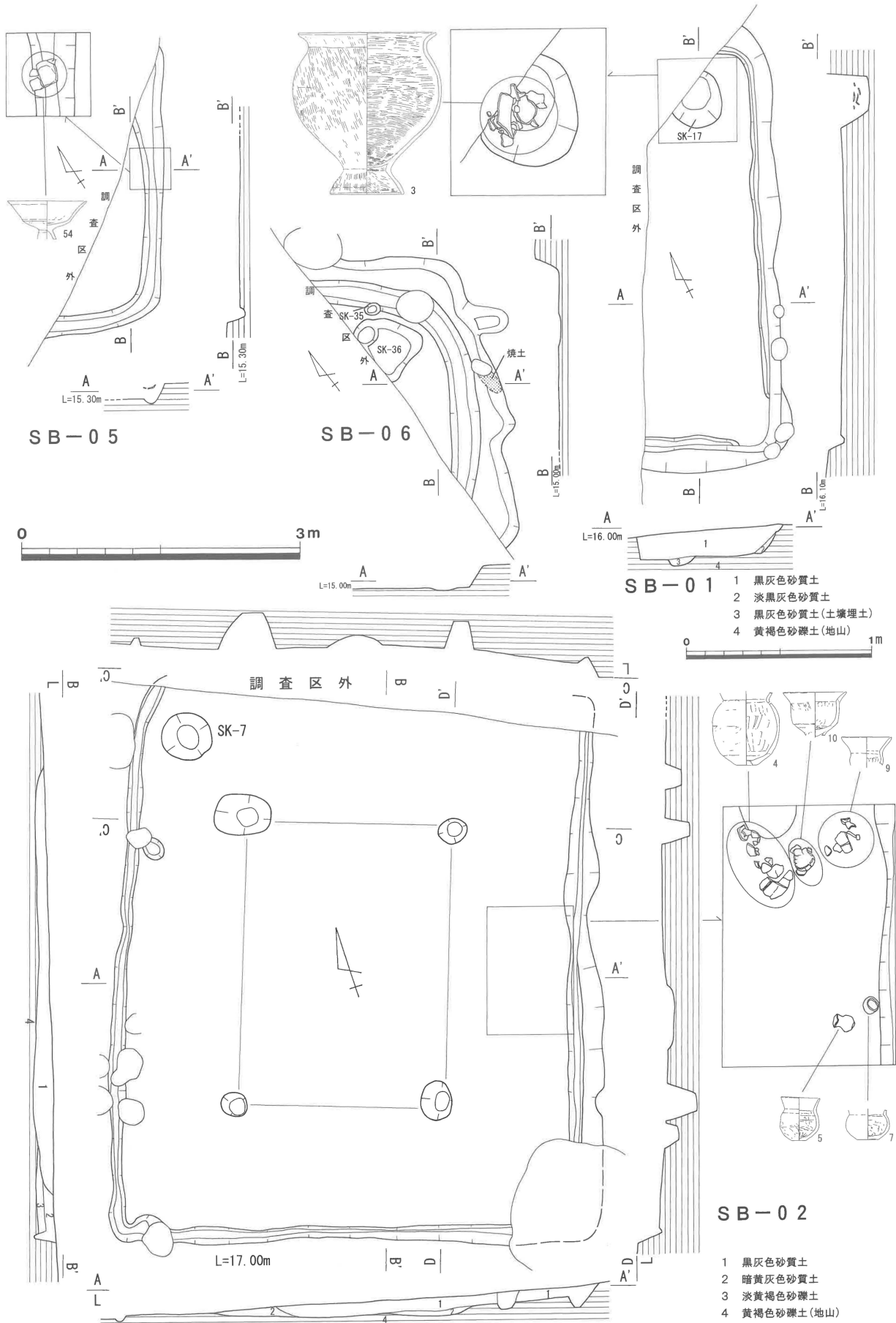
第7図 遺構位置図-2 (1/250)



第8図 遺構位置図-3 (1/250)



第10図 遺構位置図-5 (1/100)



第11図 遺構実測図-1 (1/60・1/30)

壁は、高さ15cm程で、壁溝は幅20cm前後、深さ4cm程で、確認されている部分は比較的是っきり巡っている。床面は、地山を掘り込み平坦となる。埋土は、黒灰色砂質土である。炉あるいは竈は、現状では確認できていない。また、床面に掘られた穴は後世のもので、柱穴と推測されるものは見つかっていない。壁溝からは、土師器高坏（第26図54）が出土している。建物の時期は、出土遺物から古墳時代中期中～後葉と考えられる。

SB-06（第11図）

調査区西側のT-11区、SB-05のすぐ南側で検出された竪穴住居であるが、大半が調査区外となる。壁及び壁溝は北辺・東辺いずれもやや外側に張り出し、コーナーは丸味を帯びており、平面形は「隅丸方形」あるいは「隅丸長方形」を呈すると推測される。規模は南北3.1m以上、東西2.2m以上を測る。壁及び壁溝から推測される主軸方位はN-37°-Eである。

壁は、高さ25cm程で、壁溝は幅28～34cm、深さ2cm程と非常に浅く、壁溝とはやや離れた内側を巡っている。床面は、地山を掘り込み平坦となる。埋土は、黒灰色砂質土である。東辺の一部に40cm×15cm程の範囲で焼土が確認されているが、竈かどうかははっきりしない。柱穴と推測されるものは見つかっていないが、北東隅には貯蔵穴と考えられる土壙SK-36があり、径60cm、深さ17cm程の大きさで、須恵器有台坏（第26図60・61）が出土している。これ以外に出土した遺物には、須恵器碗・甕、土師器甕など（第26図55～59）があり、建物の時期は8世紀中葉と考えられる。

SB-07（第13図）

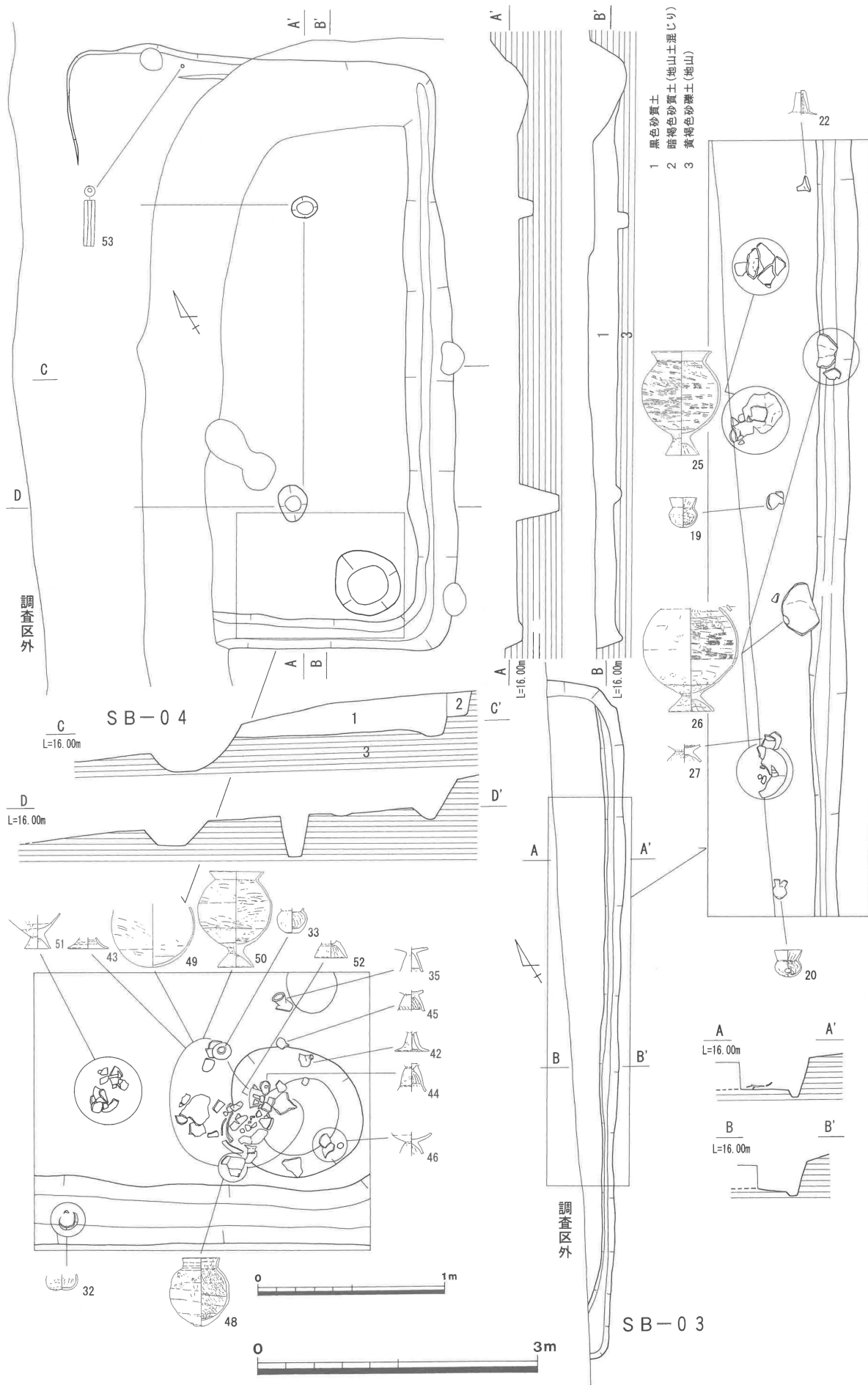
調査区南西側のU・V-16区で検出された竪穴住居である。壁及び壁溝はいずれも直線的であるが、コーナーは丸味を帯びており、平面形は「隅丸長方形」を呈する。規模は南北3.4m、東西4.3mを測る。壁及び壁溝から推測される主軸方位はN-4°-Eである。

壁は、最も良好に遺存している部分で高さ16cm程で、壁溝は幅20～40cmと一定せず、深さも0～5cm程となり、北辺では不明瞭となる部分がある。床面は、地山を掘り込み平坦となる。埋土は、暗灰色砂質土である。東辺の中央部には80cm×55cm程の範囲で焼土が確認されており竈と考えられるが、遺存状況が非常に悪いため形状ははっきりしない。なお、床面に掘られた穴はほとんどが後世のもので、柱穴と推測されるものは見つかっていない。出土した遺物には、須恵器坏・甕、土師器甕など（第26図62～64）があり、建物の時期は8世紀代と考えられる。

SB-08（第13図）

調査区南西側のV-15区、SB-07のすぐ北側で検出された竪穴住居であるが、北側半分は後世の溝などによって壊されている。壁及び壁溝はいずれも直線的で、コーナーは直角に折れることから、平面形は「方形」を呈する。規模は南北2.1m以上（推定復元3.9m）、東西3.8mを測る。壁及び壁溝から推測される主軸方位はN-1°-Wである。

壁は、最も良好に遺存している部分で高さ8cm程、壁溝は幅20cm前後と一定で、深さは7cm程を測る。床面は、地山を掘り込み平坦となるが、西側の1/3は10cm程さらに低くなっている。埋土は、



第12図 遺構実測図-2 (1/60・1/30)

暗灰色砂質土である。東辺の中央部には60cm×40cm程の範囲で焼土が確認されており竈と考えられるが、遺存状況が非常に悪いいため形状ははっきりしない。なお、床面に掘られた穴はほとんどが後世のもので、柱穴と推測されるものは見つからない。西辺の壁溝からは須恵器摘み蓋（第26図65・66）が出土している。これ以外には須恵器甕など（第26図67）が出土しており、建物の時期は8世紀後半と考えられる。

SB-09（第13図）

調査区南西側のV-15区、SB-08のすぐ東側で検出された竪穴住居であるが、東側半分は削平のためか不明瞭となる。壁は比較的直線で北辺ではやや不整形となるが、コーナーは丸味を帯びていることから、平面形は「隅丸方形」あるいは「隅丸長方形」を呈すると推測される。規模は南北5.7m、東西3.1m以上を測る。壁から推測される主軸方位はN-1°-Wである。

壁は、最も良好に遺存している部分で高さ20cm程であるが、他の多くは10cm前後で、壁溝は全く確認されなかった。床面は、地山を掘り込み平坦となる。埋土は、暗灰色砂質土である。炉あるいは竈は、現状では確認できていない。また、床面に掘られた穴はほとんどが後世のもので、柱穴と推測されるものは見つからない。遺物は、土師器甕・壺など（第26図68）が僅かに出土する程度で、建物の時期は古墳時代中期と考えられる。

SB-10（第13図）

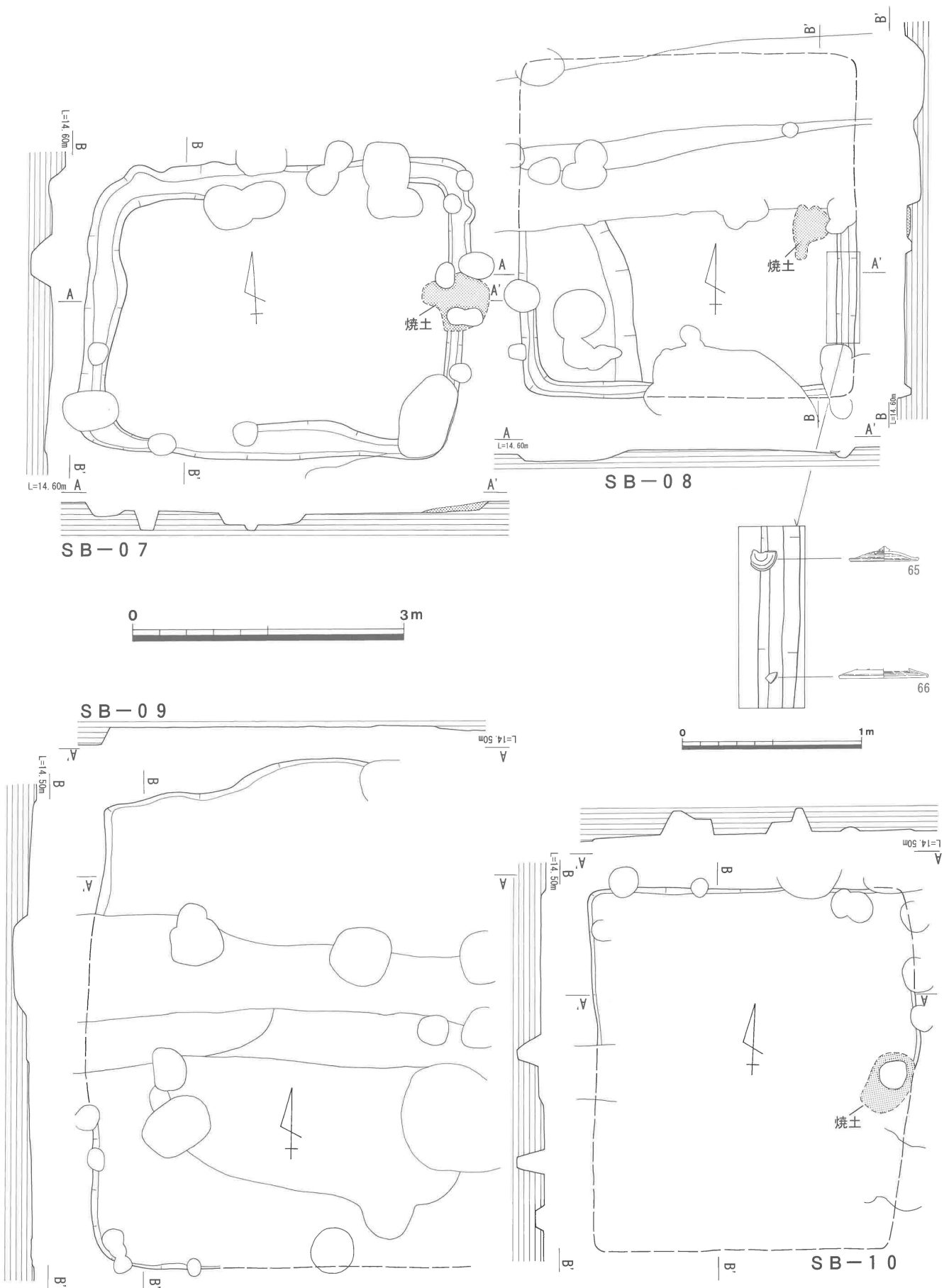
調査区の最も南側のV・W-17区で検出された竪穴住居であるが、南側半分は削平のためか不明瞭となる。壁は直線的に延び、コーナーは直角に折れることから、平面形は「方形」あるいは「長方形」を呈すると推測される。規模は南北2.5m以上（推定復元4.1m）、東西3.6mを測る。壁から推測される主軸方位はN-3°-Wである。

壁は、高さ2～5cm程と僅かで、壁溝は全く確認されなかった。床面は、地山を掘り込み平坦となる。埋土は、地山土混じりの暗灰色砂質土である。東辺中央部には70cm×50cm程の範囲で焼土が確認されており竈と考えられるが、遺存状況が非常に悪いいため形状ははっきりしない。なお、床面に掘られた穴はほとんどが後世のもので、柱穴と推測されるものは見つからない。遺物は、須恵器甕、土師器甌など（第27図69・70）が僅かに出土する程度で、建物の時期は7～8世紀頃と考えられる。

SB-11（第14図）

調査区西側中央のT-12・13区で検出された竪穴住居であるが、一部は調査区外となる。また、中央部を後世の溝によって壊されている。壁及び壁溝はいずれも直線的でコーナーは直角に折れることから、平面形は「方形」を呈すると考えられる。規模は南北4.8m、東西4.7m以上（推定復元4.9m）を測る。壁及び壁溝から推測される主軸方位はN-14°-Eである。

壁は、最も良好に遺存している部分で高さ16cm程、壁溝は幅10～15cmで、深さは1～2cmと非常に浅い。この壁溝に沿うようにして、内側に幅20～50cm、深さ5cm程の溝が巡るが、いずれも南東隅付



第13図 遺構実測図一3 (1/60・1/30)

近では不明瞭となる。床面は、地山を掘り込み平坦となる。埋土は、黒灰色砂質土である。炉あるいは竈は、現状では確認できていない。また、床面に掘られた穴はほとんどが後世のもので、柱穴と推測されるものは見つかっていない。出土した遺物には、土師器高坏・壺・甕など（第27図71～75）があり、建物の時期は古墳時代中期中～後葉と考えられる。

SB-12（第14図）

調査区西側中央のU-13区で検出された竪穴住居である。壁及び壁溝はやや外側に張り出し、コーナーは丸味を帯びており、平面形は「隅丸長方形」を呈する。規模は南北4.2m（竈突出部を含んで4.4m）、東西4.6mを測る。主軸方位はN-35°-Eである。

壁は、高さ20cm前後で、壁溝は幅15～20cm、深さは2cm程と浅く、北辺から北東隅にかけての部分は不明瞭となる。床面は、地山を掘り込み平坦となる。埋土は、黒灰色砂質土及びやや粘質の暗灰色砂質土である。また壁溝は、淡黒灰色砂質土となる。北辺中央部には80cm×60cm程の範囲で焼土が確認されており竈と考えられる。この付近は北辺の壁が外側に突出し、焼土を除いた床面は少し窪んでいたが、竈の構造ははっきりしない。柱穴は4主柱穴と推測され、柱穴の掘方は径20cm程、深さは床面から18cm程である。柱間は、南北間1.6m、東西間2.3mをそれぞれ測る。住居の北東隅には貯蔵穴と考えられる土壙SK-230があり、長径65cm×短径40cm、深さは22cm程で、須恵器無台坏・横瓶や土師器長胴甕（第27図84～86）が出土している。また北西隅の土壙SK-222では、須恵器坏身（第27図87）が完全な形で検出された。この他には須恵器坏身・坏蓋、土師器甕など（第27図76～83）が出土しており、建物の時期は7世紀中葉と考えられる。

SB-13（第14図）

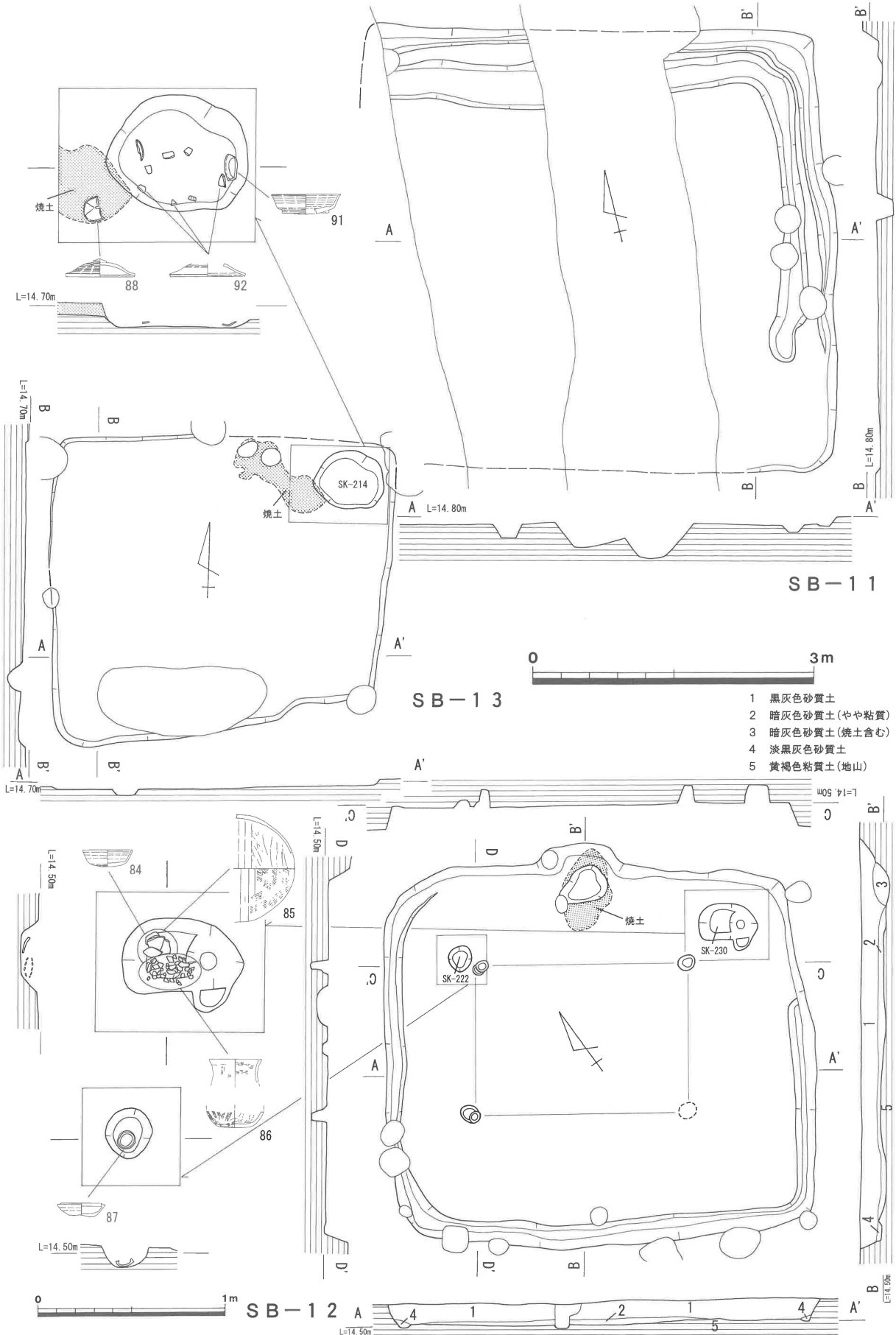
調査区西側中央のT・U-13・14区、SB-12のすぐ南側で検出された竪穴住居である。壁は南辺がやや不整となる以外は直線的に延び、コーナーは直角に折れることから、平面形は「長方形」を呈する。規模は南北3.4m、東西3.7mを測る。壁から推測される主軸方位はN-2°-Wである。

壁は、高さ2～7cmで、壁溝は全く確認されなかった。床面は、地山を掘り込み平坦となる。埋土は、黒灰色砂質土である。北辺には110cm×40cm程の範囲で焼土が確認されており竈と考えられるが、遺存状態が悪く構造ははっきりしない。床面に掘られた穴はほとんどが後世のもので、柱穴と推測されるものは見つかっていない。住居の北東隅には貯蔵穴と考えられる土壙SK-214があり、径70cm程、深さは10cm程で、須恵器有台坏・蓋など（第27図90～92）が出土している。また竈と考えられる焼土の上からは、須恵器摘み蓋（第27図88）が見つかっている。この他には土師器小型壺・甕など（第27図89）が出土しており、建物の時期は8世紀前半と考えられる。

なお、このSB-13については、その規模やいびつな南辺の形状、壁溝や柱穴が確認できないことなどから、竪穴住居でない可能性も考えられる。

SB-14（第15図）

調査区西側中央のU・V-14区で検出された竪穴住居である。壁及び壁溝は直線的で、コーナーは



第14図 遺構実測図-4 (1/60・1/30)

直角に折れることから、平面形は「方形」を呈する。規模は北東辺－南西辺間4.7m、北西辺－南東辺間4.6mを測る。主軸方位はN-50°-Eである。

壁は、高さ15cm前後で、壁溝は幅15～20cm、深さは4cm程で、北隅から北東辺にかけての部分は不明瞭となる。また、この壁溝に沿うように南西辺と東隅の内側には、幅20cm程、深さ3cm程の溝が巡る。床面は、地山を掘り込み平坦となる。埋土は、黒灰色砂質土である。炉あるいは竈は、現状では確認できていない。柱穴は4支柱穴と考えられ、柱穴の掘方は径25cm程、深さは床面から40～45cmである。柱間は、北東－南西間2.4m、北西－南東間2.3mをそれぞれ測る。出土した遺物には、土師器壺・高坏・甕など（第27・28図93～102）があり、建物の時期は古墳時代中期後葉と考えられる。なお、住居の北隅は、竪穴住居SB-15によって壊されている。

SB-15（第15図）

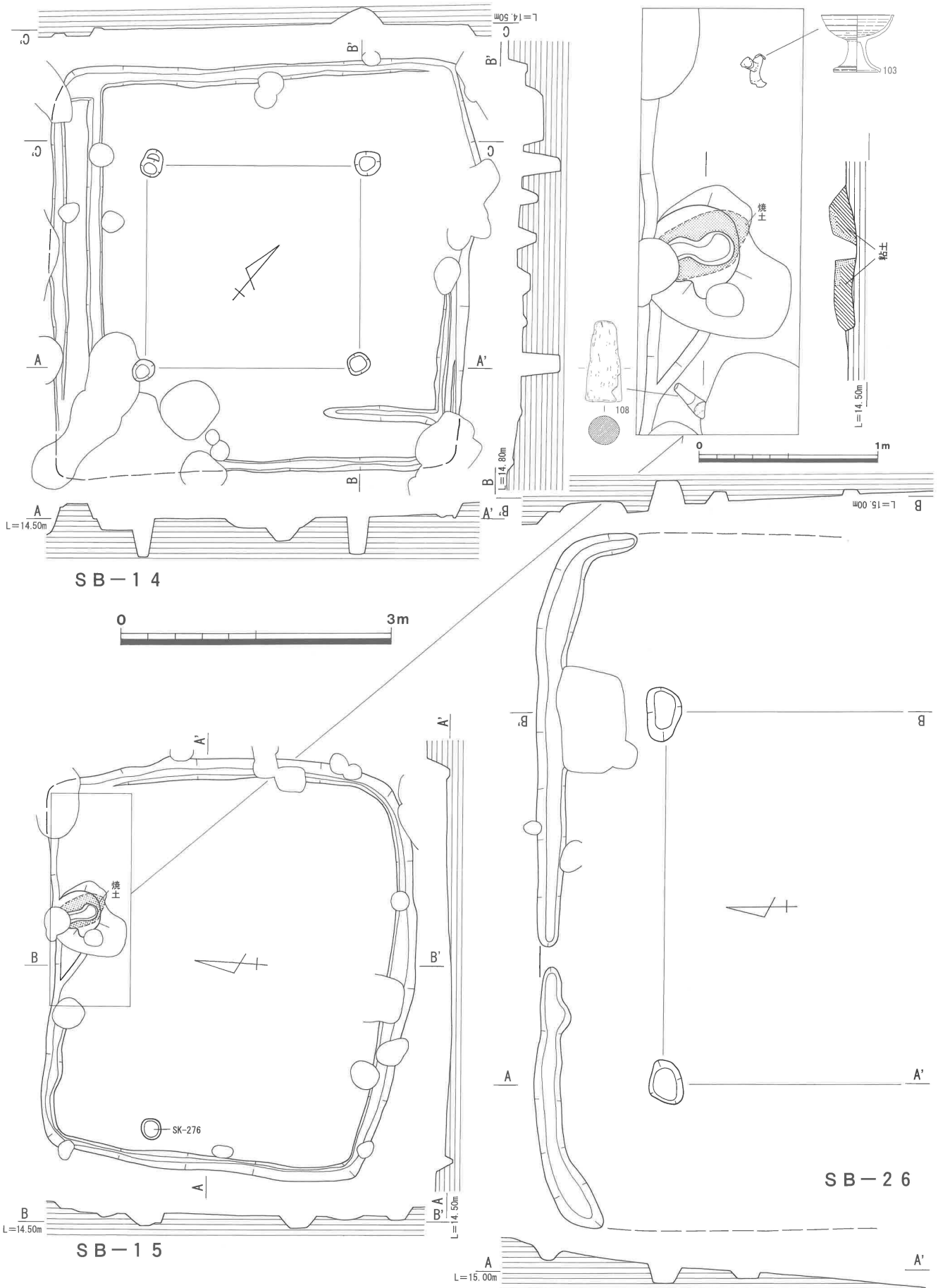
調査区西側中央のU・V-13・14区、SB-14のすぐ北側で検出された竪穴住居である。壁及び壁溝はやや外側に張り出し、コーナーは丸味を帯びており、平面形は「隅丸長方形」を呈する。規模は南北4.1m、東西4.7mを測る。壁及び壁溝から推測される主軸方位はN-4°-Wである。

壁は、高さ15～20cmで、壁溝は幅15～20cm、深さは3～5cmで、北東隅は不明瞭となる。床面は、地山を掘り込み、中央付近がやや低くなるが比較的平坦である。埋土は、黒灰色砂質土である。北辺やや東寄りでは、90cm×80cm程の範囲で床面をやや掘り下げ、その上に12cm程粘土を盛り、更に中央付近を窪ませた構造が確認された。この構造物は、中央の窪み周辺が強く焼けていることから竈と考えられる。またこの竈のすぐ脇からは、土製支脚や須恵器高坏（第28図103・108）が出土している。なお、床面に掘られた穴はほとんどが後世のもので、柱穴と推測されるものは見つからない。住居の西壁近くには土壙SK-276があり、径25cm程、深さは4cm程で、須恵器坏蓋（第28図110）が出土している。これ以外には須恵器壺・瓶類、土師器甕など（第28図104～107・109）が出土しており、建物の時期は7世紀前半と考えられる。

SB-16（第16図）

調査区南東のZ・AA-13・14区で検出された竪穴住居である。壁はやや外側に張り出し、コーナーは丸味を帯びており、平面形は「隅丸方形」を呈する。規模は南北5.3m、東西4.9m以上（推定復元5.3m）を測る。主軸方位はN-6°-Wである。

壁は、最大で高さ20cm程が残り、壁溝は全く確認されなかった。床面は、地山を掘り込み、南側に向かってやや低くなっているが比較的平坦である。埋土は、黒灰色砂質土である。床面には、ほぼ中央に15cm×15cm程の範囲で焼土が、また中央やや北寄りにも40cm×15cm程の範囲で焼土が確認され、いずれかが炉であった可能性が考えられる。この焼土周辺からは土師器壺・高坏・甕が比較的まとまって出土している。柱穴は4支柱穴と考えられ、柱穴の掘方は径25～50cm程、深さは床面から30cm前後である。柱間は、南北間2.5m、東西間2.6mをそれぞれ測る。北東隅には貯蔵穴と考えられる土壙SK-177があり、径60cm、深さ37cm程の大きさで、土師器高坏（第29図128）が出土している。また、中央部の土壙SK-152は、長径60cm×短径50cm、深さ33cm程の大きさで、土師器甕（第29図129）が



第15图 遺構実測図一5 (1/60・1/30)

検出されている。この他には土師器小型壺・高坏・甕など（第28・29図111～127）が出土しており、建物の時期は古墳時代中期中葉と考えられる。なおSB-16の北辺は、SB-19によって壊されている。

SB-17（第16図）

調査区南東のZ-13・14区、SB-16のすぐ西側で検出された竪穴住居であるが、「L」字状に検出された壁溝と焼土のみが遺存しており、全体形ははっきりしない。壁溝は直線的に伸び、コーナーは直角に折れることから、平面形は「方形」あるいは「長方形」を呈すると推測される。規模は南北1.5m以上、東西2.3m以上（推定復元4.1m）を測る。壁溝から推測される主軸方位はN-6°-Wである。

壁は遺存しておらず、壁溝は幅12～25cm、深さ8cm前後で住居の北東隅のみで確認できた。床面は、地山を掘り込み、南側に向かってやや低くなっているが比較的平坦である。また、SB-16の床面よりも5cm程低くなっている。埋土は、焼土混じりの暗灰色砂質土である。北辺中央には80cm×60cm程の範囲で焼土が確認されており竈と考えられるが、遺存状態が悪く構造ははっきりしない。すぐ南側にも20cm×20cm程の範囲で焼土が確認されているが、それぞれの関係は不明である。床面に掘られた穴はほとんどが後世のもので、柱穴と推測されるものは見つかっていない。住居の北東隅には貯蔵穴と考えられる土壙SK-53があり、径50cm程、深さは40cm程で、土師器甕（第29図130）が出土している。これ以外には須恵器坏類・甕などの小破片が僅かに出土しているだけであり、建物の時期は7世紀代と推測される。なお、東側のSB-16と西側のSB-20との切り合い関係ははっきりしないが、出土遺物からSB-16・20より新しく位置づけられる。

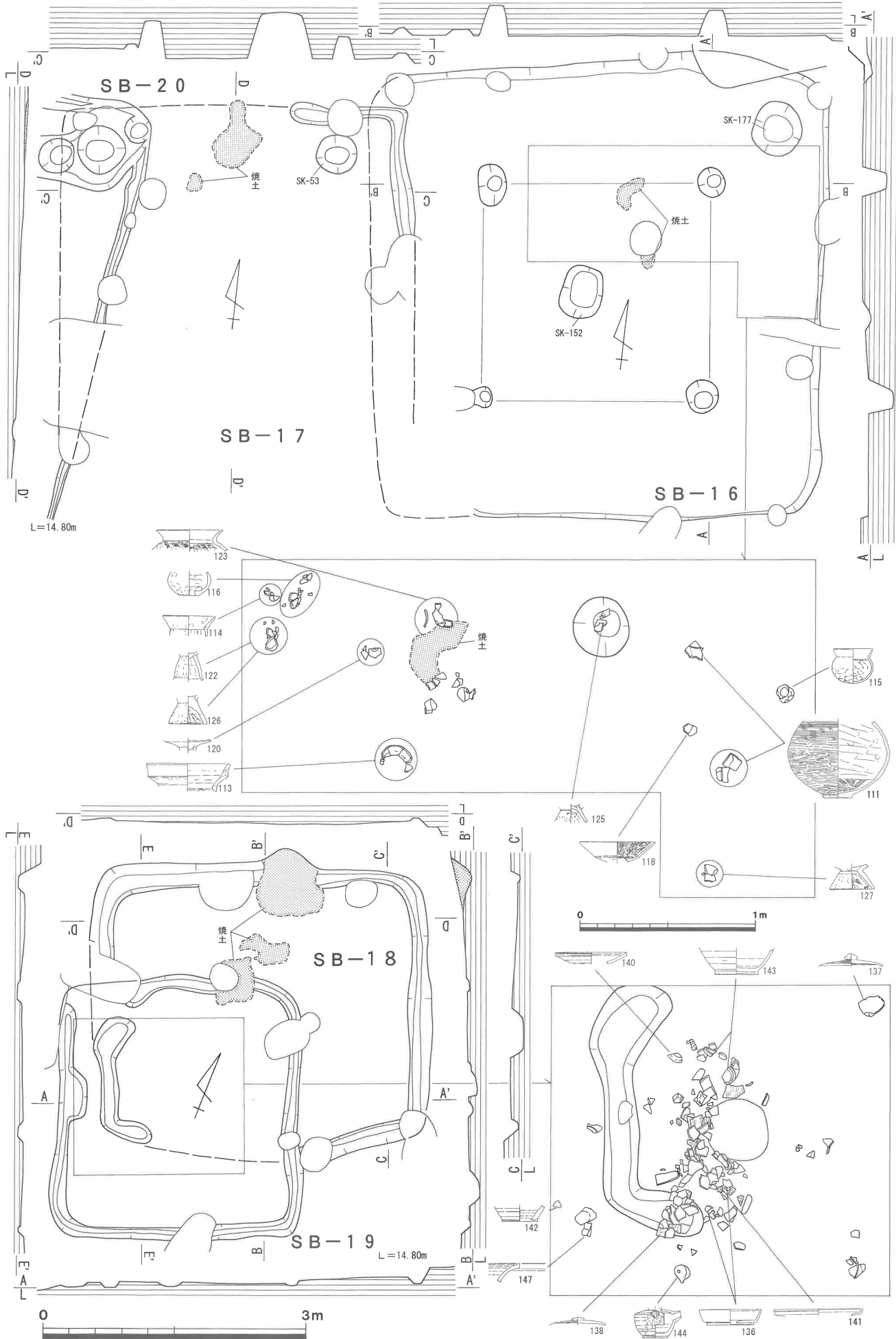
SB-18（第16図）

調査区南東のAA-13区で検出された竪穴住居である。壁及び壁溝は比較的直線であるが、コーナーは丸味を帯びており、平面形は「隅丸長方形」を呈する。規模は南北3.4m、東西3.9mを測る。壁及び壁溝から推測される主軸方位はN-22°-Wである。

壁は、最大で高さ20cm程が残り、壁溝は幅15～30cm、深さは7cm程で、SB-19と重複する部分以外はほぼ全周する。床面は、地山を掘り込み平坦となる。埋土は、黒灰色砂質土である。北辺のほぼ中央には壁溝を塞ぐように80cm×80cm程の範囲で焼土が確認されており竈と考えられるが、遺存状態が悪く構造ははっきりしない。すぐ南側にも60cm×30cm程の範囲で焼土が確認されているが、それぞれの関係は不明である。床面に掘られた穴はほとんどが後世のもので、柱穴と推測されるものは見つかっていない。出土した遺物には、須恵器碗・摘み蓋、土師器甕など（第29図131・132）があり、建物の時期は8世紀前半と考えられる。

SB-19（第16図）

調査区南東のAA-13区、SB-18と重複するようにして検出された竪穴住居である。壁溝は比較的直線であるが、コーナーは丸味を帯びており、平面形は「隅丸方形」を呈する。規模は南北3.1m、



第16図 遺構実測図-6 (1/60・1/30)

東西2.9mを測る。壁及び壁溝から推測される主軸方位は $N-20^{\circ}-W$ である。

壁は、高さ5～10cm程が残り、壁溝は幅15～20cm、深さは5～10cm程で、北西隅が僅かに不明瞭となる。床面は、地山を掘り込み平坦となるが、SB-18の床面よりも5cm程低くなっている。埋土は、SB-18と同じ黒灰色砂質土である。北辺中央やや東には壁溝を塞ぐように50cm×40cm程の範囲で焼土が確認されており竈と考えられるが、遺存状態が悪く構造ははっきりしない。床面に掘られた穴はほとんどが後世のもので、柱穴と推測されるものは見つかっていない。なお、住居のほぼ中央には120cm×60cmの範囲に多量の須恵器片（坏・蓋・甕・鉢など）が重なり合うように出土している。出土した遺物には、須恵器有台坏・摘み蓋・壺・甕、土師器甕など（第29図133～150）があり、建物の時期は8世紀前半と考えられる。なお、SB-19はSB-18とSB-16を壊している。

SB-20（第17図）

調査区南東のY・Z-13・14区、SB-17と重複するようにして検出された竪穴住居である。壁及び壁溝は直線的で、コーナーは直角に折れることから、平面形は「方形」を呈する。規模は南北5.3m、東西5.4mを測る。主軸方位は $N-8^{\circ}-E$ である。

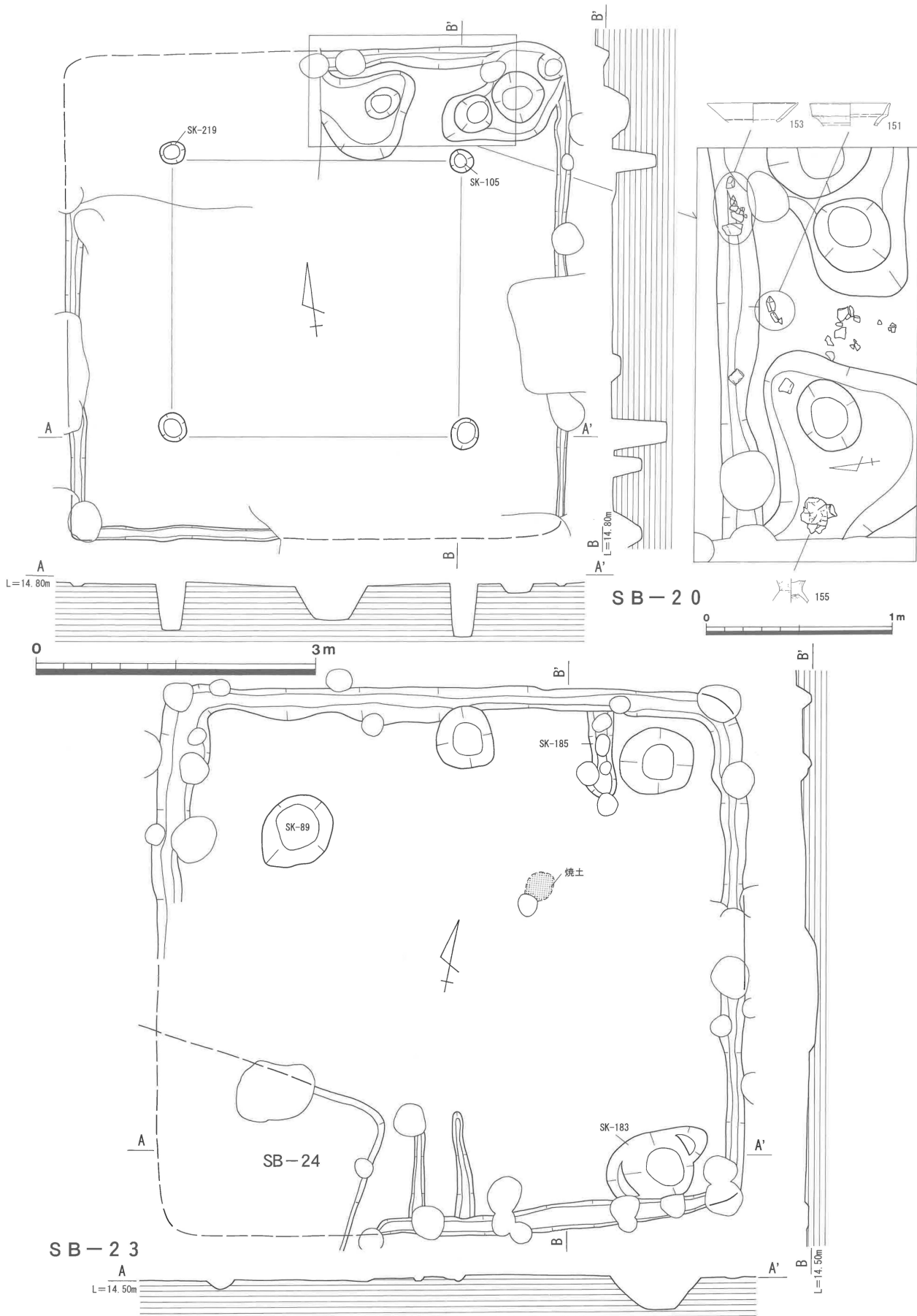
壁は、最も残りの良い部分で高さ10cm程を測り、壁溝は幅10～20cm、深さは3～6cm程で、遺存している部分はほぼ全周する。床面は、地山を掘り込み平坦となる。埋土は、暗灰色砂質土である。炉あるいは竈は、現状では確認できていない。柱穴は4主柱穴と考えられ、柱穴の掘方は径25～40cm程、深さは床面から50cm前後である。柱間は、南北間3.0m、東西間3.1mをそれぞれ測る。北東隅には貯蔵穴と考えられる不整形な土壌があり、土師器壺・高坏・台付甕など（第30図151～159）が出土している。建物の時期は、出土遺物から古墳時代中期後葉と考えられる。なお、東側のSB-17との切り合い関係ははっきりしなかったが、出土遺物からの前後関係はSB-20→SB-17である。

SB-21（第18図）

調査区東側中央のZ・AA-12・13区でSB-22のほぼ中央を掘り込むようにして検出されているが、規模や形態などから竪穴住居以外の遺構である可能性もある。壁は直線的で、コーナーは直角に折れることから、平面形は「長方形」を呈する。規模は南北3.8m、東西2.7mを測る。壁から推測される主軸方位は $N-16^{\circ}-W$ である。

壁は、最も残りの良い部分で高さ13cm程を測り、壁溝は確認されなかった。床面は、地山を掘り込み平坦で、SB-22の床面よりも3～4cm低くなっている。埋土は、焼土混じりの黒灰色砂質土でやや茶色が強い。北辺中央には80cm×30cm程の範囲で焼土が確認されており竈と考えられるが、遺存状態が悪く構造ははっきりしない。床面に掘られた穴はほとんどが後世のもので、柱穴と推測されるものは見つかっていない。なお、住居のほぼ中央にある土壌SK-218は、SB-22に伴うものと考えられる。出土した遺物には、須恵器碗・坏身・壺、土師器甕など（第30図160～165）があり、建物の時期は7世紀前葉と考えられる。

SB-22（第18図）



第17図 遺構実測図一7 (1/60・1/30)

調査区東側中央のZ・AA-12・13区、SB-21やSB-18と重複するようにして検出された竪穴住居である。壁及び壁溝はやや外側に張り出し、コーナーは丸味を帯びており、平面形は「隅丸方形」を呈する。規模は南北4.9m以上（推定復元5.3m）、東西5.6mを測る。壁及び壁溝から推測される主軸方位はN-13°-Wである。

壁は、高さ10~16cmを測り、壁溝は幅10~25cm、深さは6~10cm程で、遺存している部分はほぼ全周する。床面は、地山を掘り込み平坦となる。埋土は、黒灰色砂質土である。炉あるいは竈は、現状では確認できていない。床面に掘られた穴はほとんどが後世のもので、柱穴と推測されるものは見つかっていない。なお、住居のほぼ中央には220cm×80cm程、深さ10~15cmの不整形な土壇SK-218があり、土師器台付甕（第31図183）などが出土している。また東寄りの床面では土師器壺・高坏・甕など（第30・31図166~182・184）が検出されている。また、南西隅の土壇SK-106では、土器製作用と考えられる白色の粘土塊が、土壇内にほぼ充満するように貯蔵されていた。建物の時期は、出土遺物から古墳時代中期中葉と考えられる。

SB-23（第17図）

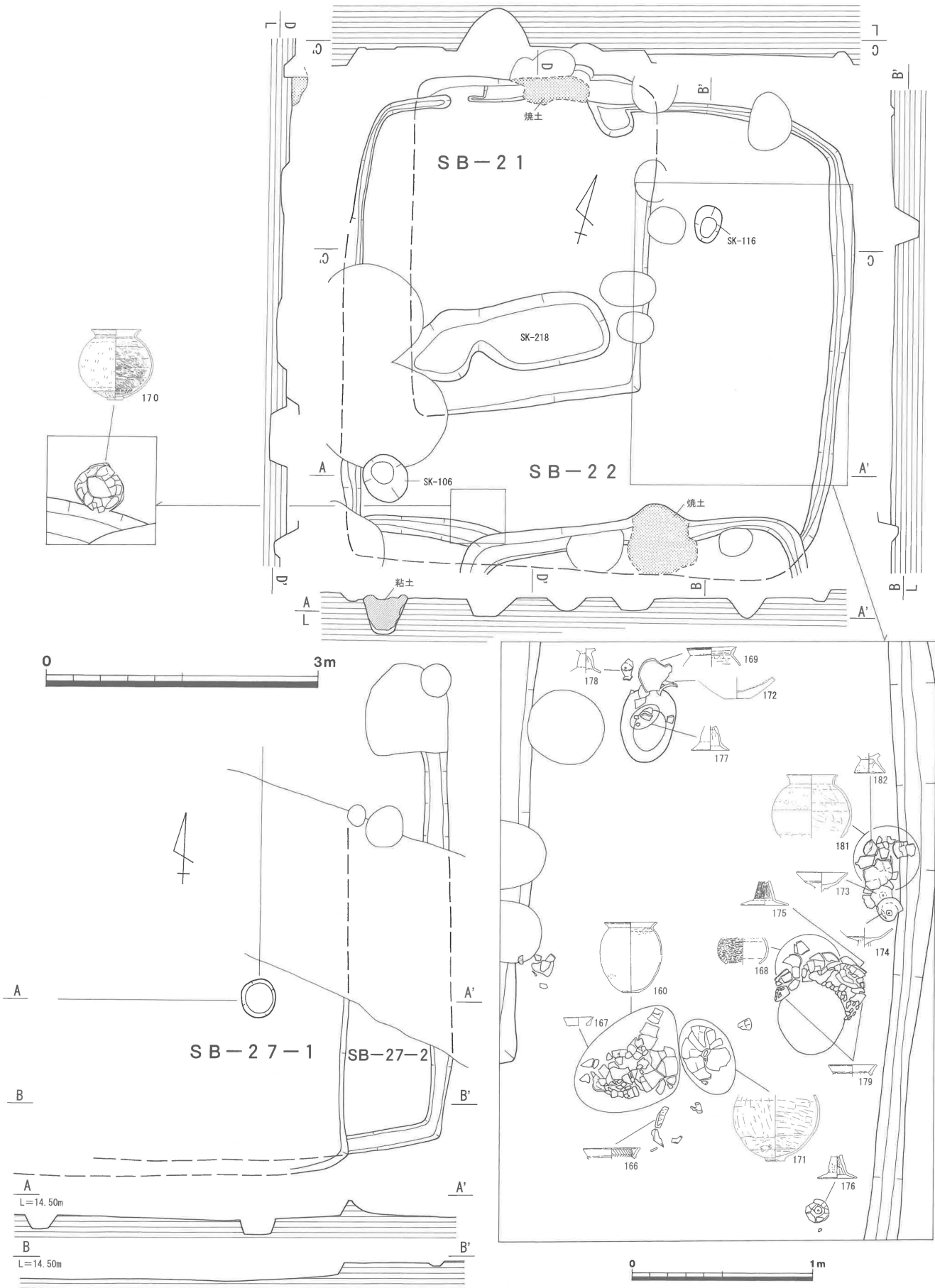
調査区中央やや南側のW・X-13・14区、SB-24と重複するようにして検出された竪穴住居である。壁及び壁溝は直線的で、コーナーは直角に折れることから、平面形は「方形」を呈する。規模は南北6.0m、東西6.4mを測る。壁及び壁溝から推測される主軸方位はN-10°-Wである。

壁は、最も残りの良い部分で高さ8cm程を測り、壁溝は幅20~40cm、深さは3~6cm程で、南西のSB-24と重複する付近でやや不明瞭となる。また、南辺中央には壁溝に直交するように幅15~20cm、深さ2~4cm、長さ1.1m程の2条の溝が検出されている。床面は、地山を掘り込み平坦となる。埋土は、黒灰色砂質土である。住居の中央やや北東寄りの床面には30cm×30cm程の範囲に焼土が確認されており、炉である可能性が考えられる。床面に掘られた穴はほとんどが後世のもので、柱穴と推測されるものは見つかっていない。住居の北辺や南東隅には貯蔵穴と考えられる土壇がいくつか検出され、このうち南東隅の土壇SK-183では土師器高坏・甕（第31図186・187）が出土している。これ以外では土師器壺・高坏など（第31図188~190）が出土しており、建物の時期は古墳時代中期中~後葉と考えられる。

SB-24（第19図）

調査区中央やや南側のW・X-14区で検出された竪穴住居である。住居の北東隅ではSB-23を壊しているが、これ以外の部分での遺存状況は非常に悪い。壁及び壁溝は直線的で、コーナーは直角に折れることから、平面形は「方形」を呈する。規模は南北5.4m、東西5.4mを測る。主軸方位はN-7°-Eである。

壁は、最も残りの良い部分で高さ5cm程を測り、壁溝は幅20cm前後、深さは2cm程で南東隅付近に僅かに見られる程度である。床面は、地山を掘り込み平坦で、SB-23の床面よりも5cm程低くなっている。埋土は、暗灰色砂質土である。炉あるいは竈は、現状では確認できていない。柱穴は4主柱穴と考えられ、柱穴の掘方は径30cm程、深さは床面から5~30cm程である。柱間は、南北間2.7m、



第18図 遺構実測図一8 (1/60・1/30)

東西間2.4mをそれぞれ測る。出土した遺物には、須恵器坏・蓋・瓶類・甕、土師器甕など（第31図191～194）があり、建物の時期は8世紀前半と考えられる。

SB-25（第19図）

調査区東側やや北側のAA-10・11区、比較的傾斜の強い部分で検出された竪穴住居で、南側の多くは削平あるいは流出している。壁はやや外側に張り出し、コーナーは丸味を帯びていることから、平面形は「隅丸方形」あるいは「隅丸長方形」を呈すると推測される。規模は南北3.5m以上、東西4.0m以上（推定復元5.0m）を測る。主軸方位はN-30°-Wである。

壁は、最も残りの良い部分で高さ38cm程を測り、壁溝は残存する部分では確認されなかった。床面は地山を掘り込み平坦となるが、本来の地形が南に向かって低く傾斜しているため、南側の床面は既に削られていると推測される。埋土は、黒灰色砂質土である。北辺に近い床面には20×20cm程の範囲で焼土が確認され、炉あるいは竈の痕跡と推測されるが、遺存状態が悪いこともありはっきりしない。柱穴は4支柱穴と考えられ、柱穴の掘方は径30～40cm程、深さは床面から10～30cmと一定しない。柱間は南北間2.3m、東西間2.5mを測る。また、これらの柱穴とはずれた位置にも4支柱穴と考えられる柱穴があり、住居の建て替え等の可能性が推測される。北壁に接するように須恵器坏身、土師器長胴甕、土製支脚など（第31・32図195～205）がまとまって出土している。建物の時期は、出土遺物から6世紀末葉と考えられる。

SB-26（第15図）

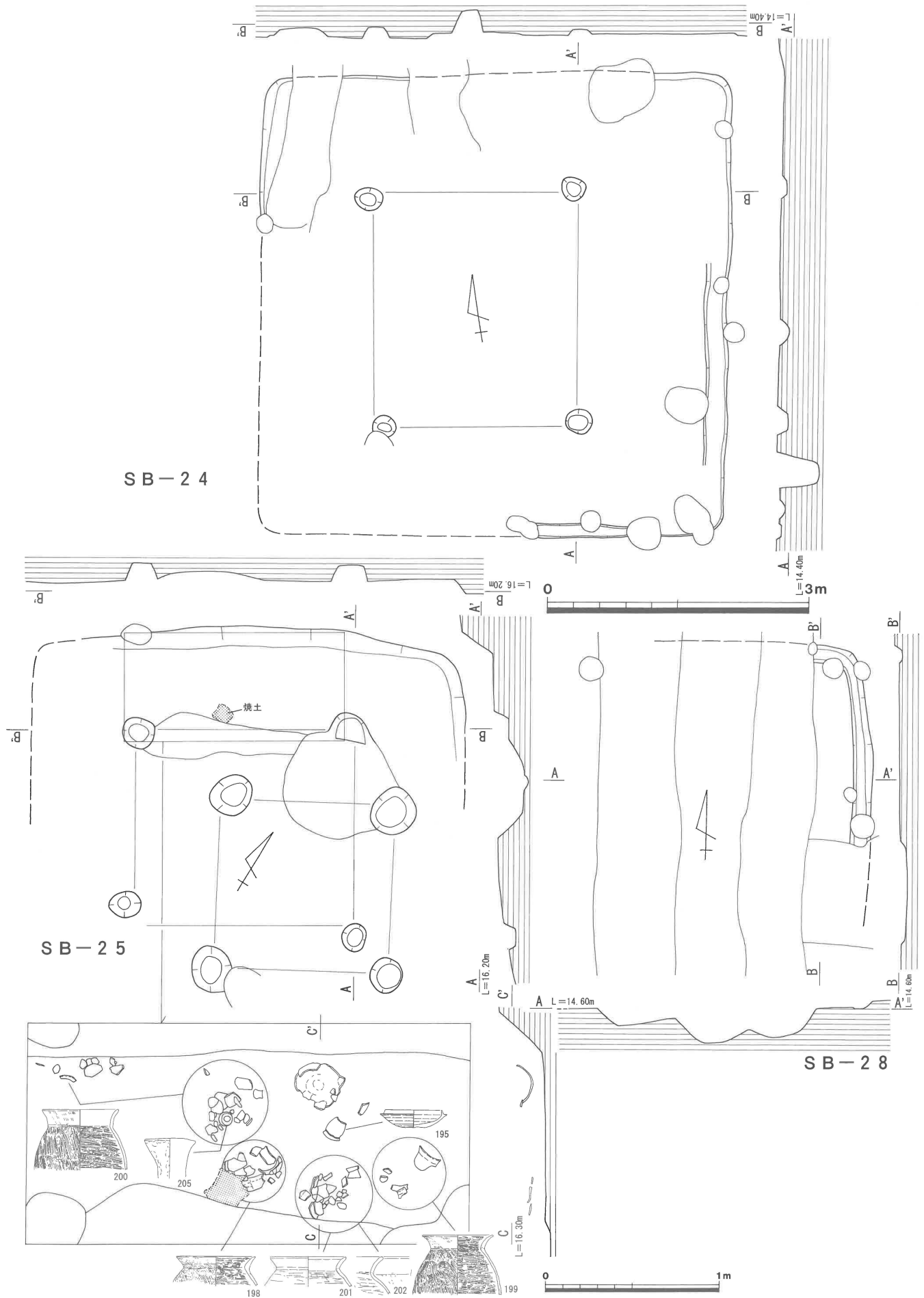
調査区西側中央のU・V-12・13区、比較的傾斜の強い部分で検出された竪穴住居であるが、多くが削平されており不確かな部分が多い。壁溝はやや外側に張り出し、コーナーは丸味を帯びていることから、平面形は「隅丸方形」あるいは「隅丸長方形」を呈すると推測される。規模は南北1.7m以上、東西7.9mを測る。壁及び壁溝から推測される主軸方位はN-1°-Eである。

壁は遺存しておらず、壁溝は幅30～40cm、深さは5～10cmで、北辺の中央は不明瞭となる。地山面は南に向かって低く傾斜しているため、本来の床面の多くは既に削られていると推測される。壁溝の埋土は、暗灰色砂質土である。炉あるいは竈は、現状では確認できていない。柱穴は4支柱穴と考えられ、柱穴の掘方は径40～50cm程、深さは床面から13～30cmである。柱間は4.2mを測る。壁溝からは、須恵器坏身・壺あるいは瓶類、磨製石斧（第32図207～209）が出土している。建物の時期は、出土遺物から7世紀前～中葉と考えられる。

SB-27（第18図）

調査区中央南側のW-15区で検出されたものであるが、僅かに検出された壁や壁溝から推測しているため竪穴住居ではない可能性もある。なお、壁のみが検出された西側のSB-27-1と壁溝のみのSB-27-2が重複しているようである。

SB-27-1は、高さ16cm程の壁が「L」字状に検出されたのみで、住居の平面形は「方形」あるいは「長方形」と推測される。規模は南北1.9m以上、東西0.7m以上を測る。壁から推測される主



第19图 遺構実測図-9 (1/60・1/30)

軸方位は $N-3^{\circ}-W$ である。床面は、地山を掘り込み平坦で、SB-27-2の床面よりも15cm程低くなっている。埋土は、暗灰色砂質土である。炉あるいは竈は、現状では確認できていない。柱穴も確認できない。出土した遺物には、須恵器坏・蓋、土師器甕など（第32図210～213）があり、建物の時期は8世紀後半と考えられる。

SB-27-2は、幅20～25cm、深さ3cm前後の壁溝が「L」字状に検出されたのみであるが、住居の平面形は「方形」あるいは「長方形」と推測される。規模は南北4.4m以上、東西2.4m以上を測る。壁溝から推測される主軸方位は $N-2^{\circ}-W$ である。床面は、地山を掘り込み平坦となる。壁溝の埋土は、地山土混じりの灰色砂質土である。炉あるいは竈は、現状では確認できていない。柱穴は1ヶ所（径約40cm、深さ15cm）で推測されるが、これ以外は不明である。建物の時期は、8世紀代と推測される土器片が出土しているだけではっきりしないが、SB-27-2に壊されていることから、それよりより古くなるだろう。

SB-28（第19図）

調査区西側中央のT-14区で検出されたものであるが、後世の溝などに壊され僅かに検出された壁や壁溝から推測しているため竪穴住居ではない可能性もある。

壁は高さ4cm程を測り、壁溝は幅20～25cm、深さ2cm程で、やや外に張り出すようになり、コーナーは丸味を帯びており、住居の平面形は「隅丸方形」あるいは「隅丸長方形」と推測される。規模は南北2.3m以上、東西0.7m以上を測る。壁及び壁溝から推測される主軸方位は $N-1^{\circ}-W$ である。床面は、地山を掘り込み平坦となる。埋土は、黒灰色砂質土である。炉あるいは竈は、現状では確認できていない。柱穴も確認できない。出土した遺物には、須恵器摘み蓋・甕、土師器甕など（第32図214）があり、建物の時期は8世紀代と考えられる。

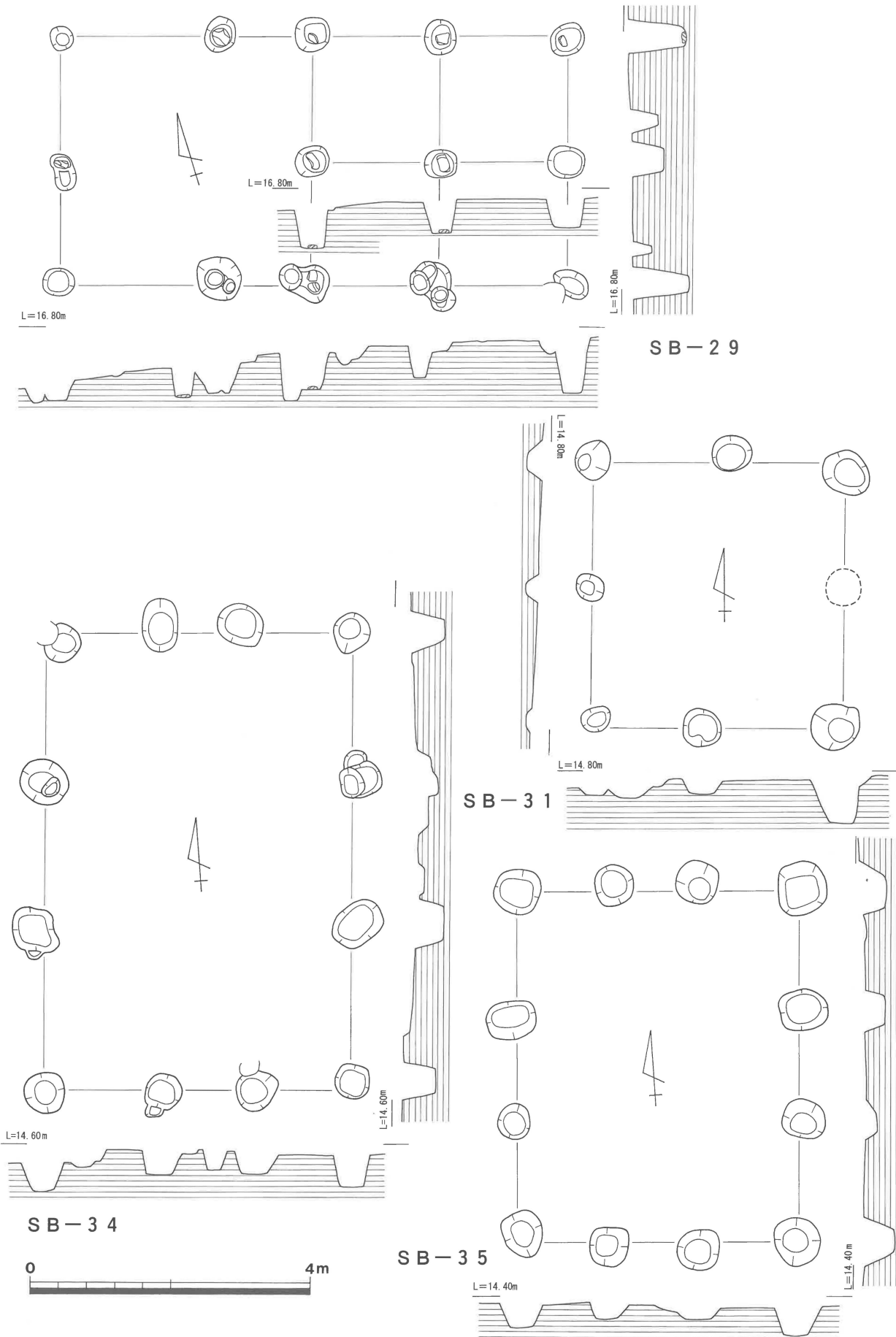
SB-29（第20図）

調査区北西のU・V-10区で検出された4間×2間の掘立柱建物で、東側半分は総柱になると考えられる。主軸方位は $N-17^{\circ}-E$ である。規模は桁行7.25m、梁間3.6mをそれぞれ測り、柱間は一部で約2.2m、約1.4mとなるが、それ以外は約1.8mで比較的一定している。

柱穴は小さいものは径30cm程であるが、これ以外は径50cm前後と比較的一定で、深さは40～50cm程度が平均で、深いものでは80cmを測るものがある。いくつかの柱穴には20～30cm大の礎石が見られる。埋土は、暗灰色砂質土が主体で、灰色砂質土等も一部に見られる。柱穴からは土師器の小皿・鍋の小片のみが出土しており、建物の時期は中世後半頃と推測されるがそれ以上は明らかではない。

SB-30（第21図）

調査区西側中央のU・V-13・14区、竪穴住居のSB-14・SB-15と重複して検出された3間×2間の掘立柱建物で、一部総柱になると考えられる。主軸方位は $N-5^{\circ}-W$ である。規模は桁行4.1m、梁間3.7mをそれぞれ測り、柱間は桁行で約1.4m、梁間で約1.8mとなり、桁行と梁間では大きな差がある。



第20図 遺構実測図-10 (1/80)

柱穴は、径50～80cm程と比較的一定で、一部に平面形が方形に近くなるものがある。深さは40～50cm程度が平均で、一部浅いものでは約20cmを測る。埋土は、暗灰色砂質土が主体で、地山土や焼土がまだらに混ざるものも見られる。柱穴からは須恵器碗・返り蓋・瓶類、土師器甕（第32図215～217）などの破片が出土しており、建物の時期は7世紀末葉と推測される。なお、この付近で重複する建物の前後関係を示せば、SB-14→SB-15→SB-30の順となろう。

SB-31（第20図）

調査区南西のW-13区、溝SD-30やSD-45と重複して検出された2間×2間の掘立柱建物である。主軸方位はN-1°-Eである。規模は桁行3.8m、梁間3.6mをそれぞれ測り、柱間は1.6～1.9mであまり一定しない。

柱穴は、径40～70cm程と比較的一定で、一部は溝SD-45によって壊されている。深さは周辺部は削平されていることもあり20cm前後を測るものが多いが、67cm程と比較的深い柱穴も一部に存在する。埋土は、暗灰色砂質土が主体で、黒灰色砂質土で地山土が混ざるものも見られる。柱穴からは須恵器高坏片、ハケメが内外面に残る土師器甕体部片、製塩土器脚部片などの小片が出土しているだけであり、建物の時期についてはおよそ7世紀代と推測される。

SB-32（第21図）

調査区南西のV・W-14区、SB-31の南側で検出された4間×3間の掘立柱建物である。主軸方位はN-1°-Wである。規模は桁行6.6m、梁間4.3mをそれぞれ測り、柱間は桁行では1.0～2.0mとばらつきがあるが、梁間では約1.4mと比較的一定である。また、内部には仕切りと考えられる二つの柱穴（径70cm前後、深さ25cm・44cm）が見られるが、他の柱列とは並びが揃っていない。

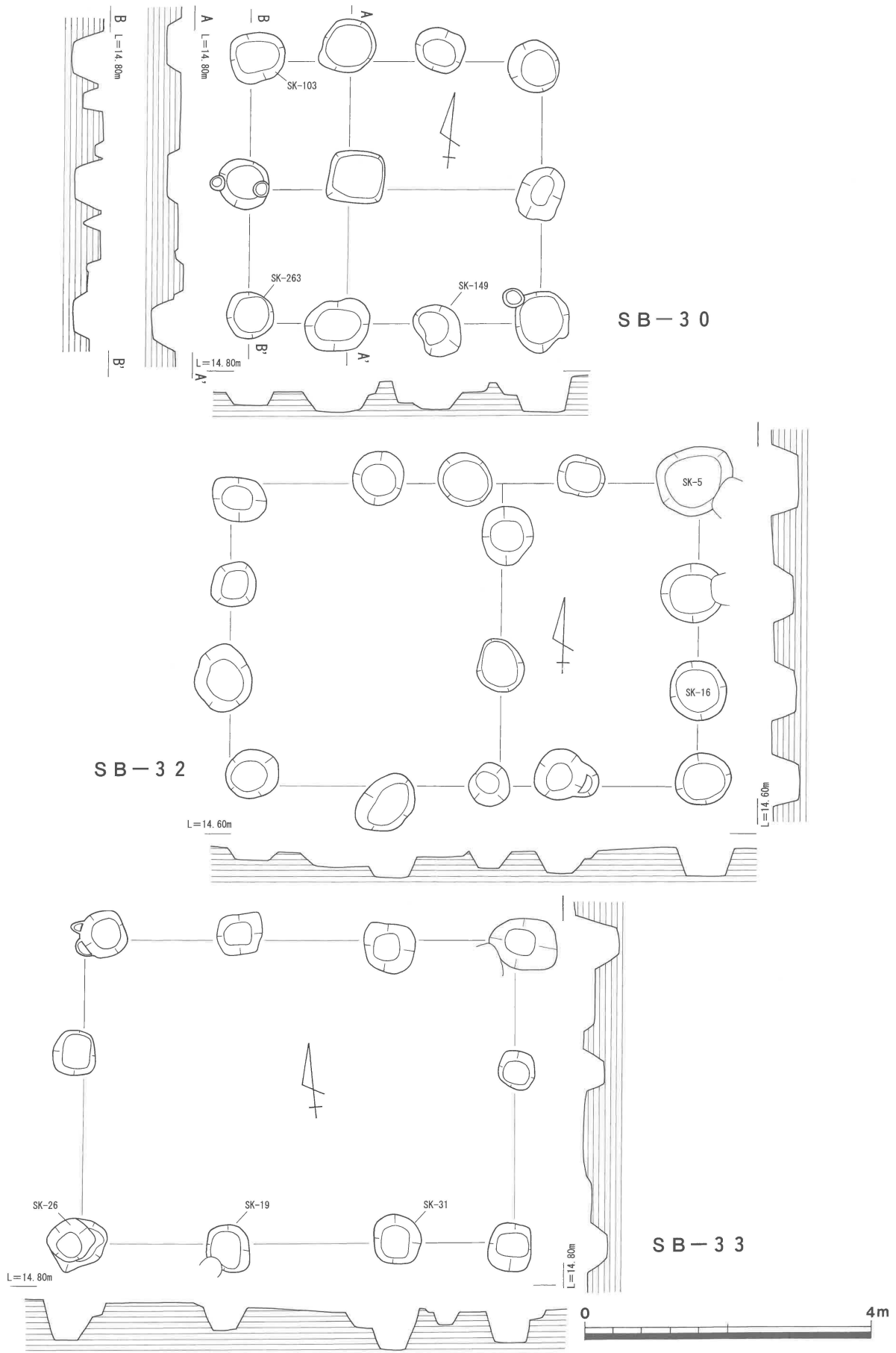
柱穴は、径60～80cm程と比較的一定である。深さは35～50cm程度が平均で、一部浅いものでは約20cmを測る。埋土は、黒灰色砂質土が主体で、地山土や礫が混ざるものも見られる。柱穴からは須恵器坏身・甕、土師器甕、砥石など（第32図218～220）の破片が出土しており、建物の時期は7世紀中葉頃と推測される。

SB-33（第21図）

調査区南西のU・V-14・15区、SB-32のすぐ西側で検出された3間×2間の掘立柱建物で、竪穴住居SB-14を壊している。主軸方位はN-6°-Eである。規模は桁行6.1m、梁間4.3mをそれぞれ測り、柱間は1.7～2.5mとばらつきが見られる。

柱穴は、径50～70cm程と比較的一定である。深さは50～60cm程度が平均で、一部浅いものでは約30cmを測る。埋土は、黒灰色砂質土が主体で、一部には暗灰色砂質土となるものも見られる。柱穴からは須恵器碗・有台坏・坏蓋、土師器甕など（第32図221～224）の破片が出土しており、建物の時期は7世紀末葉頃と推測される。

SB-34（第20図）



第21図 遺構実測図一11 (1/80)

調査区南西のV-15区、SB-33のすぐ南側で検出された3間×3間の掘立柱建物で、竪穴住居SB-08・09を壊している。また、溝SD-33やSD-34には壊されている。主軸方位はN-5°-Eである。規模は桁行6.6m、梁間4.4mをそれぞれ測り、柱間は桁行では2.0~2.2mで、梁間では1.2~1.6mとややばらつきが見られる。

柱穴は、径50~70cm程と比較的一定である。深さは40cm程度が平均で、浅いものでは約25cm、深いものでは56cmを測る。埋土は、黒灰色砂質土が主体で、一部には暗灰色砂質土や灰色砂質土となるものも見られる。柱穴からは須恵器坏類、灰釉系陶器碗、土師器鍋などの小破片が出土しているだけで時期の決定は難しいが、建物の時期は中世後半頃と推測される。

SB-35 (第20図)

調査区南西のV・W-15・16区、SB-34のすぐ東側で並ぶようにして検出された3間×3間の掘立柱建物で、竪穴住居SB-09を壊している。また、溝SD-34には壊されている。主軸方位はN-4°-Eである。規模は桁行5.1m、梁間4.1mをそれぞれ測り、柱間は桁行では1.6mで、梁間では1.2~1.3mとなり、桁行と梁間とでは多少の差が見られる。

柱穴は、径50~70cm程と比較的一定である。深さは30~40cm程度が平均で、浅いものでは約15cm、深いものでは46cmを測る。埋土は、黒灰色砂質土が主体で、一部には暗灰色砂質土となるものも見られる。柱穴からは須恵器坏蓋や土師器鍋などの小破片が出土しているだけで時期の決定は難しいが、SB-34との位置関係も考慮して建物の時期は中世後半頃と推測される。

SB-36 (第22図)

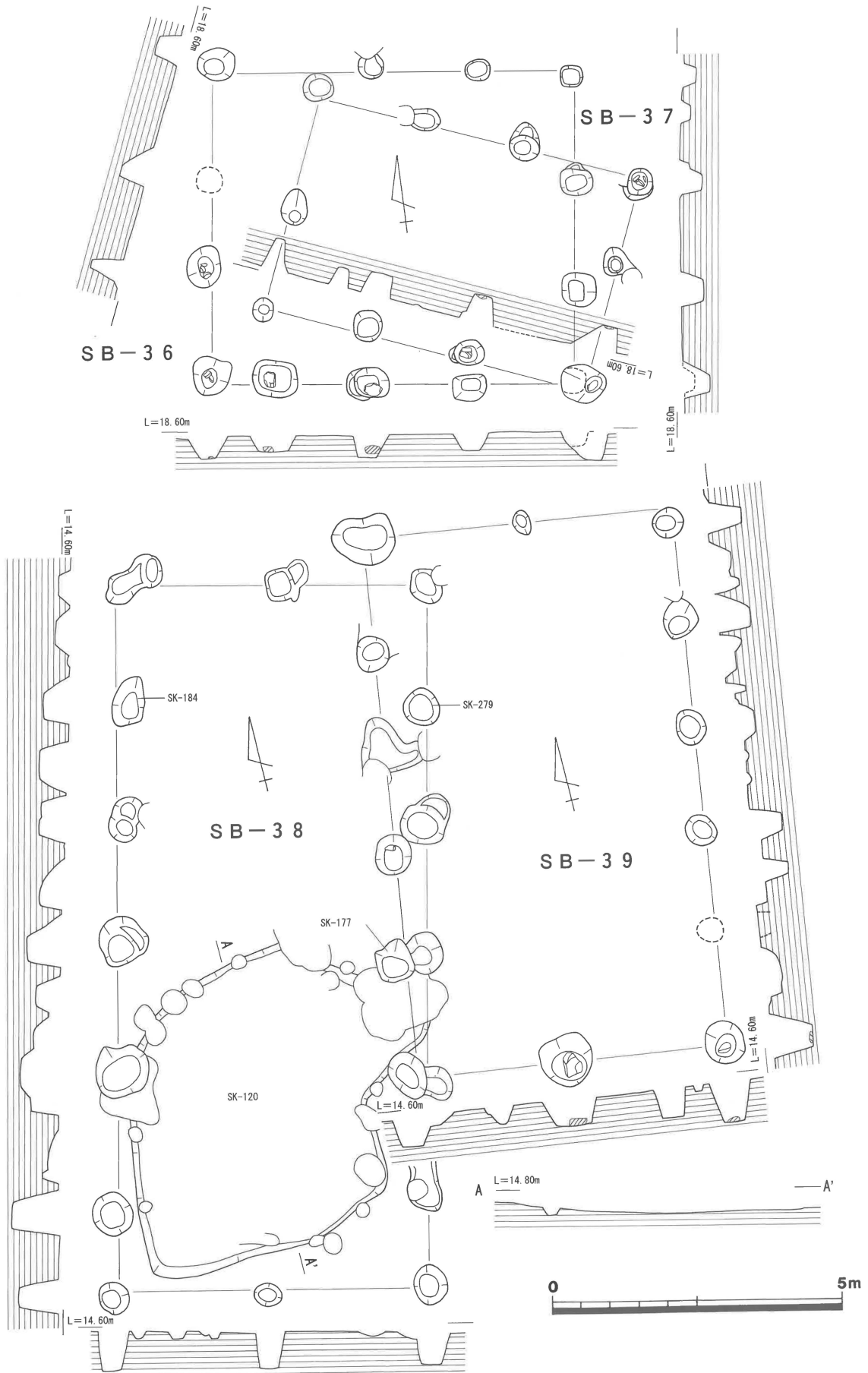
調査区の北東端近くのZ-8・9区で検出された4間(3間)×3間の掘立柱建物で、SB-37を壊している。主軸方位はN-7°-Eである。規模は桁行6.3m、梁間5.4mをそれぞれ測り、柱間は桁行では1.6~1.8mで、梁間では1.7~1.8mとなり、いずれも比較的一定であるが、北側桁行が3間となっている部分は多少柱間が広い。

柱穴は、径40~80cm程と多少ばらつきがあり、平面形が方形に近いものも見られる。深さは30~40cm程度が平均で、浅いものでは約23cmを測る。また、一辺30cm大程の礎石が入る柱穴も見られる。埋土は、暗灰色砂質土あるいは灰色砂質土が主体で、一部には地山土混じりのものも見られる。柱穴からは陶器甕、古瀬戸片などの小破片が僅か出土しているだけで時期の決定は難しいが、SB-37との前後関係も考慮して建物の時期は中世後半と推測される。

SB-37 (第22図)

調査区の北東端近くのZ-8・9区で検出された3間×2間の掘立柱建物で、SB-36と重複している。主軸方位はN-22°-Eである。規模は桁行5.75m、梁間3.8mをそれぞれ測り、柱間は桁行では1.8~2.0mと比較的一定で、梁間では1.5~2.2mとばらつきが見られる。

柱穴は、径50cm前後と比較的一定で、深さは40~50cm程度を測る。また、長さ20cm程の礎石が入る柱穴も見られる。埋土は、暗灰色砂質土あるいは灰色砂質土が主体で、一部には地山土混じりのもの



第22図 遺構実測図-12 (1/100)

も見られる。柱穴からは灰釉系陶器小皿・甕、陶器などの小破片が僅か出土しているだけで時期の決定は難しいが、SB-36との前後関係も考慮して建物の時期は中世後半と推測される。

SB-38 (第22図)

調査区の中央南側のY-13~15区で検出された6間×2間の掘立柱建物で、SB-39と重複している。主軸方位はN-15°-Eである。規模は桁行12.3m、梁間5.4mをそれぞれ測り、柱間は桁行では1.5~2.0mとばらつきが見られ、梁間では2.6~2.7mと桁行よりもかなり広がっている。

柱穴は、径40~90cm程と大きさにばらつきが見られる。深さは50~60cm程度が平均で、浅いものでは約19cm、深いものでは約84cmを測る。埋土は、灰色砂質土が主体で、一部に暗灰色砂質土や淡灰色砂質土のものも見られる。柱穴からは灰釉系陶器小皿、陶器碗・皿・甕、磁器碗、土師器鍋、土錘など(第33図230~233)の破片が出土している。なお土壙Y-14区SK-120は、建物の南側内部にちょうど収まることから、建物に伴う可能性が高い。土壙は、南北約5m×東西約5.5mの不整形なもので、断面は浅い皿状で深さは20cm程度である。遺物は陶器壺・茶入・播鉢、土師器鍋(第72図282~286)などが出土している。建物の時期は、SB-39との前後関係も考慮して18世紀後半~19世紀前半と推測される。

SB-39 (第22図)

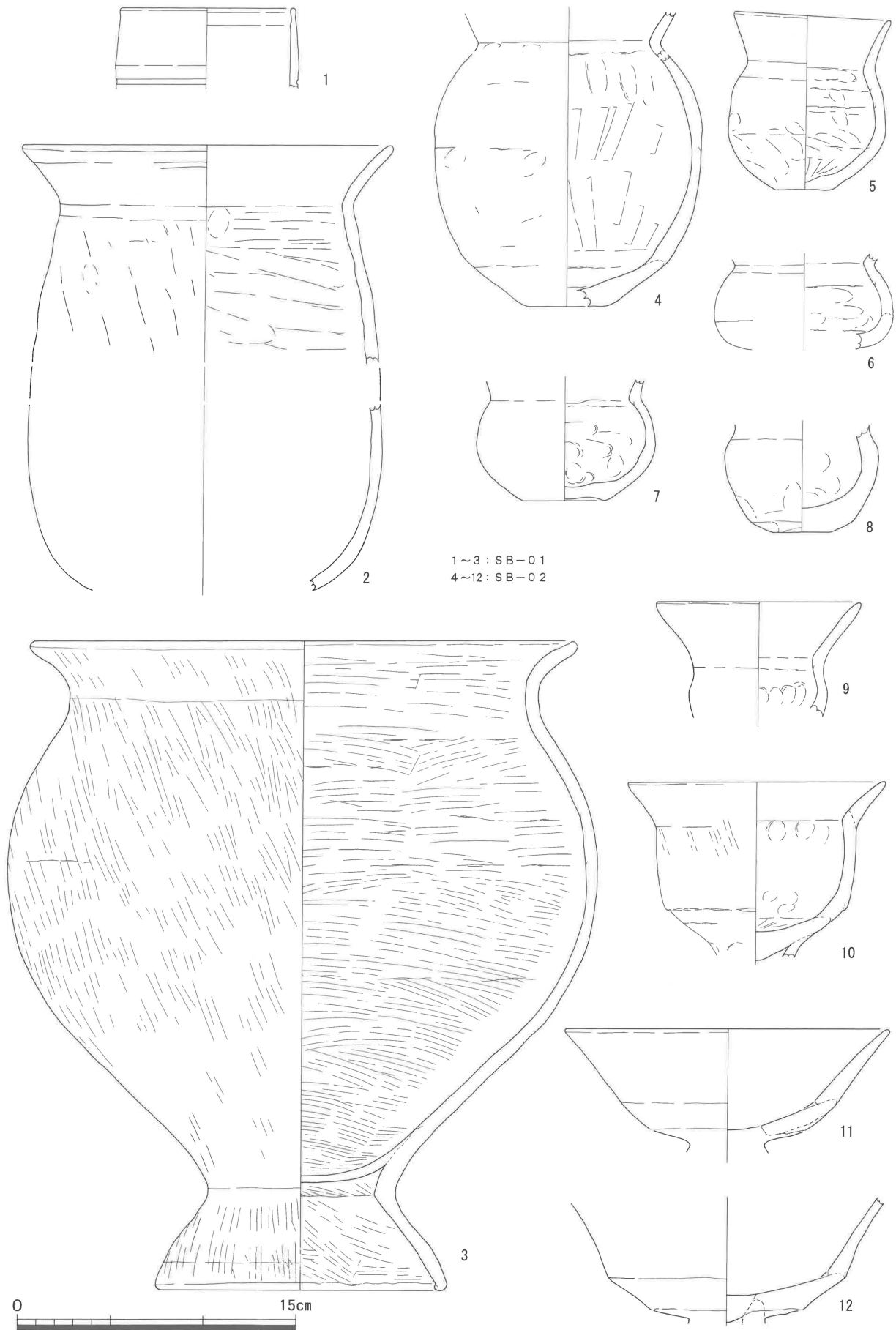
調査区の中央南側のY・Z-13・14区で検出された5間×2間の掘立柱建物で、SB-38を壊している。主軸方位はN-8°-Eである。規模は桁行9.5m、梁間5.4mをそれぞれ測り、柱間は桁行では1.8m前後と比較的一定で、梁間では2.8m程と桁行よりもかなり広がっている。

柱穴は、径50~100cm程と大きさにばらつきが見られる。深さは60cm前後のものが多いが、浅いものでは約28cm、深いものでは約70cmを測る。また、一辺40cm大程の礎石が入る柱穴も見られる。埋土は、灰色砂質土が主体で、一部に暗灰色砂質土や淡灰色砂質土のものも見られる。柱穴からは灰釉系陶器碗・小皿、陶器碗・皿・甕、土師器鍋・小皿など(第33図234・235)の破片が出土しており、建物の時期はSB-38との前後関係も考慮して18世紀後半~19世紀前半と推測される。

3. 竪穴住居・掘立柱建物出土の遺物 (第23~33図、第1表)

SB-01 (1~3)

1~3は、いずれもSB-01SK-17からまとまって出土している。1は須恵器盃で、口縁部は垂直気味に伸び、体部外面には凹線が巡る。また、口縁端部内側は浅く窪む。2は土師器長胴甕で、口頸部は「く」の字状に緩やかに曲がり、端部は丸く収める。体部は下膨れ気味で、底部は平坦底になると考えられる。体部外面には煤が付着している。調整は口縁部ヨコナデ、体部内外面は板ナデ後ナデとなる。3は同大型台付甕で、広口の口頸部は緩やかに外反し、端部近くが僅かに受け口状となる。体部はやや扁平で、脚部とは連続した成形となり、底部は円盤充填による。脚部は短く「ハ」の字状に開き、端部を小さく折り返す。体部外面下半には煤が付着している。調整は、内外面いずれも



第23図 出土遺物実測図一 1 (1 / 3)

ハケメである。これらは、いずれも7世紀前半のもの（注1）であろう。

SB-02 (4~18)

4~18は土師器である。4は壺で、頸部は「く」の字状となり、体部はやや長胴で底部は平底となる。調整は板ナデ・ナデである。5~9はいずれも小型壺である。口頸部は緩やかに外反し、端部は丸く収める。体部は球形あるいはやや偏平となり、底部は平底となる。調整は、口縁部ヨコナデ、体部はナデ・指押さえである。10は脚付壺で、口頸部は小さく外反し、端部は丸く収める。体部はやや四角くなり、脚部は緩やかに外反していくと考えられる。調整は口縁部ヨコナデ、体部から脚部は一部ハケメが残るがこれ以外はナデである。

11~16・18は高坏で、坏部はやや浅く、口縁部と間の稜は僅かに見られる。口縁部は外反気味に開き、端部は丸く収める。脚部は、「ハ」の字状に短く開くもの(16)と屈折して大きく開くもの(13~15)とがあり、いずれも端部は丸く収める。調整は坏部や脚部の端部付近がヨコナデ、これ以外はナデ・指押さえである。なお、18はSB-02に伴う土壌SK-7から出土したものである。17は甕で、口頸部は緩やかな「く」の字状となり、端部は丸く収める。調整は口縁部ヨコナデ、体部内外面ナデである。これらは、古墳時代中期後半の松河戸Ⅱ式期に併行するものであろう。

SB-03 (19~27)

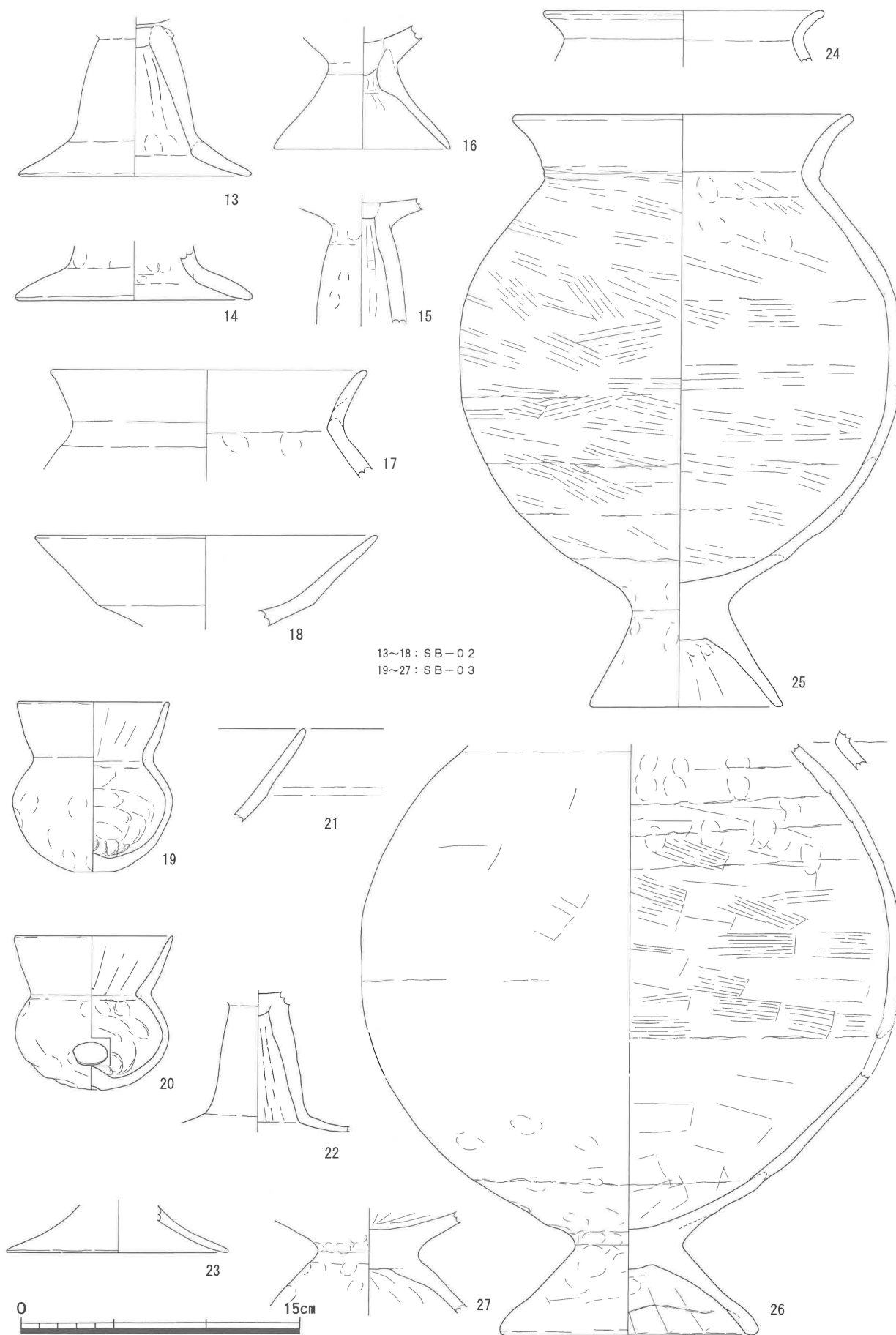
19~27は土師器である。19・20は小型壺で、口縁部は内弯気味に伸び、端部は丸く収める。体部は球形で、底部は丸底に近いが、19は僅かに平坦部があり、20は窪む。調整は、口縁部板ナデ・ヨコナデ、体部ナデ・指押さえである。なお、20の体部には焼成後の穿孔が2方向に見られる。21~23は高坏で、口縁部(21)は直線的に斜め上方に開き、端部は丸く収める。脚部(22)は細い筒部から大きく屈折して開き、端部(23)は丸く収める。調整はナデ・指押さえと考えられるが摩滅が著しい。

24は甕で、口頸部は短く外反し、端部は丸く収める。調整は摩滅のためはっきりしないがナデであろう。25~27は台付甕で、口頸部は「く」の字状に屈折し、端部は25が丸く収め、26は内側に折り返している。体部はやや長胴(25)あるいは球形(26)で、脚部は短く「ハ」の字状に開く。調整は口縁部ヨコナデ、体部から脚部はハケメ・板ナデ・指押さえである。

これらは、古墳時代中期中葉の松河戸Ⅰ式後半期に併行するものであろう。

SB-04 (28~53)

28~53は土師器である。28・29は複合口縁壺で、緩やかに外反した口縁部が更に立ち上がって外反するもので、29は端部を丸く収めるが、28はやや内傾した面となる。調整はいずれもヨコナデであるが、28には口縁部内面に櫛状工具による刺突文列が、また外面にはタテハケが見られ、柳ヶ坪型壺に類したものとなる。30は壺で、口頸部は緩やかな「く」の字状となり、端部は丸く収める。体部はやや偏平で、底部は平底となる。調整は口縁部ヨコナデ、体部はナデ・指押さえである。なお体部外面には煤が帯状に付着しており、甕として使用された可能性がある。31は直口壺で、口縁部は外上方へ直線的に伸び、端部は丸く収めている。調整は、丁寧なヨコナデである。32~34は小型壺で、体部は



第24图 出土遺物実測図一2 (1/3)

球形あるいは偏平(34)で、底部は僅かな平底となる。調整はナデ・指ナデで、34の内面にはハケメも見られる。なお、34の体部外面には赤色顔料が塗られている。

35～45は高坏で、筒部が細く屈折して大きく開くもの(35～42)と、筒部が太く屈折の弱いもの(43～45)とが見られ、調整はナデ・指押さえが基本で、一部に筒部内側をヘラケズリするもの(40)もある。48は平底甕で、47もその可能性が高い。口頸部は緩やかに外反し、端部は丸く収める。体部はやや長胴で、底部は不安定ながら僅かに平底となる。調整は、口縁部ヨコナデ、体部はナデで基本であるが、内面にはヘラ状工具によるナデ上げも見られる。肩部付近まで煤が付着している。49は丸底甕で、体部は球形で底部はほとんど器壁の厚さを変えずに丸底となる。調整は内外面丁寧なナデで、煤は最大径付近に多く見られる。46・51～53は台付甕である。50の口頸部は「く」の字状に屈折し、端部は丸く収める。体部はやや長胴で、脚部(46・50～52)は短く「ハ」の字状に開く。調整は、口縁部ヨコナデ、体部から脚部はナデである。50の体部外面下半には、帯状に煤が付着している。53は長さ4.9cm、径1.2cm程の淡緑灰色を呈する碧玉製管玉で、穿孔は両側から行われている。

これらは、古墳時代中期後葉の松河戸Ⅱ式期に併行するものであろう。

SB-05 (54)

54は土師器高坏で、坏部はやや浅く、口縁部との間の稜が僅かに見られる。口縁部は外反気味に開き、端部は丸く収める。脚部は筒状に延びる。調整は口縁部ヨコナデ、これ以外はナデ・指押さえである。古墳時代中期中～後葉の松河戸Ⅰ式後半期～Ⅱ式期に併行するものであろう。

SB-06 (55～61)

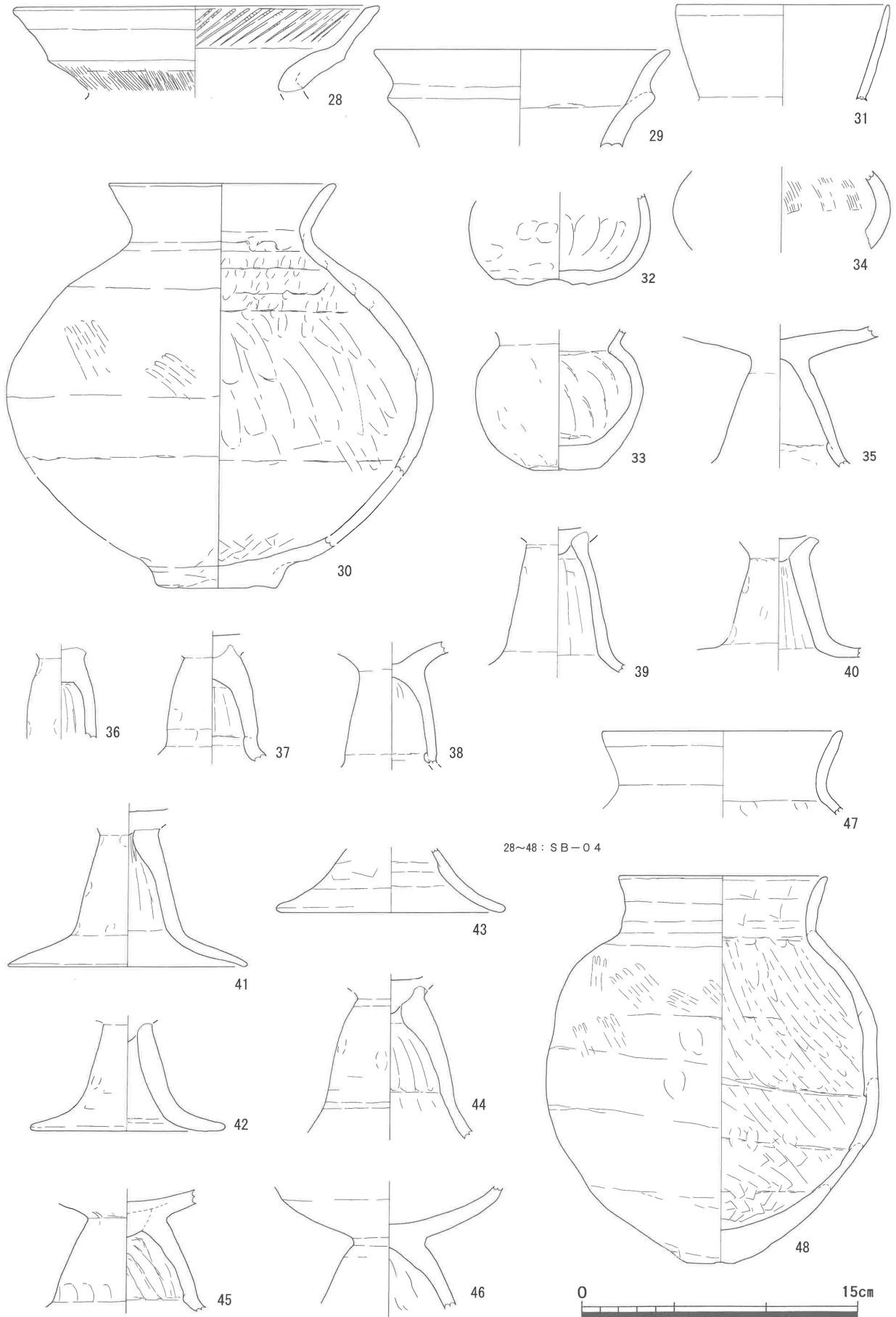
57・58は土師器、これ以外は須恵器である。55は碗で、口縁部を屈曲させ端部は丸く収める。56は甕体部片で、外面平行タタキ、内面同心円文タタキ後丁寧なナデである。57・58は甕で、口縁部は大きく外反し、端部は丸く収めるもの(57)と僅かに摘み上げたようになるもの(58)がある。調整は、ハケメ後軽いヨコナデである。59～61は坏・有台坏で、口縁部は外上方へ伸び、端部は丸く収める。口縁部より屈折した底部は突出気味に少し丸くなり、高台はやや内側に付く(60)。なお、60・61は、SB-06に伴う土壙から出土している。これらは、8世紀中葉のものであろう。

SB-07 (62～64)

62～64は須恵器である。62・63は碗と考えられ、口縁部がやや屈曲するもの(62)や内弯気味となるもの(63)がある。64は坏で、口縁部は直線的に外上方に伸び、端部はやや細くなる。調整はいずれも回転ナデである。これらは、8世紀代のものであろう。

SB-08 (65～67)

65～67は須恵器である。65・66は摘み蓋・蓋で、端部は折り曲げ幅が小さく内側まで曲げるもの(65)、単純に折り曲げるもの(66)がある。65は陣笠状となり頂部に摘みが付く。66は比較的まっすぐ伸びる。調整は、天井部外面の1/2程が回転ヘラケズリ、これ以外は回転ナデである。67は甕体部



第25图 出土遺物実測図一3 (1/3)

片で、外面は平行タタキ後ヘラ描き横線?、内面は同心円文タタキ後丁寧なナデである。これらは、8世紀後半のものであろう。

SB-09 (68)

68は土師器台付甕の脚部破片である。脚部は「ハ」の字状に開く。調整はナデである。他の台付甕との比較や調整がナデであることなどから、古墳時代中期のものであろう。

SB-10 (69・70)

69は須恵器甕体部片で、外面平行タタキ、内面同心円文タタキ後丁寧なナデである。70は土師器甕と考えられるが、内外面の摩滅が著しい。口縁部は垂直気味に立ち上がり、端部は平坦面となる。これらは、小片であるためはっきりしないが7～8世紀頃のものであろう。

SB-11 (71～75)

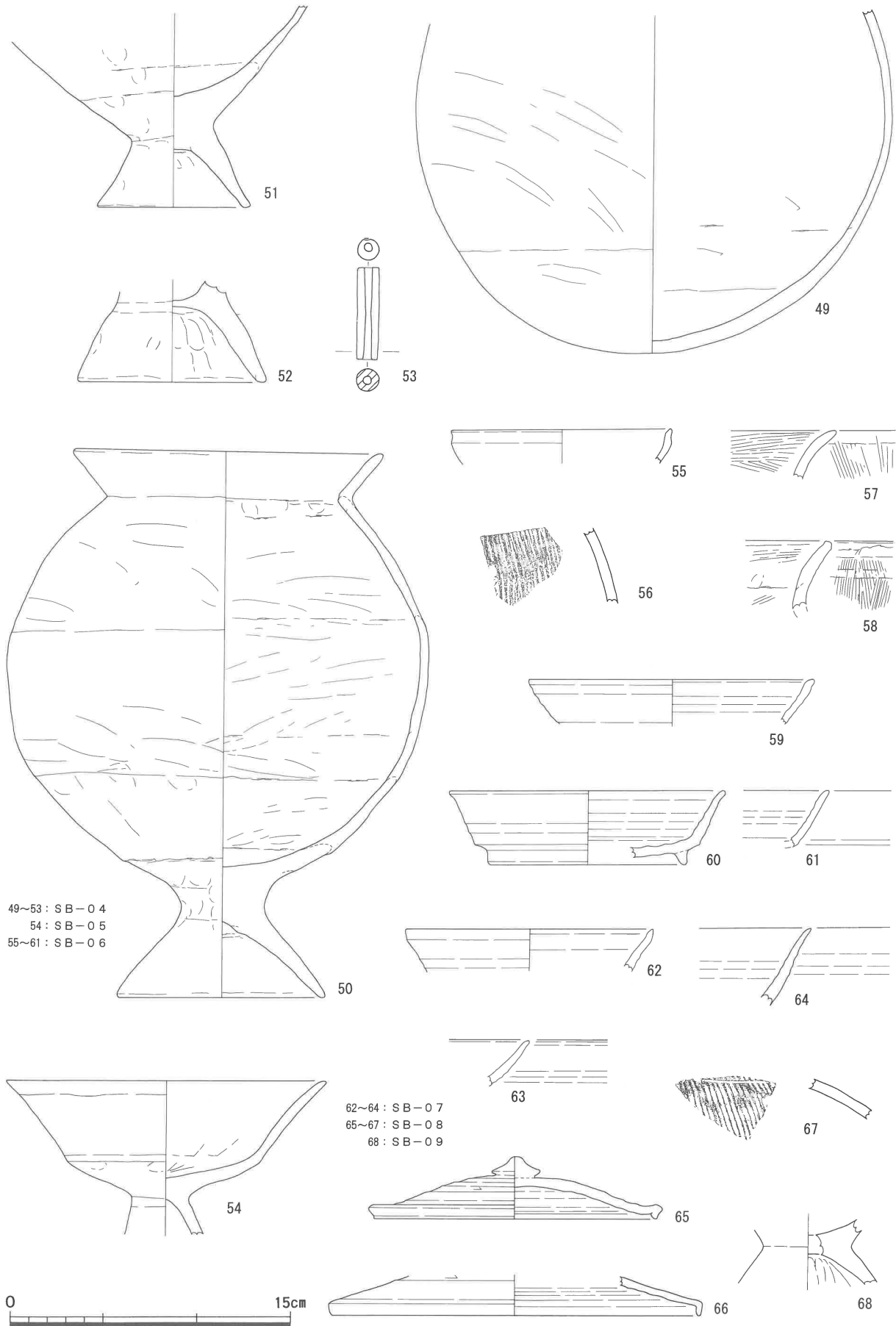
71～75は土師器である。71は壺口縁部片と考えたが高坏である可能性もある。口縁部は直線的に外上方へ伸び、端部は丸く収める。調整はヨコナデと思われるが摩滅のため不明である。72は小型壺の底部片と考えられ、平底となる。内外面ナデ・指押さえに調整である。73は高坏脚部片で、筒部から屈折して大きく開く。調整はヨコナデである。74は甕で、口頸部は短く「く」の字状に折れ、端部は丸く収める。調整は内面ヨコハケ後ヨコナデである。75は平底甕で、内面に焦げが付く。また、体部外面の調整はナデであるが、タタキ状の痕跡が残る。

これらは、古墳時代中期中～後葉の松河戸Ⅰ式後半期～Ⅱ式期に併行するものであろう。

SB-12 (76～87)

76～81・84・85・87は須恵器、82・86は土師器である。76は坏身で、立ち上がりは短く内傾するが、体部はあまり丸味がない。調整は内外面回転ナデで、底部はヘラオコシとなる。77～79は坏蓋で半球形となり、端部内面には沈線を巡らすもの(77・78)と単純に丸く収めるもの(79)がある。いずれも回転ナデによる調整である。80は瓶類口縁部で、端部は上下に広げて面をなし沈線を巡らす。81は長頸瓶、いわゆるフラスコ瓶で、体部は球形となる。調整は回転ナデ及び回転ヘラケズリによる。82は甕で、口縁部は水平気味に大きく開きやや屈曲させて、端部は丸く収める。ヨコナデによる調整。83は手捏ね土器で、碗形に近いものとなる。

84～87は、SB-12内の土壌に伴うものである。84は無台坏で、口縁部は外上方へ伸び、端部は丸くなり内側を少し窪ませる。また、底部との境は少し折れ気味となる。底部外面を僅かに回転ヘラケズリ、これ以外は回転ナデである。85は横瓶と考えられ、楕円形となる体部の一方である。調整は体部外面が回転ヘラケズリや平行叩き後ナデ、内面は回転ナデやナデである。86は長胴甕で、口頸部は僅かに外反する程度で、体部は下膨れ気味となる。底部は器壁の厚さが変わらない平坦底である。調整はハケメやナデである。87は坏身で、立ち上がりは短く内傾するが、体部はあまり丸味がない。調整は内外面回転ナデで、底部外面1/3程度が回転ヘラケズリとなる。



第26图 出土遺物実測図一4 (1/3)

これらは、7世紀中葉のものであろう。

SB-13 (88~92)

89は土師器、これ以外は須恵器である。88は陣笠形となる摘み蓋で、口縁端部は小さく折り曲げ、天井部は比較的高く作られる。天井部外面の1/3程が回転ヘラケズリ、これ以外は回転ナデによる調整。89は小型壺底部片と考えられ、僅かに突出した平底となる。ナデ・指押さえによる調整である。

90~92は、SB-13に伴う土壙SK-214からまとまって出土している。90・91は坏・有台坏で、口縁部は外上方へまっすぐ伸び、底部は高台よりも下に突出する(91)。調整は内外面回転ナデである。92は陣笠状となる蓋で、口縁端部は下方に摘み出すようになり、天井部に向かって僅かに屈曲している。天井部外面の1/3程が回転ヘラケズリ、これ以外は回転ナデによる調整である。

これらは、8世紀前半のものであろう。

SB-14 (93~102)

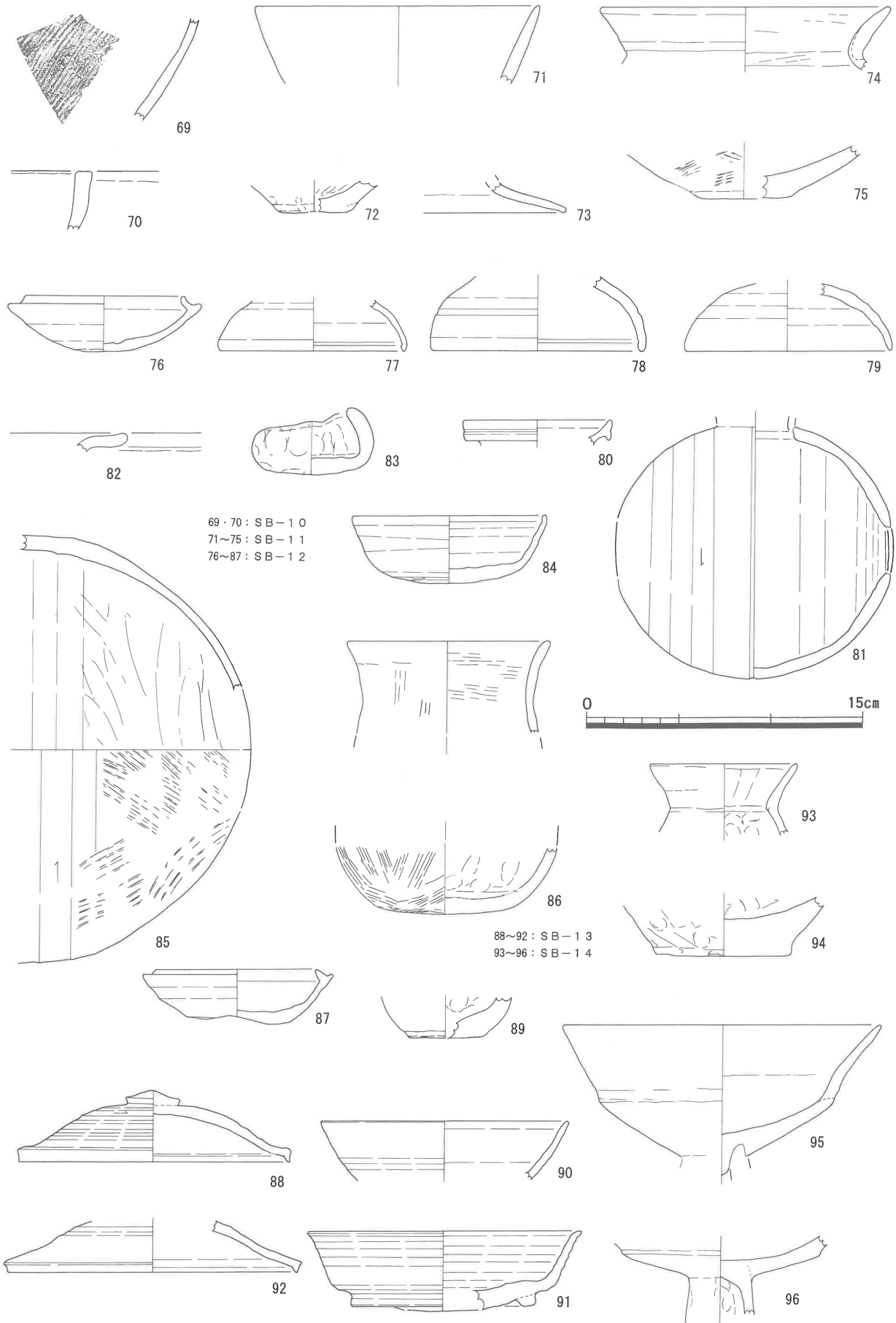
93~102は土師器である。93は小型壺片で、口頸部は「く」の字状に短く伸び、端部は丸く収める。口縁部ヨコナデ、これ以外はナデ・指押さえによる調整である。94は壺底部片で、僅かに突出した平底となる。ナデ・板ナデによる調整。95~99は高坏で、坏部はやや浅く、口縁部との間の稜は僅かとなる。口縁部が外反気味に立ち上がり、端部は丸く収める。脚部は筒状になるもの(96・97)と「ハ」の字状に直線的に伸びるもの(98・99)とがあり、後者の端部は丸く収める。全体的に摩滅が著しいが、口縁部ヨコナデ、これ以外はナデであろう。100は甕で、口頸部は外反しながら緩やかに屈曲し、端部は丸く収める。調整はヨコナデで、外面にタテハケが残る。101・102は同一個体と考えられる台付甕で、脚部は「ハ」の字状に短く開き端部は面となる。ナデによる調整で、端部外面に煤が付着する。

これらは、古墳時代中期後葉の松河戸Ⅱ式期かやや新しい時期に併行するものであろう。

SB-15 (103~110)

103~105・110は須恵器、106・107は土師器である。103は高坏で、坏部はやや浅く、外面には口縁部とを分ける稜が残る。口縁部は内弯気味に伸び、端部は丸味を帯びた面となる。脚部は、筒部から緩やかに開き、端部は下方へ摘み出すようになる。端部近くの外面には浅い沈線が巡る。坏部外面下半に回転ヘラケズリが残るが、これ以外は回転ナデによる調整である。104は瓶類口縁部、105は瓶類底部と考えられる。口縁部は、端部近くに稜があり、端部は面となる。底部は僅かに平坦部が見られ、体部に向かって緩やかに伸びる。底部外面が回転ヘラケズリ、これ以外は回転ナデによる調整である。106は甕で、口頸部は大きく外反し、端部は丸く収める。ヨコナデによる調整であるが、外面にハケメが残る。107は甕底部片で、突出した平底となる。外面ハケメ、内面ナデによる調整である。108は土製支脚で、断面は丸味を帯びる。調整はナデ・指押さえである。109は不明鉄製品で、断面は方形で一方が緩やかに曲がる。刃部などは確認できない。

110は、SB-15に伴う土壙SK-276から出土した坏蓋で、口縁部と天井部を分ける沈線が巡り、端部内側にも沈線が見られる。回転ナデによる調整である。



第27図 出土遺物実測図一5(1/3)

これらは、7世紀前半のものであろう。

SB-16 (111~129)

111~129は土師器である。111・112は壺で、体部は球形で底部は突出した平底となる。肩部には櫛描横線文が施される。調整は外面がハケメ後やや粗いヘラミガキ、内面はナデ・板ナデである。また底部外面には初殻・スサ痕が見られる。113は複合口縁壺で、緩やかに外反した口縁部が更に立ち上がって外反するもので、端部は丸味を帯びた面となる。調整は口縁端部から内面がヨコナデ、口頸部外面はナデ・指押さえである。114~116は小型壺で、口頸部は「く」の字状となり、端部は丸く収める。なお、115の口縁部は内弯気味となる。体部は球形で、底部は115が丸底、116は平底となる。調整はナデ・指押さえで、115の口縁部外面のみヨコナデである。

117~128は高坏である。坏部は浅く、口縁部との間に稜が見られるもの(117・118・120)と、ほとんどないもの(119)がある。口縁部は外上方へ比較的まっすぐに伸び、端部は丸く収める。117・118の内面はヘラミガキで、これ以外はヨコナデによる調整である。脚部は、筒部が中膨らみとなる。調整はナデ・指押さえである。123・124は甕で、123の口頸部は大きく外反し、端部はやや細めながら丸く収める。124は「く」の字状に屈折し、端部はやや厚手で丸く収める。123の口縁部はヨコナデ、これ以外はハケメ・ナデ・板ナデによる調整。125~127は台付甕脚部で、「ハ」の字状に短く開き、端部は面となる。ナデ・板ナデによる調整である。

なお、図示していないが、一辺5cm程の鉄滓と考えられるものも1点出土している。

128・129はSB-16に伴う土壙からそれぞれ出土している。128は高坏脚部片と考えられ、端部に向かって大きく開き、端部近くで屈曲しながら丸く収める。調整は内外面はヨコナデである。129は甕片で、口頸部は緩やかに外反し、端部はやや外傾した面となる。口縁部ヨコナデ、外面ハケメ、内面ナデによる調整である。

これらは、古墳時代中期中葉の松河戸I式後半期に併行するものであろう。

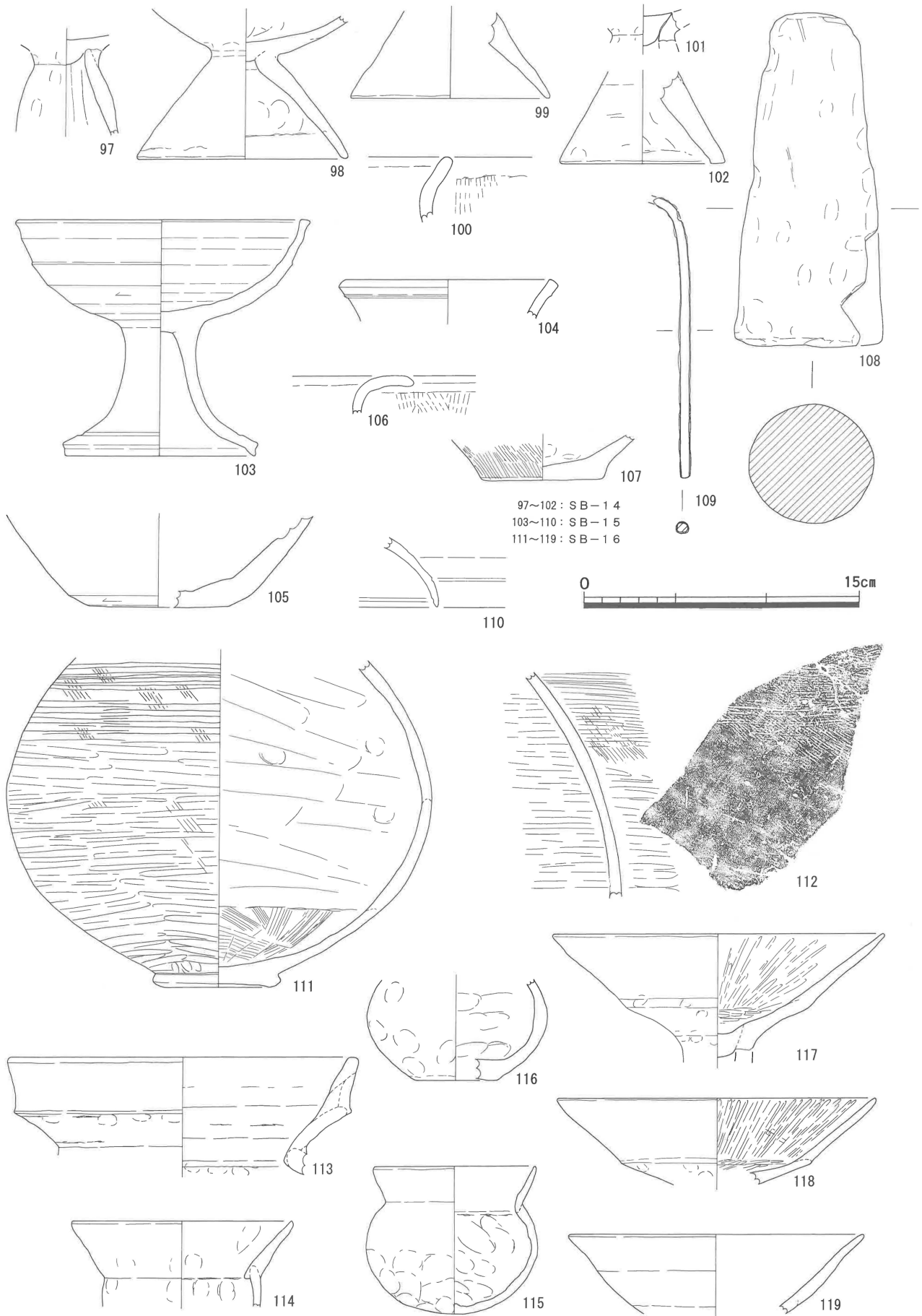
SB-17 (130)

130はSB-17に伴う土壙SK-53から出土した土師器甕で、口頸部は大きく外反し、端部はやや肥厚し丸く収める。調整は、内外面ハケメで端部近くはヨコナデである。いわゆる「三河型」と呼ばれる甕と考えられ、7世紀代のものであろう。

SB-18 (131・132)

131・132は須恵器である。131は碗で、底部から口縁部にかけては緩やかに立ち上がる。底部外面にヘラオコシが見られ、これ以外は回転ナデによる調整である。132は陣笠状となる摘み蓋で、天井部の屈曲はやや弱く、端部は単純に下方へ折り曲げている。天井部外面の1/3程が回転ヘラケズリ、これ以外は回転ナデによる調整である。これらは、8世紀前半のものであろう。

SB-19 (133~150)



第28图 出土遺物実測図一6 (1/3)

133～148は須恵器、149・150は土師器である。133は碗で、内弯気味に立ち上がった口縁部は端部を僅かに外反させる。内外面回転ナデによる調整。134～136は有台坏である。134は口縁部が外上方へ伸び、底部は高台とほぼ同じ高さまで突出する。135・136は、底部は平坦で口縁部は比較的まっすぐ立ち上がる。高台は外側で接地している。底部外面が回転ヘラケズリ、これ以外は回転ナデによる調整。137～139は摘み蓋・蓋で、天井部はあまり屈曲せずに伸び(137・138)、端部を下方へ折り曲げる(139)。天井部外面の1/3程が回転ヘラケズリ、これ以外は回転ナデによる調整。140・141は盤で、口縁部が外上方へまっすぐ伸び、端部は小さく屈曲する。底部近くが回転ヘラケズリ、これ以外は回転ナデによる調整。

142・143は壺で、底部は平坦で高台は外側あるいは全体で接地し、体部は僅かに内弯しながら伸びる。外面は回転ヘラケズリ、内面は回転ナデである。144は甗で、底部は平坦で小さな高台が付く。体部は肩部が張り、注口が突出する。体部外面下半が回転ヘラケズリ、これ以外は回転ナデ、注口はナデで先端はヘラケズリによる調整。145は鉢で、体部は内弯気味に立ち上がり口縁部は屈曲する。端部は外傾した面となる。体部外面はタタキ後ナデ、これ以外は回転ナデによる調整。146～148は甕で、頸部は「く」の字状に屈折し口縁部は大きく外反する。口縁端部は上下に肥厚して面を作る。体部内外面タタキ、口縁部は回転ナデである。149・150は甕で、149の口頸部は緩やかに外反し、端部は丸く収める。150の口頸部は大きく屈折して、口縁部は水平気味となる。口縁端部は丸く収める。調整はいずれもヨコナデである。

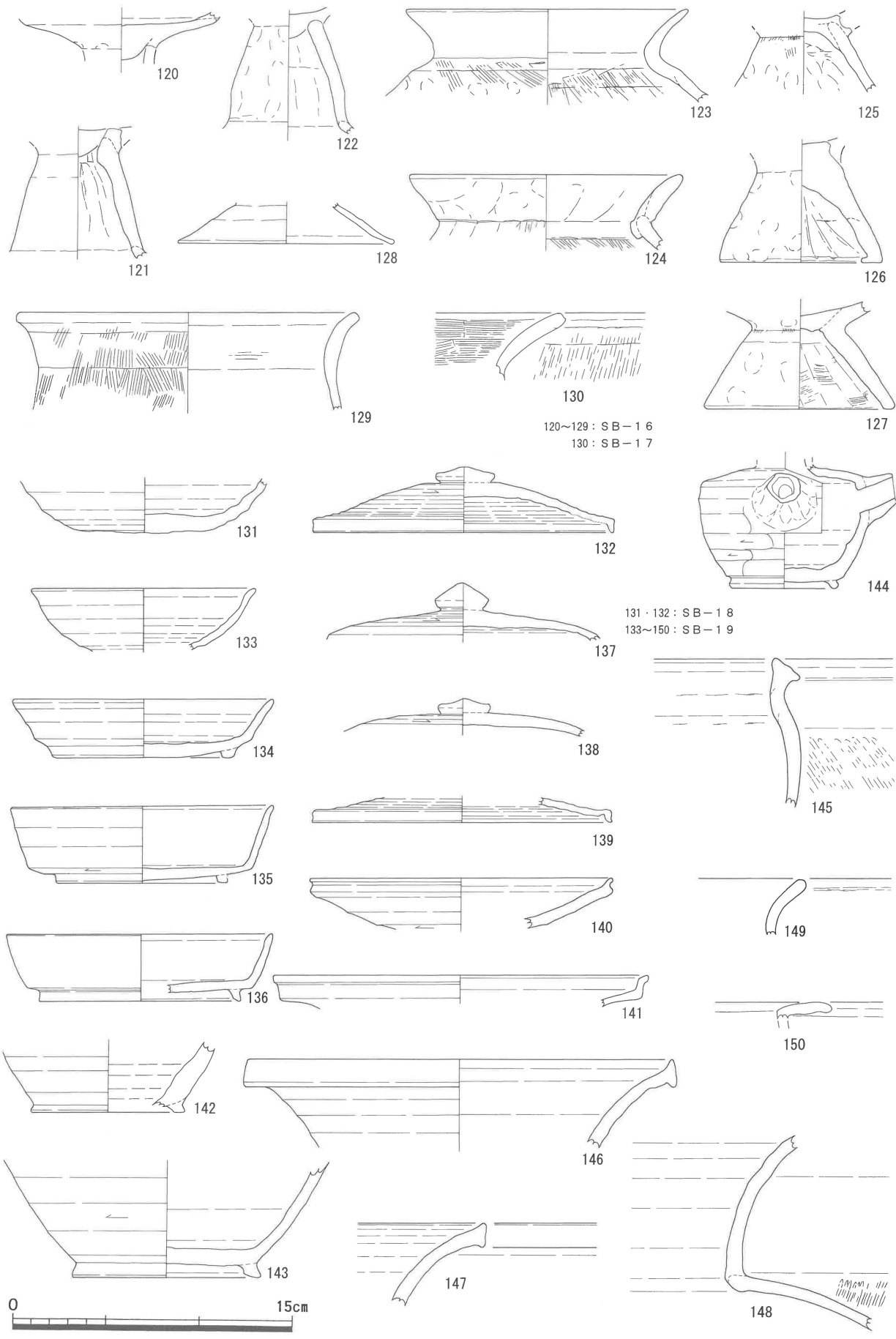
これらは、いずれも8世紀前半のものであろう。

S B - 2 0 (151～159)

151～159は土師器である。151は複合口縁壺で、緩やかに外反した口縁部が更に立ち上がって外反するもので、端部は丸く収める。調整は口縁端部から内面がヨコナデ、口頸部外面はナデ・指押さえである。152は小型壺で、頸部は「く」の字状に折れ体部は球形となる。口縁部は僅かに内弯し端部は細く収める。口縁部ヨコナデで、体部はナデ・指押さえと考えられるが摩滅している。153は高坏で、坏部は浅くその口縁部は外上方へ外反気味に伸び、端部は丸く収める。口縁部ヨコナデ、これ以外はナデである。154は甕で、頸部は「く」の字状に折れる。口縁部はやや厚手で、端部は丸く収める。口縁部ヨコナデ、これ以外はナデである。155は台付甕で、脚部は「ハ」の字状に開くが、体部との接合部は厚い。ナデ・板ナデによる調整。

156・157はS B - 2 0に伴う柱穴S K - 105から出土したものである。156は鉢と考えられ、底部は平坦で、体部は外上方にまっすぐ伸びる。調整はナデと考えられるが摩滅が著しい。157は高坏脚部で、やや中膨らみの筒部から大きく開き端部は丸く収める。端部内外面はヨコナデ、筒部内面がヘラケズリ、外面はナデである。158・159は同じく柱穴S K - 219から出土。158は小型壺で、底部は上げ底で体部は内弯気味に伸びる。ナデ・板ナデによる調整。159は高坏で、脚部は「ハ」の字状に内弯気味に開き、端部は丸く収める。内面に一部ハケメ、これ以外はナデ・指押さえである。

これらは、古墳時代中期後葉の松河戸Ⅱ式期に併行するものであろう。



第29図 出土遺物実測図一7 (1/3)

SB-21 (160~165)

160~163は須恵器、164は土師器である。160は碗で、底部は平坦で、口縁部は内弯気味に伸びる。端部は丸く収め、内側には沈線が巡る。161は坏身で、体部はやや偏平で立ち上がりは短く内傾する。いずれも体部外面下半が回転ヘラケズリ、これ以外は回転ナデ。162は瓶類の口縁部片で、筒状にまっすぐ伸び端部は丸く収める。163は壺口縁部片と考えられ、端部は肥厚して丸くなる。いずれも回転ナデによる調整。164は甕で、口頸部は緩やかに外反し端部は丸く収める。調整はヨコナデである。165は製塩土器脚部で、ナデ・指押さえによる成形。これらは、7世紀前葉のものであろう。

SB-22 (166~184)

166~184は土師器である。166は複合口縁壺で、緩やかに外反した口縁部が更に立ち上がって外反するもので、端部は僅かに内傾した面となる。内面には櫛状工具による羽状の刺突文があり、調整は口縁部がヨコナデ、稜より下はナデである。いわゆる「柳ヶ坪型壺」の系譜を引くものであろう。167も複合口縁壺で、口縁部は外上方へ外反気味に伸び、端部は丸く収める。調整は口縁部ヨコナデで、稜より下はナデ。168は直口壺で、頸部は「く」の字状に折れ、体部は球形となる。口縁部は直線的に外上方へ伸び、端部は丸く収める。口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラミガキ、内面ナデ・指押さえ。169・170は広口壺で、頸部は「く」の字状に折れ、体部は球形で底部は平底と考えられる(170)。口縁部は外反気味で、端部は丸く収める。169は端部外側に沈線が巡り、また170の口縁外側はやや屈曲する。口縁部ヨコナデ、体部内面ハケメ(170)、これ以外はナデ・指押さえによる調整。171は壺で、底部は平底で体部は球形となる。調整はナデ・板ナデである。172は大型の壺と考えられ、底部は平底である。外面はナデであるが、内面は剥離しているため調整は不明。

173~178は高坏で、坏部はやや浅く口縁部は外上方へ比較的まっすぐ伸び、端部は丸く収める。口縁部はヨコナデ、これ以外はナデ。脚部は、筒部が直線的で端部は屈折して大きく開くもの(175・176)と、中膨らみで端部があまり屈曲しないもの(177・178)がある。175の筒部外面にはヘラミガキ、これ以外のものはナデ、脚端部はいずれもヨコナデ。179~181は甕で、179・180の頸部は「く」の字状に折れ、181は大きく外反する。179は口縁部が厚手で端部は面となるが、他は丸く収める。180の体部は長胴気味で、底部は平底となる。外面下半に煤が付着する。181の体部は球形で、口縁部外面及び最大径の部分に煤が多く付着する。調整は口縁部ヨコナデ、体部はナデ・板ナデである。182・183は台付甕で、脚部は「ハ」の字状に短く開き、端部は丸く収める(182)。調整はナデ・板ナデ。

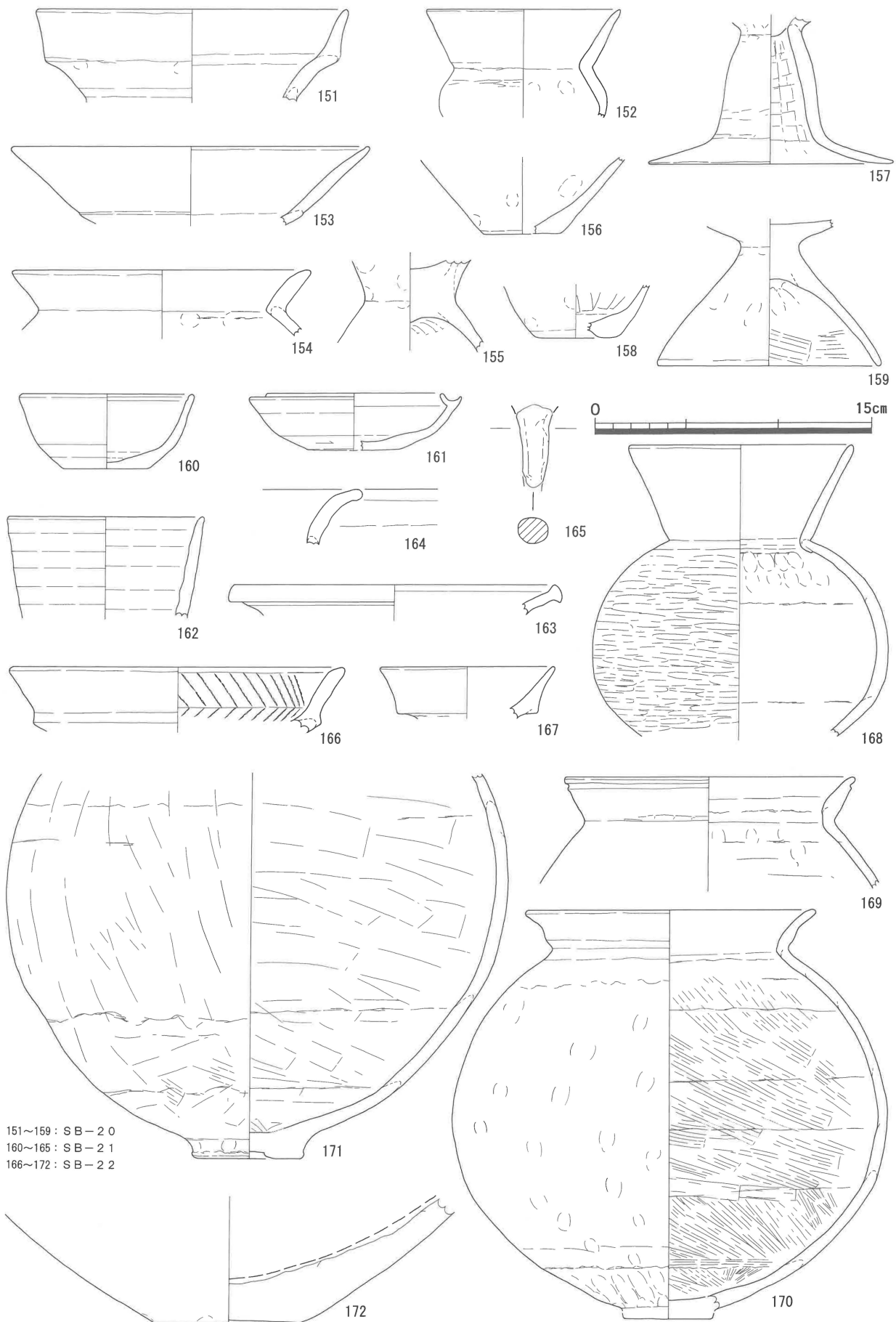
184はSB-22に伴う土壙SK-116から出土した高坏脚部で、筒部はやや中膨らみで端部に向かってあまり屈曲しない。調整はナデ・指ナデである。

これらは、古墳時代中期中葉の松河戸I式後半期に併行するものであろう。

SB-23 (185~190)

185~190は土師器である。185は甕で、口縁部はやや外反しながら伸び、端部は尖り気味となる。内外面はヨコナデによる調整。

186~190は、SB-23に伴う土壙からそれぞれ出土している。186は高坏脚部で、筒部はやや中



第30图 出土遺物実測図一8 (1/3)

膨らみで端部に向かってあまり屈曲しない。調整はナデ・指ナデである。187は甕で、口頸部は外反気味で端部は受け口状となる。調整は内外面ハケメ後、口縁部をヨコナデしている。188は壺で、底部はやや上げ底で体部は外反気味に立ち上がる。ナデによる調整。189・190は高坏で、坏部は浅く口縁部との間の稜は僅かに見られる程度である。口縁部は外上方へ伸び端部は丸く収める。いずれも摩滅のためはつきりしないが口縁部ヨコナデ、これ以外はナデであろう。

これらは、古墳時代中期中葉～後葉の松河戸Ⅰ式後半期～Ⅱ式期に併行するものであろう。

SB-24 (191～194)

191～194は須恵器である。191は坏で、口縁部は直立気味で、端部はやや細く尖る。192・193は陣笠状になると考えられる蓋で、端部は小さく下方に折り曲げる。いずれも調整は回転ナデである。194は瓶類の体部片と考えられ、平瓶などの天井部を丸く塞いだ部分である。調整は回転ナデ。これらは、8世紀前半のものであろう。

SB-25 (195～206)

195～197は須恵器、198～202は土師器である。195・196は坏身で、体部はやや偏平で立ち上がりは短くやや内傾し、端部は丸く収める。196の受部はあまり突出しない。底部外面の1/3程が回転ヘラケズリ、これ以外は回転ナデによる調整。197は坏蓋で、口縁部は垂直気味に短く立ち上がり、端部は内側に僅かに面となる。天井部とを分ける稜は比較的鋭い。調整は回転ナデ。198～202は甕で、このうち198～200は長胴甕と考えられる。口頸部は緩やかに外反し、端部は丸く収める。199の体部外面には煤が付着する。いずれも調整は内外面ハケメで、後に口縁部を軽くヨコナデしている。201・202の口頸部は大きく外反し、端部は丸く収める。体部はやや丸味を帯びる。体部内外面ナデ・板ナデ、口縁部はヨコナデによる調整。203は手捏ね土器で、碗形に作られている。204・205は手捏ねによる土製支脚で、205は中実で頂部を広く平坦にしている。206は「ハ」の字状に開き頂部は比較的平坦となる。203～205は、いずれも白っぽい類似した粘土が使用されている。204・205は火を受けた形跡が無く、土器成形台の可能性も考えられる。これらは、6世紀末葉のものであろう。

なお、206は混入と考えられる縄文土器深鉢で、外面に半截竹管による半隆起線文が施される。中期中葉のものであろう。

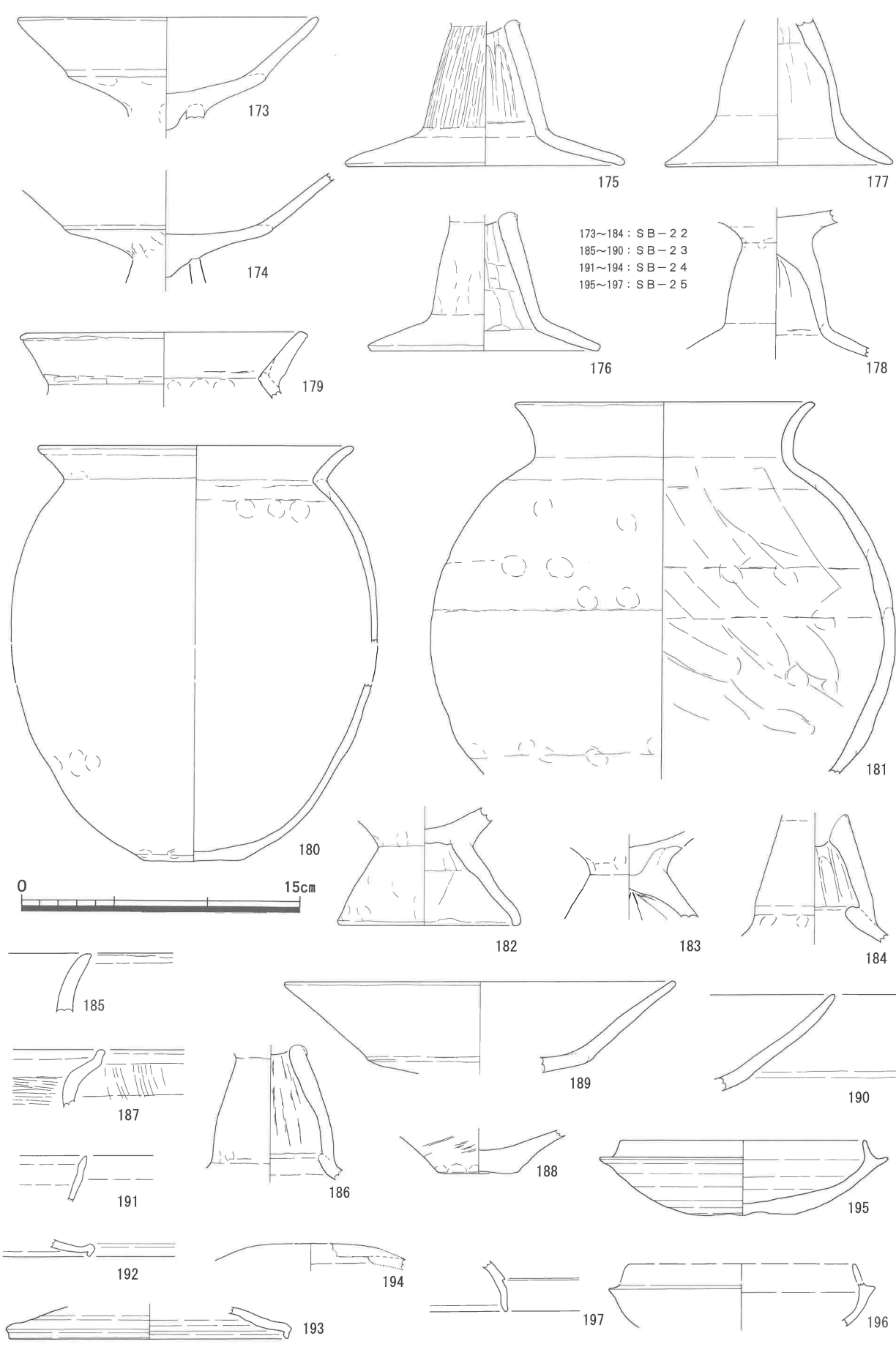
SB-26 (207～209)

207・208は須恵器である。207は坏身で、立ち上がりは短く内傾し端部は丸く収める。受部は小さく突出する。208は壺・瓶類の口縁部片で、端部は上下に肥厚し外傾した面となる。調整はいずれも回転ナデである。これらは、7世紀前～中葉のものであろう。

なお、209は混入と考えられる磨製石斧で、弥生時代のものであろう。

SB-27 (210～213)

210～212は須恵器である。210は坏で、口縁部は外上方に直線的に伸び、端部は丸く収める。211も



第31图 出土遺物実測図一9 (1/3)

坏で、口縁部はやや内弯気味で端部を僅かに屈曲させる。212は蓋で、天井部に向かって比較的直線に伸び端部は小さく折れ曲げている。調整はいずれも回転ナデ。213は土師器甕で、頸部を大きく屈折させ、口縁部は水平気味に開く。ヨコナデによる調整。これらは、8世紀後半のものであろう。

SB-28 (214)

214は須恵器摘み蓋で、陣笠状で天井部は僅かに屈曲し、端部は単純に下方に折り曲げる。頂部はやや平坦となり、摘みが付く。天井部外面の1/3程が回転ヘラケズリ、これ以外は回転ナデによる調整。8世紀代のものであろう。

SB-30 (215~217)

215~217は須恵器である。215は碗で、口縁部は内弯気味に立ち上がり、端部はやや尖る。216は返り蓋で、天井部はやや屈曲し、端部は丸く収める。また内側に小さく返りが付く。217は瓶類の口縁部片で、端部近くはやや広がり外傾した面となる。またすぐ下には突線状の稜が巡る。調整はいずれも回転ナデ。これらは、7世紀末葉のものであろう。

SB-32 (218~220)

218・219は須恵器坏身で、立ち上がりは短く内傾する。端部及び受け部の作りは鋭さに欠く。いずれも回転ナデによる調整。220は土師器壺あるいは甕の口縁部片と考えられ、端部を僅かに摘み上げている。調整はヨコナデ。これらは、7世紀中葉のものであろう。

SB-33 (221~224)

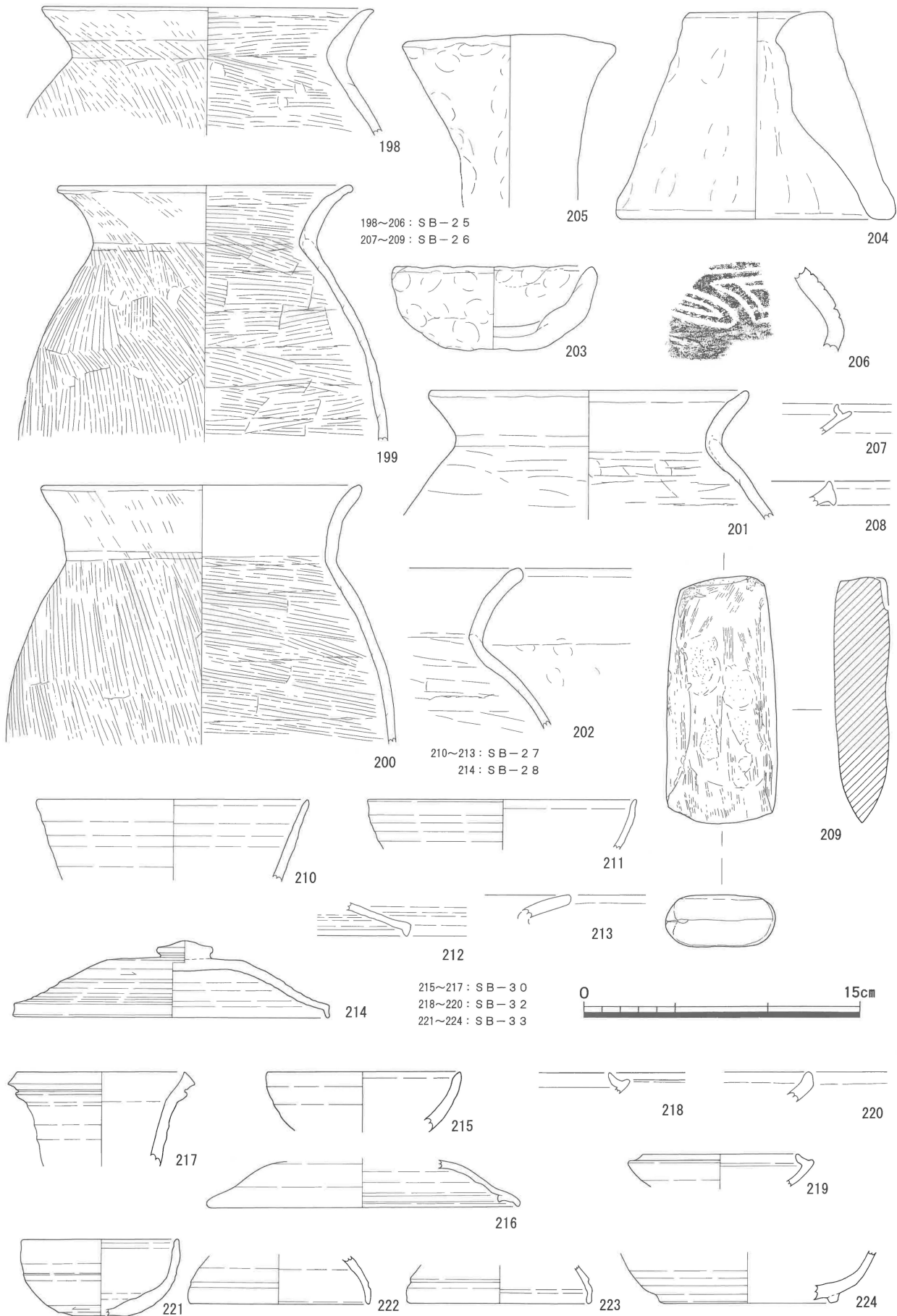
221~224は須恵器である。221は碗で、底部は平坦で口縁部は内弯しながら立ち上がる。端部は丸く収め、内側を少し窪ませる。底部外面回転ヘラケズリ、これ以外は回転ナデによる調整。222・223は坏蓋で、口縁部は内弯気味で端部は丸く収める。外面には口縁部と天井部とを分ける凹線が浅く巡る。内外面回転ナデによる調整。224は有台坏で、高台は内側で接地し、底部と口縁部の境は緩やかに屈曲している。底部外面回転ヘラケズリ、これ以外は回転ナデによる調整。これらは、7世紀末葉のものであろう。

Y-13区SK-156 (225)

225は土師器半球形鍋で、口縁部は内弯気味に伸び端部は平坦面を作る。外面には煤が付着している。口縁部ヨコナデ、体部内外面ナデ・指押さえ。16世紀代のものであろう。

Y-14区SK-79 (226・227)

226は銭貨、「寛永通寶」である。227は磁器染付大皿で、内外面に染付が見られる。高台部は削り出し。19世紀前半のものであろう。



第32图 出土遺物実測図-10 (1/3)

Y-14区SK-106 (228・229)

228は陶器天目茶碗で、端部は小さく屈曲する。内外面は鉄釉で、高台周辺は露胎。241と接合する。229は常滑窯産甕で、口縁部は内傾し端部を折り返す。16世紀末～17世紀初頭のものであろう。

Y-14区SK-279 (230・231) - SB-38

230は常滑窯産甕で、底部は広く平坦となり体部は外上方へ伸びる。ナデ・指押さえが目立つ。231は土師器くの字形鍋で、頸部の屈曲が大きい。内面板ナデ、口縁部はヨコナデによる調整。これらは、16世紀代のもと考えられるが、SB-38に伴うものではなく混入であろう。

Y-14区SK-184 (232・233) - SB-38

232は灰釉系陶器小皿で、口縁部は小さく立ち上がる。底部外面糸切り、これ以外は回転ナデによる調整。233は土錘で、ナデ・指押さえによる成形。一方に紐によるスレが見られる。これらは、13世紀中葉のもと考えられるが、SB-38に伴うものではなく混入であろう。

Y-14区SK-177 (234・235) - SB-39

234は陶器天目茶碗で、高台は内反り高台となり、口縁部は内弯気味に伸びる。内外面は鉄釉で、高台周辺は露胎。235は土師器くの字形鍋で、頸部の屈曲は緩やかである。内面板ナデ、口縁部はヨコナデによる調整。これらは、16世紀末～17世紀初頭のもと考えられるが、SB-39に伴うものではなく混入であろう。

Y-14区SK-169 (236)

236は古瀬戸平碗で、口縁部は外上方に直線的に開き、端部はやや尖る。内外面に灰釉が掛かる。古瀬戸後期。15世紀前半のものであろう。

Y-14区SK-179 (237・238)

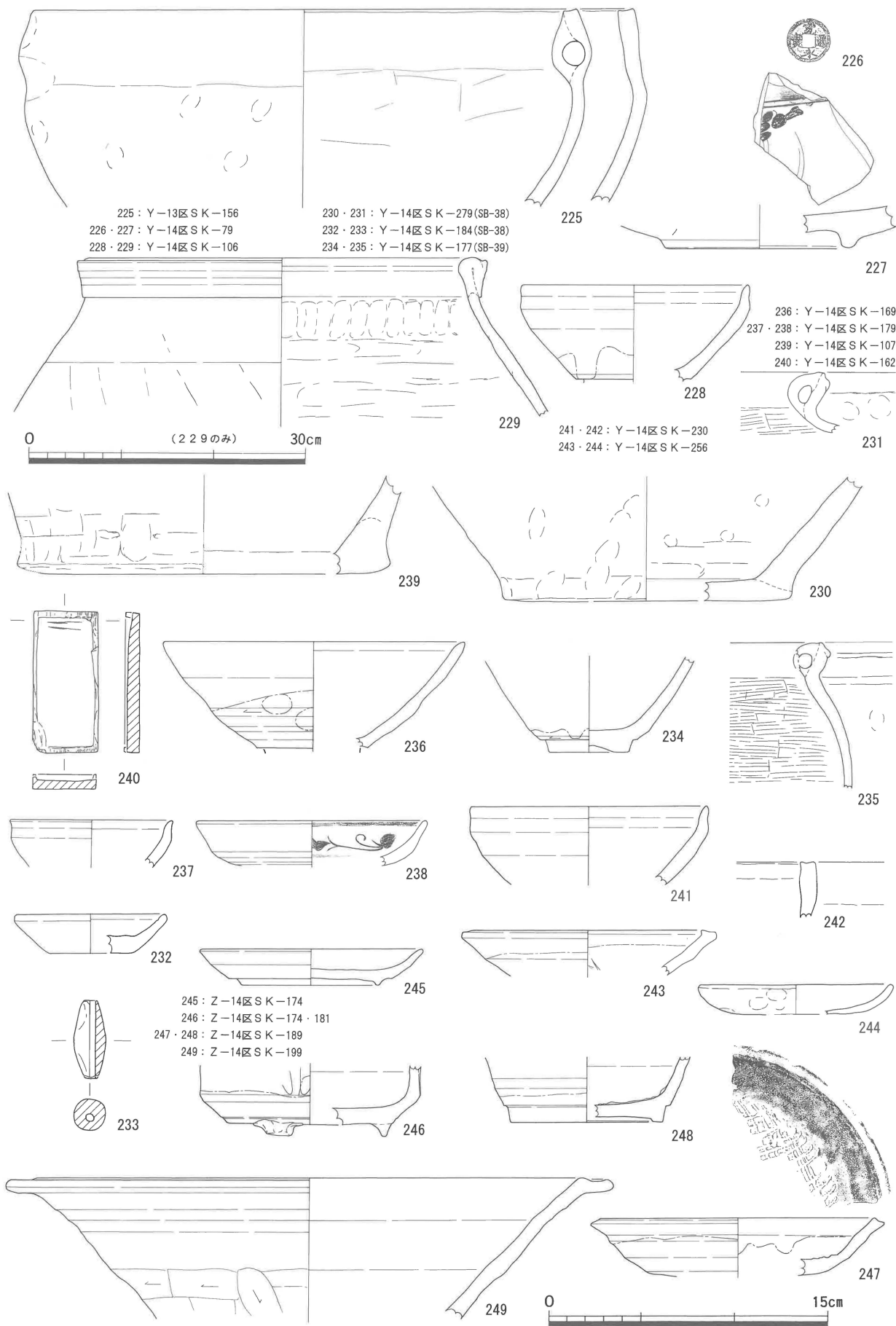
237は陶器小天目で、口縁端部は小さく屈曲する。内外面には鉄釉が掛かる。238は同丸皿で、口縁部は小さく立ち上がる。内面に鉄絵が描かれ、内外面に長石釉が掛かる。これらは、16世紀末～17世紀初頭のものであろう。

Y-14区SK-107 (239)

239は陶器甕あるいは鉢の底部片であるが、素焼きに近い製品である。底部外面から体部外面に煤が付着しており、火に掛けていた可能性がある。近世のものであろう。

Y-14区SK-162 (240)

240は小型長方形で凝灰質泥岩製と考えられる硯で、内側には墨の痕跡が見られる。近世のものであろう。



第33図 出土遺物実測図-11 (1/3 · 1/6)

Y-14区SK-230 (241・242)

241は陶器天目茶碗で、端部は小さく屈曲させる。内外面に鉄釉。228と接合する。242は土師器半球形鍋で、端部は平坦面となる。口縁部外面には煤が付着する。これらは、16世紀末～17世紀初頭のものであろう。

Y-14区SK-256 (243・244)

243は古瀬戸卸皿で、端部を僅かに摘み上げている。内面に僅かに卸目が見られ、口縁部に灰釉が掛かる。古瀬戸後期。244は土師器小皿で内面ナデ、外面ナデ・指押さえによる調整。これらは、15世紀前半のものであろう。

Z-14区SK-174 (245)

245は陶器丸皿で、端部は小さく立ち上がる。内外面に灰釉が掛かる。17世紀前半のものであろう。

Z-14区SK-174・181 (246)

246は陶器筒形香炉で、貼り付けの脚部が付く。内外面に鉄釉。18世紀後半のものであろう。

Z-14区SK-189 (247・248)

247は古瀬戸卸皿で、端部は外傾した面となる。内面に卸目、口縁部に灰釉が掛かる。古瀬戸中～後期。248は同壺で、高台部は削り出し。内外面に鉄釉が掛かる。また内面に鉄分が厚く付着する。これらは、14世紀後半のものであろう。

Z-14区SK-199 (249)

249は灰釉系陶器片口鉢で、直線的に伸びた口縁部は端部近くで屈折して水平気味となる。体部外面下半にヘラケズリが見られる。類例は藤岡窯に見られる。15世紀前半のものであろう。

注1 出土遺物の編年的な位置付けについては、次の文献を主に参考に行っている。

(財)愛知県埋蔵文化財センター 1994 『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第48集 松河戸遺跡』

東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会 1996 『鍋と甕そのデザイン』

東海土器研究会 2000 『須恵器生産の出現から消滅』

中野晴久 2005 「常滑・渥美窯」『陶磁器から見る静岡県の中世社会』菊川シンポジウム実行委員会

瀬戸市教育委員会 1990 『尾呂』

藤澤良祐 2002 「瀬戸・美濃大窯の再検討」『(財)瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第10輯

藤澤良祐 2005 「施釉陶器生産技術の伝播」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』

第1表 出土遺物 (SB) 観察表

図版-遺物No	地区	遺構	器種	分類	口径	器高	底径	その他	胎土	焼成	色調	調整等	備考
23-	1	V-7 SB-01SK-17	S	盃	9.2	(4.3)			密	良好	淡灰色	口縁部回転ナデ	
	2	V-7 SB-01SK-17	H	長胴甕	19.4	(24.3)			密	良好	淡茶褐色	体部外面板ナデ後ナデ	
	3	V-7 SB-01SK-17	H	大型台付甕	28.9	35.1	15.2	最大径31.5	密	良好	淡茶褐色	底部円盤充填	
	4	W-7 SB-02	H	壺		(15.8)	4.0	最大径14.5	密	良好	淡茶褐色	体部外面ナデ	
	5	W-8 SB-02	H	小型壺	8.2	9.4	2.6	最大径8.4	密	良好	淡茶褐色	口縁部ヨコナデ	
	6	W-7 SB-02	H	小型壺		(5.3)		頸部径7.6	密	やや不良	淡褐色	体部内面ナデ	
	7	W-8 SB-02	H	小型壺		(6.5)	4.4	頸部径8.1	密	不良	淡茶褐色	内面ナデ・指押さえ	
	8	W-7 SB-02	H	小型壺		(5.8)	3.0	最大径8.3	密	良好	淡褐色	内外面ナデ	
	9	W-7 SB-02	H	小型壺	10.8	(6.2)		頸部径6.9	密	良好	淡褐色	体部外面ナデ	
	10	W-7 SB-02	H	脚付壺	13.6	(9.4)			密	良好	淡褐色	体部内外面ナデ	
	11	W-7 SB-02	H	高坏	17.3	(5.8)			密	良好	淡褐色	口縁部ヨコナデ	
	12	W-7 SB-02	H	高坏		(6.8)			密	良好	淡褐色	内外面ナデ	
24-	13	W-7 SB-02	H	高坏		(8.1)	12.2		密	良好	淡褐色	脚端部ヨコナデ	
	14	W-7 SB-02	H	高坏		(2.9)	12.4		密	良好	淡褐色	脚端部内外面ナデ	
	15	W-8 SB-02	H	高坏		(6.6)			密	良好	淡赤褐色	脚部外面ナデ・指押さえ	
	16	W-7 SB-02	H	高坏		(6.6)	9.2		密	良好	淡褐色	脚部内外面ナデ	
	17	W-7 SB-02	H	甕	16.8	(5.8)		頸部径14.6	密	良好	淡赤褐色	口縁部ヨコナデ	
	18	W-7 SB-02SK-7	H	高坏	18.2	(4.9)			密	やや不良	淡赤褐色	内外面摩滅著しい	
	19	V-8 SB-03	H	小型壺	8.0	9.2	2.0	最大径8.6	密	良好	暗褐色	口縁部外面ヨコナデ	底部僅かに平底
	20	V-8 SB-03	H	小型壺	8.4	8.3		頸部径6.4	密	良好	淡茶褐色	胴部焼成後穿孔	反対側にも小孔あり
	21	V-8 SB-03	H	高坏		(5.0)			密	不良	淡褐色	内外面摩滅	
	22	V-8 SB-03	H	高坏		(7.5)			密	やや不良	淡褐色	内外面摩滅	
	23	V-8 SB-03	H	高坏		(2.6)	11.8		密	やや不良	淡赤褐色	内外面摩滅	
	24	V-8 SB-03	H	甕	14.6	(2.8)		頸部径12.8	密	やや不良	淡赤褐色	内外面摩滅	
	25	V-8 SB-03	H	台付甕	17.8	32.0	10.0	最大径23.8	やや粗雑	良好	暗褐色	体部外面粗いハケ	
26	V-8 SB-03	H	台付甕		(31.8)	13.2	最大径29.0	密	良好	淡茶灰色	体部外面ナデ		
27	V-8 SB-03	H	台付甕		(5.5)			密	良好	淡褐色	外面ナデ・指押さえ		
25-	28	U-9 SB-04	H	複合口縁壺	19.8	(4.6)			密	良好	淡赤褐色	口縁部内面櫛刺突文	
	29	U-9 SB-04	H	複合口縁壺	15.8	(5.4)			やや粗雑	良好	暗褐色	口縁部内外面ヨコナデ	
	30	U-9 SB-04	H	壺	12.2	(22.0)	6.4	最大径23.2	密	良好	淡赤褐色	口縁部ヨコナデ	外面肩部に煤、甕として使用
	31	U-9 SB-04	H	直口壺	11.5	(5.2)			密	良好	赤褐色	口縁部丁寧なヨコナデ	
	32	U-9 SB-04	H	小型壺		(5.1)		最大径9.8	密	良好	淡灰褐色	底部外面指ナデ	
	33	U-9 SB-04	H	小型壺		(7.6)		最大径9.0	密	良好	淡褐色	体部外面ナデ	
	34	U-9 SB-04	H	小型壺		(4.3)		最大径12.0	密	良好	淡褐色	内面ハケメ	外面に赤色顔料
	35	U-9 SB-04	H	高坏		(7.7)			密	良好	淡褐色	内外面摩滅	
	36	U-9 SB-04	H	高坏		(4.8)			密	良好	淡赤褐色	内外面ナデ	
	37	U-9 SB-04	H	高坏		(6.2)			密	良好	淡褐色	内外面ナデ	
	38	U-9 SB-04	H	高坏		(6.6)			密	良好	茶褐色	内外面摩滅	
	39	U-9 SB-04	H	高坏		(7.1)			密	良好	茶褐色	内外面ナデ	
	40	U-9 SB-04	H	高坏		(6.4)			密	良好	淡茶褐色	脚部内面ハラケズリ	
41	U-9 SB-04	H	高坏		(7.5)	12.8		密	良好	赤褐色	脚端部ヨコナデ		
42	U-9 SB-04	H	高坏		(6.0)	10.6		密	良好	淡茶褐色	内外面ナデ		
43	U-9 SB-04	H	高坏		(3.4)	12.0		密	良好	淡赤褐色	脚端部ヨコナデ		
44	U-9 SB-04	H	高坏		(8.4)			密	良好	淡赤褐色	脚部内面指ナデ		
45	U-9 SB-04	H	高坏		(6.6)			密	良好	淡赤褐色	脚部内面指ナデ		
46	U-9 SB-04	H	台付甕		(6.8)			やや粗雑	良好	茶褐色	内外面摩滅		
47	U-9 SB-04	H	甕	13.0	(4.6)			密	やや不良	暗褐色	口縁部ヨコナデ		
48	U-9 SB-04	H	平底甕	11.1	21.1	2.5	最大径18.1	密	良好	淡赤褐色	体部外面にタタキ状の痕跡	体部外面煤付着	
26-	49	U-9 SB-04	H	丸底甕		(18.6)		最大径25.6	密	良好	赤褐色	体部内面丁寧なナデ	丸底甕となる
	50	U-9 SB-04	H	台付甕	16.5	29.4	11.0	最大径22.6	密	良好	淡赤褐色	内外面ナデ	体部下半に煤付着
	51	U-9 SB-04	H	台付甕		(10.9)	7.9		やや粗雑	やや不良	暗褐色	内外面摩滅	
	52	U-9 SB-04	H	台付甕		(4.9)	9.9		密	良好	淡灰褐色	内面指ナデ	
	53	U-9 SB-04	R	管玉	長4.9	径1.2	孔径0.45	重量11.6g			淡緑灰色	両端より穿孔	碧玉製
	54	T-10 SB-05	H	高坏	17.0	(8.3)			密	良好	明褐色	口縁部ヨコナデ	
	55	T-11 SB-06	S	碗	11.5	(1.9)			密	良好	淡灰色	口縁部回転ナデ	
	56	T-11 SB-06	S	甕		(4.0)			密	良好	淡灰色	体部内面タタキ後ナデ	
	57	T-11 SB-06	H	甕		(2.6)			密	良好	淡褐色	内外面ハケメ、端部ヨコナデ	
	58	T-11 SB-06	H	甕		(4.0)			密	良好	茶褐色	内外面ハケメ	
	59	T-11 SB-06	S	坏	15.2	(2.4)			密	やや不良	淡灰色	内外面回転ナデ	
	60	T-11 SB-06SK-35	S	有台坏	14.6	4.0	10.5		密	やや不良	灰色	内外面回転ナデ	
	61	T-11 SB-06SK-36	S	坏		(3.0)			密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ	
62	V-16 SB-07	竈	碗	13.2	(2.3)			密	やや不良	淡灰色	内外面回転ナデ		
63	V-16 SB-07	S	碗		(2.5)			密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ		
64	V-16 SB-07	S	坏		(4.2)			密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ		
65	V-15 SB-08	S	摘み蓋	15.0	3.4		摘み径2.5	密	良好	淡灰色	天井部外面1/2回転ハラケズリ		

図版-遺物No.	地区	遺構	器種	分類	口径	器高	底径	その他	胎土	焼成	色調	調整等	備考
26-66	V-15	SB-08	S	蓋	19.6	(2.1)			密	良好	淡灰色	天井部外面回転ヘラケズリ	
67	V-15	SB-08	S	甕		(2.2)			密	良好	淡灰色	体部内面タキ後ナデ	
68	V-15	SB-09	H	台付甕		(3.4)			密	やや不良	淡褐色	脚部内面指ナデ	
27-69	V-17	SB-10	S	甕		(5.3)			密	良好	淡灰色	体部内面タキ後ナデ	
70	V-17	SB-10	H	甕?		(3.1)			やや粗雑	やや不良	淡灰褐色	内外面摩滅	
71	T-12	SB-11	H	壺/高坏	15.3	(4.2)			密	良好	淡褐色	内外面摩滅	
72	T-12	SB-11	H	小型壺		(1.7)	3.5		密	良好	淡褐色	外面ナデ・指押さえ	
73	T-12	SB-11	H	高坏		(1.7)			密・精良	やや不良	淡赤褐色	脚端部ヨコナデ	
74	T-12	SB-11	H	平底甕	15.4	(3.3)		頸部径 12.8	密	良好	茶褐色	口縁部ヨコナデ	外面煤付着
75	T-12	SB-11	H	甕		(2.8)	5.2		やや粗雑	良好	暗褐色	体部外面タキ痕残る	内面焦げ残る
76	U-13	SB-12	S	坏身	8.6	3.0		受部径 10.4	密	良好	灰色	内外面回転ナデ	
77	U-13	SB-12	S	坏蓋	9.9	(2.8)			密	良好	暗灰色	内外面回転ナデ	
78	U-13	SB-12	S	坏蓋	11.2	(4.0)			密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ	
79	U-13	SB-12	S	坏蓋	11.0	(3.6)			密	不良	淡赤褐色	内外面回転ナデ	土師質
80	U-13	SB-12	S	瓶類	7.8	(1.3)			密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ	内面自然釉
81	U-13	SB-12	S	長頸瓶		(13.6)		頸部径 4.2	密	良好	淡灰色	外面回転ナデ・ヘラケズリ	プラスチック瓶
82	U-13	SB-12	H	甕		(0.9)			密	良好	淡褐色	口縁部ヨコナデ	
83	U-13	SB-12	D	手捏土器	4.5~5.3	3.6			密	良好	淡褐色	内外面指押さえ	底部スサ状圧痕
84	U-13	SB-12SK-230	S	無台坏	10.4	3.7			密	良好	淡灰色	底部外面回転ヘラケズリ	
85	U-13	SB-12SK-230	S	横瓶		(12.0)			密	良好	淡灰色	外面タキ・回転ヘラケズリ	
86	U-13	SB-12SK-230	H	長胴甕	10.8				粗雑	やや不良	淡茶褐色	体部外面ハケメ	平坦底
87	U-13	SB-12SK-222	S	坏身	8.6	3.0		受部径 10.2	密	良好	灰色	底部外面回転ヘラケズリ	
88	U-13	SB-13	S	摘み蓋	14.5	3.9		摘み径 3.0	密	良好	淡灰色	天井部外面1/3回転ヘラケズリ	
89	U-13	SB-13	H	小型壺		(2.2)	4.2		密	良好	淡褐色	体部外面ナデ	
90	U-13	SB-13SK-214	S	坏	13.3	(3.2)			密	良好	灰色	内外面回転ナデ	
91	U-13	SB-13SK-214	S	有台坏	14.7	(4.2)	9.9		やや粗雑	良好	淡灰色	内外面回転ナデ	底部高台より突出
92	U-13	SB-13SK-214	S	蓋	15.6	(2.7)			密	良好	淡灰色	天井外面回転ヘラケズリ	
93	U-14	SB-14	H	小型壺	7.8	(3.8)		頸部径 5.8	密	良好	淡褐色	口縁部ヨコナデ	
94	U-V-14	SB-14	H	壺		(3.2)	7.2		やや粗雑	良好	淡褐色	底部外面未調整	
95	U-14	SB-14	H	高坏	17.0	(8.2)			密	やや不良	淡褐色	内外面摩滅	
96	U-V-14	SB-14	H	高坏		(4.2)			密	良好	赤褐色	内外面ナデ	
28-97	U-14	SB-14	H	高坏		(4.8)			密	やや不良	淡赤褐色	内外面摩滅	
98	U-V-14	SB-14	H	高坏		(8.0)	10.4		密	やや不良	淡褐色	脚部内外面ナデ	
99	U-V-14	SB-14	H	高坏		(4.8)	10.8		密	やや不良	淡赤褐色	内外面摩滅	
100	U-14	SB-14	H	甕		(3.6)			やや粗雑	良好	淡赤褐色	口縁部ヨコナデ、外面タテハケ残る	
101	U-14	SB-14	H	台付甕		(1.8)			密	良好	赤褐色	外面ナデ	102と同一の可能性あり
102	U-14	SB-14	H	台付甕		(5.0)	8.8		密	良好	赤褐色	内外面ナデ	外面に煤付着
103	V-13	SB-15	S	高坏	15.6	12.9	10.2		密	やや不良	淡灰色	坏部外面下半回転ヘラケズリ	
104	U-V-14	SB-15	S	瓶類	11.0	(2.0)			密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ	
105	U-V-14	SB-15	S	瓶類		(5.0)	7.7		密	良好	淡灰色	底部外面回転ヘラケズリ	
106	U-V-13-14	SB-15	H	甕		(2.0)			やや粗雑	良好	淡褐色	外面ハケメ後ナデ	
107	U-14	SB-15	H	平底甕		(2.5)	6.6		やや粗雑	良好	暗褐色	体部外面ハケメ	
108	V-13	SB-15	D	支脚	高さ18.3	底径8.0			やや粗雑	良好	淡赤褐色	ナデ・指押さえによる整形	
109	U-14	SB-15	I	不明	長(15.3)	径0.6~0.7						先端部が緩やかに曲がる	
110	U-14	SB-15SK-276	S	坏蓋		(3.8)			やや粗雑	良好	淡灰色	内外面回転ナデ	
111	AA-13	SB-16	H	壺		(17.9)	5.7	最大径 23.1	密	良好	明褐色	外面ハケメ後粗いヘラミガキ	肩部に飾描横線文
112	AA-13	SB-16	H	壺		(12.3)			密	良好	淡茶褐色	外面ハケメ後粗いヘラミガキ	肩部に飾描横線文
113	AA-13	SB-16	H	複合口縁壺	18.8	(6.4)		頸部径 13.4	やや粗雑	良好	淡茶褐色	口縁部ヨコナデ	
114	AA-13	SB-16	H	小型壺	11.8	(4.7)		頸部径 8.4	密・精良	良好	淡褐色	口縁部ナデ	
115	AA-13	SB-16	H	小型壺	8.6	8.1		最大径 9.3	密	良好	明褐色	体部内外面ナデ・指押さえ	
116	AA-13	SB-16	H	小型壺		(5.5)	4.4	最大径 9.8	密	良好	淡褐色	体部内外面ナデ・指押さえ	
117	AA-13	SB-16	H	高坏	17.8	(6.7)			密	良好	淡茶褐色	内面ヘラミガキ	
118	AA-13	SB-16	H	高坏	17.2	(4.7)			密	良好	淡茶褐色	内面ヘラミガキ	
119	AA-13	SB-16	H	高坏	15.8	(4.3)			密・精良	良好	明褐色	内外面ヨコナデ	
29-120	AA-13	SB-16	H	高坏		(2.7)			密	良好	明褐色	内外面ナデ	
121	AA-13	SB-16	H	高坏		(5.9)			密	良好	淡褐色	脚部外面ナデ	
122	AA-13	SB-16	H	高坏		(7.0)			密	良好	淡褐色	脚部外面ナデ・指押さえ	
123	AA-13	SB-16	H	甕	14.9	(5.0)		頸部径 12.0	密	良好	茶褐色	口縁部内外面ヨコナデ	
124	AA-13	SB-16	H	甕	14.4	(4.0)		頸部径 11.4	密	良好	淡茶褐色	口縁部外面ナデ・指押さえ	
125	AA-13	SB-16	H	台付甕		(3.9)			密	良好	暗茶褐色	脚部内外面ナデ	
126	AA-13	SB-16	H	台付甕		(6.5)	8.5		密	良好	淡茶褐色	脚部内外面ナデ・指押さえ	
127	AA-13	SB-16	H	台付甕		(5.7)	9.8		やや粗雑	良好	明褐色	脚部内面板ナデ	
128	AA-13	SB-16SK-177	H	高坏		(2.2)	11.4		密	良好	淡茶褐色	脚部内外面ヨコナデ	
129	AA-13	SB-16SK-182	H	甕	17.9	(5.2)		頸部径 16.0	密	良好	暗茶褐色	口縁部ヨコナデ	口縁部外面煤付着
130	Z-13	SB-17SK-53	H	甕		(3.7)			密	良好	淡褐色	口縁部内面ヨコハケ	

図版-遺物No	地区	遺構	器種	分類	口径	器高	底径	その他	胎土	焼成	色調	調整等	備考
29-131	AA-13	SB-18	S	碗		(2.9)			密	やや不良	灰白色	底部外面ヘラオコシ	
132	AA-13	SB-18	S	摘み蓋	16.0	3.5		摘み径3.1	密	良好	灰色	天井部外面1/3回転ヘラケズリ	
133	AA-13	SB-19	S	碗	11.8	(3.3)			密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ	
134	AA-13	SB-19	S	有台坏	13.8	3.2	9.1		密	良好	淡灰色	底部外面回転ヘラケズリ	
135	AA-13	SB-19	S	有台坏	13.8	4.2	9.0		密	良好	淡灰色	底部外面回転ヘラケズリ	
136	AA-13	SB-19	S	有台坏	14.0	3.7	10.6		密	良好	淡灰色	底部外面回転ヘラケズリ	
137	AA-13	SB-19	S	摘み蓋		(3.1)		摘み径2.9	密	良好	淡灰色	天井部外面回転ヘラケズリ	
138	AA-13	SB-19	S	摘み蓋		(2.0)		摘み径2.8	密	良好	淡灰色	天井部外面回転ヘラケズリ	
139	AA-13	SB-19	S	蓋	15.8	(1.3)			密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ	
140	AA-13	SB-19	S	盤	16.0	(2.7)			密	良好	淡灰色	底部外面回転ヘラケズリ	
141	AA-13	SB-19	S	盤	20.0	(1.7)			密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ	
142	AA-13	SB-19	S	壺		(3.8)	8.0		密	良好	暗灰色	体部外面回転ヘラケズリ	
143	AA-13	SB-19	S	壺		(6.3)	9.8		密	良好	淡灰色	体部外面回転ヘラケズリ	
144	AA-13	SB-19	S	甌		(6.7)	5.5		密	良好	淡灰色	体部外面下半に緩い回転ヘラケズリ	
145	AA-13	SB-19	S	鉢		(8.1)			密	良好	淡灰色	体部外面に平行タタキが残る	
146	AA-13	SB-19	S	甕	22.7	(4.8)			密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ	
147	AA-13	SB-19	S	甕		(4.4)			密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ	
148	AA-13	SB-19	S	甕		(10.0)			密	良好	灰色	体部外面平行タタキ	
149	AA-13	SB-19	H	甕		(3.0)			密	良好	淡褐色	口縁部ヨコナデ	
150	AA-13	SB-19	H	甕		(0.9)			密	良好	淡褐色	口縁部ヨコナデ	
30-151	Z-13	SB-20	H	複合口縁壺	16.7	(5.1)			密	良好	淡褐色	口縁部ヨコナデ	
152	Z-13	SB-20	H	小型壺	10.2	(5.8)		頸部径7.4	密	やや不良	淡茶褐色	体部外面ヘラミガキか	
153	Z-13	SB-20	H	高坏	19.2	(4.2)			密	良好	淡赤褐色	口縁部ヨコナデ	
154	Z-13	SB-20	H	甕	15.8	(3.6)		頸部径13.4	密	良好	淡褐色	口縁部ヨコナデ	
155	Z-13	SB-20	H	台付甕		(4.9)			密	良好	暗灰褐色	体部外面ナデ	
156	Z-13	SB-20SK-105	H	鉢		(4.1)	4.2		密	やや不良	淡赤褐色	内外面摩滅著しい	
157	Z-13	SB-20SK-105	H	高坏		(8.0)	13.0		密	良好	淡赤褐色	脚部内面シボリ後ヘラケズリ	
158	Z-13	SB-20SK-210	H	小型壺		(2.8)	4.3		密	良好	暗褐色	体部内面ナデ・板ナデ	
159	Z-13	SB-20SK-210	H	高坏		(7.9)	11.8		密	やや不良	淡赤褐色	脚部外面摩滅	
160	Z-13	SB-21	S	碗	9.2	4.1			密	良好	灰色	体部外面下半回転ヘラケズリ	
161	Z-13	SB-21	S	坏身	9.4	(3.1)		受部径11.4	密	良好	淡灰色	体部外面下半回転ヘラケズリ	
162	AA-12	SB-21	S	瓶類	10.4	(5.5)			密	良好	暗灰色	内外面回転ナデ	
163	AA-12	SB-21	S	壺	17.1	(1.6)			密	良好	暗灰色	内外面回転ナデ	
164	AA-12	SB-21	H	甕		(3.0)			やや粗雑	良好	淡赤褐色	口縁部ヨコナデ	
165	AA-12	SB-21	D	製塩土器		(4.5)			密	良好	淡褐色	ナデ・指押さえによる整形	
166	AA-13	SB-22	H	複合口縁壺	17.8	(3.5)			やや粗雑	良好	淡褐色	口縁部ヨコナデ	口縁部内面に羽状の櫛刺突文
167	AA-13	SB-22	H	複合口縁壺	9.2	(2.8)			密	良好	淡赤褐色	口縁部ヨコナデ	
168	AA-12	SB-22	H	直口壺	12.0	(15.9)		最大径16.0	密・精良	良好	淡褐色	口縁部ヨコナデ	
169	AA-12	SB-22	H	広口壺	15.6	(6.1)		頸部径13.6	やや粗雑	良好	淡茶褐色	口縁部ヨコナデ	甕か
170	AA-13	SB-22	H	広口壺	15.4	(21.8)		最大径23.4	密	良好	暗灰褐色	体部外面ナデ・指押さえ	甕か
171	AA-13	SB-22	H	壺		(20.9)	5.4	最大径27.0	密	良好	淡赤褐色	体部内外面板ナデ	
172	AA-12	SB-22	H	壺		(6.8)	7.8		やや粗雑	良好	淡赤褐色	体部外面ナデ	内面剥離著しい
31-173	AA-12	SB-22	H	高坏	15.8	(6.1)			密・精良	良好	淡褐色	口縁部ヨコナデ	
174	AA-12	SB-22	H	高坏		(5.6)			密・精良	良好	淡褐色	口縁部ヨコナデ	
175	AA-12	SB-22	H	高坏		(7.7)	14.6		密・精良	良好	淡褐色	脚部外面ヘラミガキ	
176	AA-13	SB-22	H	高坏		(7.3)	12.1		密・精良	良好	淡褐色	脚部内面ヨコナデ	
177	AA-12	SB-22	H	高坏		(7.9)	11.8		密・精良	良好	淡褐色	脚部内面ヨコナデ	
178	AA-12	SB-22	H	高坏		(7.9)			密	良好	明褐色	脚部内外面摩滅	
179	AA-12	SB-22	H	甕	14.6	(3.6)		頸部径12.4	密	良好	暗茶褐色	口縁部ヨコナデ	
180	AA-13	SB-22	H	甕	16.8	(22.4)	5.0	最大径19.6	密	良好	淡茶褐色	体部外面ナデ・指押さえ	体部外面下半に煤付着
181	AA-12	SB-22	H	甕	15.6	(20.1)		最大径24.8	密	良好	暗褐色	口縁部丁寧なヨコナデ	口縁部-体部外面に煤付着
182	AA-12	SB-22	H	台付甕		(6.4)	9.3		密	良好	淡褐色	脚部内外面ナデ	
183	AA-13	SB-22SK-218	H	台付甕		(3.8)			密	良好	明褐色	脚部内面板ナデ	
184	AA-12	SB-22SK-116	H	高坏		(6.9)			密	良好	淡赤褐色	脚部内面指ナデ	
185	X-14	SB-23	H	甕		(3.2)			密	良好	暗褐色	口縁部ヨコナデ	
186	X-14	SB-23SK-183	H	高坏		(7.0)			密	良好	淡褐色	脚部内外面ヨコナデ	
187	X-14	SB-23SK-183	H	甕		(3.1)			密	良好	淡褐色	体部内面ヨコハケ	
188	X-14	SB-23SK-185	H	壺		(2.4)	4.2		密・精良	良好	淡褐色	内外面ナデ	
189	X-14	SB-23SK-185	H	高坏	20.6	(4.9)			密	良好	淡褐色	内外面摩滅	
190	W-14	SB-23SK-80	H	高坏		(5.3)			密	良好	淡褐色	内外面摩滅	
191	W-14	SB-24	S	坏		(2.5)			密	良好	淡灰色	口縁部回転ナデ	
192	W-14	SB-24	S	蓋		(0.9)			密	良好	淡灰色	口縁部回転ナデ	
193	X-14	SB-24	S	蓋	14.8	(1.7)			密	良好	淡灰色	口縁部回転ナデ	
194	W-14	SB-24	S	瓶類		(1.4)			密	良好	淡灰色	外面回転ナデ	平瓶か
195	AA-11	SB-25	S	坏身	13.0	4.0		受部径15.4	やや粗雑	良好	淡灰色	底部外面1/3回転ヘラケズリ	

図版-遺物No	地区	遺構	器種	分類	口径	器高	底径	その他	胎土	焼成	色調	調整等	備考
31-196	AA-11	SB-25	S	坏身		(2.4)		受部径13.2	密	不良	淡褐色	内外面回転ナデ	
197	AA-11	SB-25	S	坏蓋		(2.7)			密	良好	淡灰色	口縁部回転ナデ	
32-198	AA-11	SB-25	H	甕	17.6	(6.7)		頸部径14.9	粗雑	良好	赤褐色	口縁部ハケメ後ヨコナデ	
199	AA-11	SB-25	H	甕	15.6	(13.9)		頸部径12.2	やや粗雑	良好	暗茶褐色	口縁部ハケメ後ヨコナデ	
200	AA-11	SB-25	H	甕	17.0	(14.2)		頸部径14.6	やや粗雑	良好	暗赤褐色	口縁部ハケメ後ヨコナデ	
201	AA-11	SB-25	H	甕	17.0	(6.8)		頸部径14.4	やや粗雑	良好	暗赤褐色	口縁部ヨコナデ	
202	AA-11	SB-25	H	甕		(8.7)			やや粗雑	良好	暗茶褐色	口縁部ヨコナデ	
203	AA-11	SB-25	D	手捏ね土器	11.2	4.6			密・精良	良好	淡褐色	ナデ・指押さえによる整形	
204	AA-11	SB-25	D	支脚	7.5	11.4	14.5		密	不良	淡灰褐色	ナデ・指押さえによる整形	上部に火を受けた箇所あり
205	AA-11	SB-25	D	支脚	115~120	(9.5)			密・精良	良好	淡褐色	ナデ・指押さえによる整形	
206	AA-11	SB-25	J	深鉢		(4.6)			密	良好	暗茶褐色	半截竹管による半隆起縁文	勝坂式系? 混入
207	V-12	SB-26	S	坏身		(1.6)			密	良好	淡灰色	口縁部回転ナデ	
208	V-12	SB-26	S	壺/瓶類		(1.3)			密	良好	灰褐色	口縁部回転ナデ	
209	V-12	SB-26	R	磨製石斧	長13.6	幅6.0	厚3.1	重量480g				石質-塩基性岩	混入
210	W-15	SB-27	S	坏	14.6	(4.4)			密	良好	淡灰色	口縁部回転ナデ	
211	W-15	SB-27	S	坏	14.4	(2.7)			密	良好	淡灰色	口縁部回転ナデ	
212	W-15	SB-27	S	蓋		(1.8)			密	良好	淡灰色	口縁部回転ナデ	
213	W-15	SB-27	H	甕		(1.3)			やや粗雑	良好	淡褐色	口縁部摩滅	
214	T-14	SB-28	S	摘み蓋	17.2	4.2		摘み径3.0	密	良好	淡灰色	天井部外面1/2回転ヘラケズリ	
215	V-14	SB-30SK-149	S	碗	10.4	(3.3)			密	良好	淡灰色	口縁部回転ナデ	
216	U-14	SB-30SK-263	S	返り蓋	16.8	(2.8)			密	良好	淡灰色	口縁部回転ナデ	
217	U-13	SB-30SK-103	S	瓶類	9.0	(5.2)			密	良好	淡灰色	口縁部回転ナデ	
218	W-14	SB-32SK-16	S	坏身		(1.1)			密	良好	淡灰色	口縁部回転ナデ	
219	W-14	SB-32SK-5	S	坏身	8.3	(1.8)		受部径10.0	やや粗雑	良好	淡灰色	口縁部回転ナデ	
220	W-14	SB-32SK-5	H	壺/甕		(1.6)			やや粗雑	やや不良	淡褐色	口縁部ヨコナデ	
221	V-15	SB-33SK-19	S	碗	8.3	4.2	2.9		密	良好	淡灰色	底部外面回転ヘラケズリ	
222	V-15	SB-33SK-19	S	坏蓋	9.8	(2.6)			密	やや不良	淡灰色	口縁部回転ナデ	
223	V-15	SB-33SK-31	S	坏蓋	9.7	(2.1)			密	良好	暗灰色	口縁部回転ナデ	
224	U-14	SB-33SK-26	S	有台坏		(2.8)	9.0		密	良好	灰色	内外面回転ナデ	
33-225	Y-13	SK-156	H	鍋	29.3	(10.7)			密	良好	暗茶褐色	体部内面板ナデ・ナデ	
226	Y-14	SK-79	I	銭貨	径2.45			重量3.5g					寛永通寶
227	Y-14	SK-79	Z	大皿		(2.3)	9.8		密	良好	淡灰白色	高台部削り出し	染付大皿
228	Y-14	SK-106	T	天目茶碗	12.5	(5.2)			密	良好	灰色	体部外面下半回転ヘラケズリ	鉄釉(Y-14SK-230と接合)
229	Y-14	SK-106	T	甕	41.2	(17.2)			密	良好	赤褐色	口縁部内面ナデ・指押さえ	常滑窯産
230	Y-14	SB-38SK-279	T	甕		(6.7)	15.4		密	良好	淡灰色	体部外面ナデ・指押さえ	常滑窯産
231	Y-14	SB-38SK-279	H	鍋		(3.2)			密	良好	淡乳褐色	口縁部ヨコナデ	内外面に煤付着
232	Y-14	SB-38SK-184	P	小皿	7.9	2.1	4.4		密	良好	淡灰色	底部外面糸切り	
233	Y-14	SB-38SK-184	D	土錘	長(4.2)	最大径1.7	孔径0.4	重量8.6g	密	良好	淡茶褐色	ナデ・指押さえによる整形	
234	Y-14	SB-39SK-177	T	天目茶碗		(5.2)	4.4		密	良好	淡灰褐色	内反り高台	鉄釉
235	Y-14	SB-39SK-177	H	鍋		(7.9)			密	良好	淡灰褐色	体部内面板ナデ	
236	Y-14	SK-169	T	平碗	16.2	(5.7)			密	良好	淡灰褐色	体部外面下半回転ヘラケズリ	内外面に灰釉-古瀬戸
237	Y-14	SK-179	T	小天目	8.7	(2.6)			密	良好	暗灰色	口縁部回転ナデ	鉄釉
238	Y-14	SK-179	T	丸皿	12.3	(2.4)			密	良好	淡褐色	体部外面下半回転ヘラケズリ	内外面に長石釉、鉄絵
239	Y-14	SK-107	T	甕/鉢		(5.3)	20.2		密	良好	淡赤褐色	外面指押さえ後ナデ	素焼き・外面煤付着
240	Y-14	SK-162	R	硯	長7.6	幅3.4	厚(0.7)						石質-凝灰質泥岩?
241	Y-14	SK-230	T	天目茶碗	12.5	(4.7)			密	良好	灰色	口縁部回転ナデ	鉄釉(Y-14SK-106と接合)
242	Y-14	SK-230	H	鍋		(2.9)			密	良好	淡褐色	口縁部ヨコナデ	外面煤付着
243	Y-14	SK-256	T	卸皿	12.2	(2.4)			密	良好	淡灰褐色	口縁部回転ナデ	口縁部に灰釉-古瀬戸
244	Y-14	SK-256	H	小皿	10.4	(1.6)			密	良好	明褐色	外面ナデ・指押さえ	
245	Z-14	SK-174	T	丸皿	11.7	1.9	7.3		密	良好	淡灰褐色	高台部削り出し	内外面に灰釉
246	Z-14	SK-174・181	T	筒形香炉		(3.8)	8.8		密	良好	淡灰褐色	体部外面下半回転ヘラケズリ	鉄釉
247	Z-14	SK-189	T	卸皿	14.7	(3.2)			密	良好	淡灰褐色	口縁部回転ナデ	口縁部に灰釉-古瀬戸
248	Z-14	SK-189	T	壺		(3.5)	8.2		密	良好	淡褐色	高台部削り出し	内面に鉄分付着
249	Z-14	SK-199	P	鉢	29.4	(7.7)		最大径32.8	やや粗雑	良好	暗灰色	体部外面ヘラケズリ	

※器種記号 H-土師器 S-須恵器 K-灰釉陶器 D-土製品 R-石器・石製品 P-灰釉系陶器 T-陶器 Z-磁器 I-金属製品
 J-縄文土器・条痕文土器 Y-弥生土器

法量の単位はcm、()は残存数値。底径には、脚部径や高台径を含む。